ヴスや畫具を買つて、大事な時間を割いてやつとこさで入選して、さて僕に齎らすものは、つまり鯛一疋なんです。君、藝術といふものは惡魔の何かですよ、君はまだ若いんだから、今のうちに何か別の、もう少し安全な渡世の出來る職業に就いたら如何です？……」

五

折谷市郎の言葉は厨戸朝生を、植物なら根こそぎにする程、動かしたのである。無論彼の辯舌はくどくてそした極めて爽かなものではなかつたが、その言ふところの眞實が厨戸の胸を叩いたのに違ひなかつた。これは迚も俺のやうなものがうか〳〵と踏み込んで來る畑ではない、折谷の言葉を借りると渚に足を踏み入れてゐる程度ならば、今のうちに安全な陸に後戻りをするがよい、この大海を命をとられずに渡る者は天才といふ特別の人間で、才のない、唯海が好きだといふ程度の我々は、氣を附けないといつの間にか激しい波にさらはれて、海底深く沈んでしまふ、危い、危い、と警めるのである。厨戸君、僕を見給へ、僕は即ちその溺れた者だ、と折谷は相變らず無表情な顏をして言つたが、心なしか、聲が何となく悲しさうに聞えた。

だが、今更厨戸にしてもおめ〳〵と國に歸つて行く譯には行かなかつた。と言つて、いくら人から人へ紹介狀を貰つて、仕事を探して廻つても、全くこれも折谷の言ふやうに世の中が次第に不景氣になつて來た爲か、六尺近い、力だつて人並にある、善良な、この人間を誰あつて使つてくれようと言ふものが見當らないのである。鐘一つ賣れぬ日はなし、と言はれる程に繁昌な東京中に彼を要するものが何一つないのである、電車の車掌と巡査の外には。しかし、文字通り一日が一日とその日の食に困つて來ると、到底故なしに人の懷や竈を食ひ潰す度胸のない彼は、最早や雷車の車掌でも、外に愈よ仕事がないとすれは、ならうと決心した。だが幾ら廣い東京でも、いつどんな知つた人に會ふかも知れない中で、車掌になることは如何にも二の足が踏まれたので、思ひ切つて、簡單な試驗を受けて巡査教習所に這入つたのである。

そこでも彼の善良性は忽ち周圍の人たちに認められて、誰にも彼は好かれた。それに今迄の場合と違つて、こゝでは中學を卒業してゐる上に、繪の嗜みさへあるといふことが、教習所に於いて遙かに外の同僚たちより優れてゐるので、彼のこれ迄の生涯の經驗として始めて、彼は人

々から多少尊敬さへもされた。だから、彼は巡査が覺えねばならぬ簡單な法律をも擊劍をも、教練をもすべて熱心にやつたので、上役の人々からも目を掛けられた。唯一つ、誠に都合が惡いことは、巡査として可成り重要な條件であるところの、言語の明晰を缺く點であつた。普通なら、どうかするとこの缺點だけで巡査としての役目を果すことが出來ないと言ふので、折角二ケ月なり三ケ月なり教習所の飯を食ひながら、罷免せられることさへあつたのだつた。だが今も言つた通り、上役の人たちから彼は隨分愛されてゐたお蔭で、三ケ月後には交通巡査に採用されることになつた。

ところが、半月もしないうちに、彼の訥辯はその交通巡査にもどうしても不向きであることが發見されて、愈よやつぱり罷免になりさうだつたが、又上役の一人で世話する人があつて、彼は風俗係の刑事に採用されることになつたのである。これは段々困つたことになつて來たな刑事は厭だな、と彼は心の中で二三度も思つて、その度に自分の方から辭職を申し出したい氣になつた位であつたが、それ程迄に世話してくれる人の好意に對して、持前の弱さからついず

るく〳〵になつて、彼は愈よ下谷署の風俗係の刑事の辭令を受取つたのであつた。そこで、どうして、彼が風俗係の刑事として第一日を勤めたゞけで止めることになつたか？　それを諸君に話してこの物語は終るのである。

厨戸朝生が風俗係刑事として、始めて下谷警察署の扉を開いたのは三月の初旬の日のことであつた。そこで署長と會つて、これからは色々とお骨折を願ひたいとか、それには始終巡査と聯絡をとつて貰ひたいとか、或ひは自分の受持以外の事でも、廣く警察の目から見て不審な人物なり事件なりに出遭つた時には應分の探偵をして戴きたいとか、色々あつた末、さて署長が言ふには「いづれ段々とそのうちに馴れて來られたら色々な仕事をお願ひするでせうが、先づ始めは實に馬鹿々々しいやうな仕事ですが、上野公園の夜間の風俗の取締をしていたゞきたいのです。で、當分は毎日夕方日の暮れる前に一應本署に立寄つて、それから公園内の交番を根據地にして活動して下さい。」と言ふのは、それから厨戸が公園内の巡査交番所に行つて、日の暮れるのを待つて、交番を出て公園内の彼方此方の、なるべく通り路から離れた木の蔭とか、草

原とか、つまりあの廣い公園の中だが、大抵のところには要所々々に瓦斯燈が點つてゐるからどんな人通りの少ない路でも、その光の屆かないやうな暗い場所はない。けれどもたまには木の蔭になつてゐたり、土手の麓になつてゐたりして全く人目を離れた所がある、警察から貰つた地圖を見ると、御叮嚀にも大體さういふ場所には、筆の軸を朱肉に浸した奴でポツポツと印がつけてあるので、探して廻る必要がなかつたが、さて厨戸の仕事といふのはその朱丸を施してある場所に、日の暮れ方に出かけて行つて、適當な場所に用意の黑い布切を敷いて、怪しい二人連の人間の來るのを見張りするのである、そして此方の張つてゐる網に掛つた男女を引捕へて、交番まで連れて行つて說諭したり、或ひは中には密淫賣などがあるから、さういふ者なら容赦なく拘留處分にするといふ仕事なのである。そしてそれ等の男女の性名を用意の手帳に書留めて、毎日警察署まで報告するのであるが、署長の言ふには、一件でも件數の多い方がつまり成績の上つた證據であるから、無論賞與とか昇級に影響があると言ふのである。

そこで彼は研究所時代にこしらへた軍艦絽紗の吊鐘マントを着て、全く暮れ切つてしまつた

上野公園の博物館の裏手を目指して出かけたが、途々昨日まで歩いた同じ上野公園に違ひはない。そして俺も亦昔のまゝの厨戸朝生に違ひない。だが……だが、さうではない、一切の狀態が變つてしまつた、といふやうに思はれて仕方がないのである。今方銅像脇の交番を出る時に「ぢや、さ……」と、後のさよならと言ふ言葉が吃りさうだつたので、さう言つた切りで、輕く帽子を取つて挨拶すると、髯武者の恐らくは折谷よりももつと年上かと思はれる年頃の巡査が極めて自然な恰好をして、擧手の禮を返したが、すると厨戸はあわてゝ自分の方も帽子に手を擧げかけたものだ。そして氣がついてその手で帽子の恰好を直して立去りながら、兵隊の擧手と巡査の擧手とは何處か要領が違ふなアと思つたことである、だが、巡査が自分に何故禮をしたかと怪むどころか、それが五年も十年も前からの習慣のやうな氣がした、が、即ち俺は刑事なんだとはつきり思ふと忽ち變な氣持になるのである。さう思ふと、人通りの少ない公園だが、たまにすれ違ふ人が彼の方を見てぎよつとするやうに見えるのである。すると彼が今この世に於て、今迄の三十年間が悉く閑却された位置にあつたのに反して、仲々汗

る人物になつたやうな氣がして、冷々する夜氣と共に身心が引き締まる思もするのであ

そして漸く目指して來た場所に着いて、懷から用意の敷物用の黑い布切を木蔭の草の

いて、署長に注意された通り大地にその大きな體を横たへたところが、すると何だか町に

車が走り、犬が歩き、人々が通つてゐるところの、この世の中にゐるやうな氣がしなくなつて

今斯うして草の上に寢そべつて、犬の樣に四邊の樣子を窺つてゐる刑事の厨戸朝生は、あの兵

隊になつたり、研究所に通つたり、通信事務員になつたり、その間種々樣々の苦勞をして、一

人前の畫家にならうとして三十歲になつた彼と、同じ厨戸朝生か知ら？　と怪しまれて來た。

東京の三月上旬の夜の公園の空氣は彼の故里の山梨縣の春を思はせるに十分である。彼は少

年の頃そこで近所の腕白友達と始終盜坊ごつこをして遊んだことを思ひ出した。その頃の三ち

やんや、次郎ちやんや、權ちやんの顏がありありと目に浮ぶのである。……神樣、厨戸朝生は

これからどうなつて行くのですか？　と彼は急に泣きさうな氣になつて、斯う心の中で叫んだ

ものである。

その時、カサ、カサ、と忽ち彼の耳を兎のやうに聳立たせたところの、確に人の足音が起つて來たのである。彼は一切の事を忘れて、身體中の神經を耳と目に集めて、音のする方に注意した。彼のゐる場所から十數間も離れたところを通じてゐる小路から、彼もその中に身を隱してゐるところの、立入ることを禁じてある草原の中に這入つて、彼のゐる近くの土手と木立の蔭になつてゐる方角に向つて、正に二人の男女がひそ〳〵と話し合ひながら歩いて來るのである。二人の人影が時々木の枝と枝との間にそれと窺はれるのである。彼の心臟はづきん〳〵と鳴り出した。彼は役目も何も忘れて、彼がこれ迄の長い生涯の間に一度も經驗したことのない斯ういふ羨むべき、不屈きな行動をむさぼり樂む男女に對して、叩きのめしてやりたいやうな嫉妬を感じたものである。彼は幾度も唾を呑み込んでは息をこらした。だが、これが俺の職業なのかな、變だな、とその次にちらと考へたが、そのうちに彼と二間と隔たない場所に來て、ぴたりといつの間にか立止まつた男女の、甘い囁き聲などがはつきりと聞えて來ると、彼は暗闇の中でだが、顏が眞赤に火照るのを感じながら、益々體中がいら〳〵するやうな嫉妬を感じ

た。すると又不思議なものだな、警察なんてゐらいもんだな、警察の地圖に筆の軸で朱肉の印をつけた場所に、きつかり間違ひなく男女がやつて來るとは！　大したものだな、と一瞬間一寸感心したが、忽ち又彼方の現實の男女の氣配に彼ははつとして兎のやうに耳を聳てた。そしていくら見詰めても灌木の繁みと夜の暗さで彼方が見える筈はないのだが、それにも拘らずきら〳〵と目を輝かしながら、仕切りなしに唾を呑み込み呑み込みしたのだが、いくらさうしても心臓のづきん〳〵と打つ音は少しも鎭まらないのである。

……突然、彼は脫兎の如く、隱れてゐた場所から飛び出して、この男女の傍に現れたのである。彼等がどんなに驚きあわてたか、それは諸君も十分想像することが出來るであらう。さて、その中に勢よく飛込んだまではよかつたが、久しくさういふ激しい場面に出遭つたことのない厨戸は、「こら！」と言はうとして、「こ、こ、こ、」と、失敗つた。と思つて焦れば焦る程吶鳴りつける言葉が出ないのである。かねて署長から、「君は少し吃る癖があるさうですが、なアに今度の役目はさう聲を出さなくてもよいので、默つて最寄の交番へ引立てゝ、後の說諭の方

は巡査に任してしまつて宜しい、」と言はれてゐたのだが、まだその運びに至らないうちに斯ういふ失敗を生んだのである。彼は咄嗟の間に、相手の男が自分を輕蔑して飛掛つて來はしないかと心配したが、相手の男女は又厨戸以上に面喰つてゐる場合なので、厨戸の吃音を嗤ふどころか、何と言はれたのかさへ聞かなかつた程であつた。「と、と、とも角も交番まで來い、」と言つて厨戸はなるべく相手に顏を見られないやうに、あらぬ方に顏を反向けながら言つたが、遲れ走せに氣が付いて、俺は下谷署の風俗係の刑事だ、と帶の間に挾んであつた紐の附いた刑事の鑑札を取出した、が、無論暗い中で何が何だか、誰にもよく見えなかつた。

「濟みません、濟みません、」とやつとの事で身裝などを取繕つて、男の方が無暗に頭を下げながら言つた、「私たちは普通の夫婦なんでございます。……」

だが、この時はまだ厨戸の方でも胸の動悸が治まらないので、相手の言ふことを一々聞き分けてゐる能力がなかつた。唯やうやく吃音が止まつた位のところで、「兎に角、一應交番まで來給へ、」と言つて、相手が逃げ出さない程度で注意しながら歩き出した。その邊は徹頭徹尾刑事

の心持になり切つてゐたものであつた。相手の男女も唯犬のやうに恐縮してゐるきりで、到底逃げ出すなどゝいふ勇氣を持ち合はせないらしく、厨戸の一二歩後から、先程までの様子とはけろりと變つて、二人は二尺程の間隔を取つて白々しく離れて歩いて來た。

「旦那、」とそして歩きながら男は後から、厨戸に向つて泣き出しさうな聲で言ふのである、「旦那、私どもは當り前の夫婦なんです、ちやんと役場にも届けてある夫婦なんです、」とくり返しくり返し同じことを言ふのである。

それには耳をかさないで、大凡半町ばかりも默つて歩いてゐたが、餘り繰り返して同じことを言ふので、厨戸は煩ささうに振り返つて、「當り前の夫婦が」と先から吃らないやうに口の中で十遍もくり返してゐた言葉をやつと吐き出した、「當り前の夫婦がどうしてあんなところへ出かけて來たんだ?」

「それがでございます、」と男は言ふのである、「私は砲兵工廠の職工でございます。私の家は直この近くの日暮里でございます。私の家は三疊と六疊の二間切りで、そこに親父夫婦と貴夫

婦と弟二人と乳飲兒が二人、親父の子と兄貴の子です。それに私ども夫婦でせう、家内は去年の暮に貰つたのでございます。それも何も私が無理に貰はうとしたのでも、家内が無理に來ようとした譯でもないので、家内もやつぱり工廠に行くのですが、仲々よく稼ぎますので、同じく職工をして居ります親父が、一人でも稼ぎ手を増やしたいといふのと、私の身を固めたいといふのとで貰つてくれたのですが、兄貴は大反對なのでした。けれども親父が到頭言ひ張りましたので、この家内が來ることになつたのです。私とこれとは從兄妹同志なんでございます。……」

善良で、正直な風俗係刑事はいつの間にか歩調を緩めて、この職工と並んで歩きながら、彼の一語毎に「ふむ、ふむ、」と合槌を打つて、今し方暗闇の木蔭で彼等の睦言に耳を傾けたのと同じ熱心さで傾聽したことであつた、「それで……?」と相手の言葉が切れさうになると、彼の方から催促したものである。

「私も、家内も、」と職工は可成りな雄辯で話しつゞけるのである。自分からこんなことを言ふ

と何ですが、隨分よく稼ぎます方で、二人で確に人の三人分は儲けるのでございます。それを親父がみんな取上げて、私どもにはまるで小遣錢もくれないのでございます。もつともそれは私どもだけに辛く當る譯ではございません、親父は兄夫婦にもやつぱり嚴しいのですが、それで兄夫婦はいつも親父にがみがみ言はれる、とその仕返しに私どもに當り返すものですから、私どもは親が二人あるやうに苦しい目を見てゐるのでございます。そこへもつて來て、今も申したやうな小さな家の中でせう、私どもは家の中でゆつくり話し合ふことも出來ません上に、恥かしいお話でございますが、碌に夫婦の情合も結べないやうな譯で、而も旦那、これでこんなところへ參りますのもたつた二度目なんでございます。親父が喧ましくて、仲々斯うして二人で外で出會ふことだつて容易なこつちやないのです。旦那、どうぞして、夫婦が別居して住めるやうに、お上のお力でして貰ふ譯には參りませんでせうか。兄夫婦だつて、始終私どもを苛めますが、元はと言ふと、そんな譯からだと私は思ふんですが……いゝえ、さうしてもどうにか斯うにか食べて行げる位にはみんな働ける身體なんです。親父だつて隨分のお金を儲けるんです、その上に相當の貯金もしてゐるんです。……」

その時三人は丁度博物館の前の通りを歩いてゐたが、行先に交番の赤い灯が見えて來たところで、厨戸刑事は急に立止つて、「よし、お前の言ふことはよく分つた。何とか夫婦が別々に住めるやうに、いづれ取計らつてやらう、」と氣安めの出鱈目を言つて、「ぢや、それにしてもこれから氣を附けて、あゝ言ふ不體裁なことをしないやうにしないと不可んぞ。今日は堪忍してやるから歸り給へ。」

そして厨戸はぺこ〳〵と乞食のやうにお辭儀をしてから、美術學校の方角へ歸つて行く職工の夫婦を見送つてから、又一人でぶらぶらと元來た道の方へ引返して行つた。餘り足を早めて歩くと先の夫婦に追附きそうになるので、成るべくゆつくりと歩いて、やがて圖書館の前に出るところで、ベンチを見付けて腰を下ろした。取止めもなく、なる程可哀さうな夫婦もあるものだ、などと考へてゐると、彼等の狹い家の中を想像したり、すると同じやうに狹い家で困つてゐた者があつたが、誰だつたかな？　と暫く考へてから、やつとして、それは折谷から聞い

たお金の家のことだつた、お金はどうしてるだらう？　と今度はお金のことを考へたりした。

さうして彼は長い間吊鐘マントで自分と自分の體を抱くやうにして、しつかりと上半身を包みながら、ぼんやりとベンチに腰かけてゐた。そして取止めもなく、極めてぼんやりとではあるが、泰西の畫家の名に憧れて、生れて始めて這入る圖書館に行つて、地下室の下足室でまごついたり、借り出しの方法を二度も三度も係りの者に尋ねたりして、畫を見に行つたことや、やがて又折谷に分けて貰つた仕事の畫の模様を參考するために一週間程つゞけてそこに通つたことや、かと思ふと、何でもどうかしてこの學校の學生になりたい、あの門をあの學校の學生として自由自在にくゞりたいと少年らしい希望に燃えながら、始めて美術學校を見て、門の前にぽかんとして立ち盡した日のことや、すると又ずつと飛んで三年間の砲兵時代のことなどを思出すともなく思出してゐると、その時上野の鐘がボーン、と何時を告げるのか知らないが、鳴り出したのである。

これはいけない、俺の今の身分は、と氣が附くと、忽ち署長の顏、今先巡査らしい敬禮をした、署長より立派な交番の髯武者の巡査の顏、それから自分の帶の間に挾んである刑事の鑑札のこと、などを思ひ出して、彼は念の爲にその帶の間の鑑札を手に探つて見ながら　博物館裏の先程の場所に進んで行つた。先の男女が又來てやしないかな、又彼等と顏を合はすと彼等も狼狽するだらうが、此方も困る、だが、まさか未だ公園の中をうろついてるにしても、先と同じところには來はすまい、それに直間の署長の話にも、「この地圖の」と例の地圖を示しながら「丸點を二重に附けてあるところなら、一晩でも二晩でも、一人捉まへてそれを交番に送つて行つたら、直又元の所へ引返して見張つてゐても差支へない、どうかすると、引返して來るともうちやんと後の組が來てゐることがある位です、アハハ、」と鼻紙を揉むやうな音を立てゝ笑つたのを思ひ出して、厨戸は、さうだ、當分あそこと定めておかうと獨言ちながら、何の氣もなく小路の兩側に附けてあるところの、とある柵を飛び越えて、その土手と木立とで二重に影になつてゐる二重丸の印の場所の二三間手前まで來た時である、突然彼が思はず立歩まつて、而も二三歩後ずさりした程彼を驚かした。何か動物か大きな鳥か、急に人の足音に驚いで飛び

出したやうな物音が起つたのである。そして一分間經つてぱた〳〵と彼が來た方とは反對の方角にその物音の主が一二間駈け出した時に、彼は始めて何の事だい！　と氣が附いた、夜目によくは見別けられなかつたが、明らかに先の男女とは違つて、二人とも背の高い、もつと身上のよささうな一對の男女が逃げ出したのである。咄嗟の事なので、そのうちに又一分經つて、彼等の姿が向ふの別の木立の蔭に消えた時分に、こら！　とその時なら確に吃らないで叫べるとは思つたが、氣を拔かれた厨戸刑事は元の驚かされた位置に立つたまゝ、ぽかんとしてゐて又一分以上經つてしまつたのである。彼はその時妙に咽喉の邊がむづ痒いやうな氣持がして、高笑ひしたくなつたが、辛抱してにつと唇だけで笑つて、それから何といふことなく、一時間程の間に二對の男女が陣を取つた場所の跡を、腰を曲げてのぞいて見た。すると又妙に彼等の行跡がいま〳〵しくなつて來て、彼はそこから二間ばかり離れた、先に彼自身が陣取つた灌木の蔭に、再び黑い布切を敷いて、丈高いので長々と寢そべる譯には行かないが、體を丸く縮曲めて、今度こそはと大いに力瘤を入れて息をこらしてゐたのである。二十分もした時分に、

カサカサと待ちもうけた音がして來た。丁度彼は寒さと氣拔けと退屈とで思はず大きな欠伸を半分し掛つてゐた時で、突然、案外近くの、始めの時のやうに路の方からではなく、大分ずつと先から草原に入り込んでゐた者らしく、左手の土手の上に足音が聞えて來たのである。先からの續きで、何だか無暗に彼は氣分がくしや〳〵して、腹が立つてゐたので、今度こそ愈よといふ場で飛び出したら、署長も場合に依つては一つ位歐つてもいゝと言つてゐたから、本當に歐り付けてやらう、それも男の方でなく女の方の、白く淦つたむち〳〵した柔かい頰べたをぴしやりとやつてやらうと思つた。すると女が泣き出す、どんな聲で泣くだらうなどと更に體を固め丸く縮めて息をこらしながら思つてゐると、急に彼の心臟がこつんと止まつたやうな氣がしたのである。と言ふのは、段々彼の蹲つてゐた場所に近づいて來た男女の、ぼそ〳〵言ふ話聲が、ぼそ〳〵ではなく箇性を持ち始めて來ると、その女の方の聲が先づ彼の耳をはつと打つたのである。そして次の瞬間には男の方の聲も彼を打つたのである、そして彼の心臟がこつんと止まつたやうな氣がした譯なのである。

彼は龜のやうにぐつと、幾寸も延びないその太い首を延ばして、終には耳に手を當てがつて聞いてゐたが、やつぱりどうしても二人とも聞き覺えのある、間違ひなく彼等の聲なのである。よく似た聲があるものだな、しかし……いや、幾ら何でもこれは似た聲ではない、確に彼等だ、と思つてゐるうちに、當の男女はもう彼の二間ばかり先の、例の警察の地圖に二重丸の印の附けてある場所、土手と木蔭とが二重に蔭になつてゐるところに來てゐた。まして「私、厨戸さんと……」と確に女の聲が彼の名前を彼等の會話に挾んだ時は、厨戸刑事は思はず暗闇の中でぐつと首を縮めた。さうだ、やつぱりさうだつたと思つて、彼はいつか全身にびつしより汗を吹き出しながら、兩手で頭をかゝへてしまつた。が、そんな近くに刑事になつて窺つてゐるとは知らない二人の密會者は、諸君はもう彼等を十分知つてゐるであらう、つまり折谷市郎とモデル娘のお金とは、喋々喃々と語りつゞけたのである。

だから、逃げ出す譯には行かず、と言つてまさか先の職工夫婦の時のやうに、飛び出す譯には行かず、進退谷まつて彼は彼等が目の先の暗の中にゐた殆ど小一時間の間を、或ひは彼等の

會話を聞くまいとして、兩手の指で耳を抑へたり或ひは兩手を拳にして汗を握つたり、さうして彼等が悠々とその場を立ち去つてしまつたまで、彼はそこに石のやうに轉がつてゐたのである。

それで諸君も十分想像されたであらうと思ふ。つまり厨戸朝生はその翌日、刑事の職を忽ち止めて、それから二三日後には飯田町の停車場から、故郷の山梨縣に歸る汽車に乗つた譯である。

この話の始に書いた、厨戸朝生、といふ名前が言はれたら、彼の友達が皆頓に笑を浮べると私が話した譯も、それが非常に輕蔑した笑でもなく、又非常に悲壯を感じたそれでもないと言つたことも、これだけの話を讀んで自ら諸君は諸君の顏に浮かぶ笑で、それがどんなものであるかと言ふことを幾分感じられることだらうと思ふ。（九・九）

桃色の封筒

澁紙色の顏をして海岸の避暑地から歸つて來た或知人の話に――

あなた、御存知でせう、山元瀨藏君を？……さうですか、一二度お會ひになつた事がある切り？　それではまだお分りにならないでせうが、山元君には一寸人と變つたところがありますよ、お氣がお附きになりませんか、彼には變な癖がありますよ。いゝえ、成程、あの丸々した油ぎつた、目の細い、鼻のまん丸い、愛嬌のある、ぶく〳〵太つた身體に關係があると言へば大いにあるんですよ、だが、癖といふのはそれぢやありません、それは例へば往來などで會つた時、「やあ、暫く……」と言ふやうな場合ですね。さういふ時とか、或ひは家の中で向ひ合つて話をしてゐた時にしても、彼には無暗に相手の身體に觸る癖があるんですよ、その癖なんです、お氣がお附きになりませんか？

ところが、それだけの事なら、別に話し立てる程の事ぢやありませんが、彼のは、その觸り方が、といふよりも觸られた相手の感じが、普通の男に觸られたのと全然違つた感じを受けることなんです。さあ、その感じと言ふのは、何と言つたら分りますかな、早い話が、まあ女に

觸られたときの感じに似てゐますかな？　いや、違ひます、違ひます、女だつてこつ〳〵した男のやうな骨張つた感じを與へるものが隨分あります、と言つて、そんなら膏肥りに肥つた女が皆さうかといふと、さうでもありまん。肥つてゐるばかりで大根にでも觸られるやうな感じのするのも珍しくありません。兎に角、一口には言ひ現はすことが出來ませんが、山元君に背中を一つ二つとん〳〵と叩かれると、如何な硬骨漢もぐにやりと軟化するといつたやうな性質のものなんです。

その癖、御存知でせう？　見たところは、女のやうな、といふよりも、背丈だつて五尺四寸はたつぷりありますしね、至つて毛深い方で、鼻の下に生やしてゐる髭だつて、チヤツプリン型に刈り込んではゐますものの、もく〳〵と機關車の煙突から出る煙見たいに黒く固まつてゐるでせう、が、又さう言へば、あん　太つた身體をしてゐる癖に、無恰好に見える程撫で肩なところなど一寸變つてゐますがね。それよりも私の考として、何よりも見落してならない事は、彼の實に手先の器用な點ですよ、あの男の隱し藝の手品をあなたは見たことがありますか？　御覽にならない、それや遺憾ですね、實にうまいものですよ、手品師などといふものにもあれでそれ〳〵天分などといふものがあるに違ないといふことが分りますね。今度機會があつたら、山元君に手品をして見せてくれと要求して御覽なさい、氣輕な男ですから、屹度すぐにやつて見せますよ。それや實にうまいもんですよ、それに驚くべきことは、二尺と離れないところに對座してゐて、始めに種明かしをして貰つてから、やつて貰ふんですが、それで見ゐる者に決してぼろを見せないといふのですから、その手先の運び方のあざやかさは略々想像がつくでせう。

一二年前のことですが、こんな話があつたんですよ。彼の友達で滑川乙丸といふ、飄輕な人がありますね。あゝ、さうですか、あなたの中學時代のお友達ですか、あゝ、さうですか、滑川さんの御紹介であなたは山元君とお知り合ひになつたんですか？　ぢやあ、この話は滑川さんには内所ですよ、屹度内所にしといて下さい。或時、山元君と滑川君とで淺草へ活動寫眞を見に行つたんださうです。まだ、男女の席が別々にならなかつた時分のことですよ、滿員だつ

たものですから、無論物にかまはない書生時分のことで三等へ這入つたんでせう。で、大勢の人にもまれて立つてゐたんださうです。さうすると、丁度山元君と滑川君と三角の位置になるところに、十八九の一寸した體裁の女がゐたんださうです。

ふと、山元君が氣がつくと、寫眞が映り出して、あたりが暗くなると、自分の手を鼠のやうにこそ〳〵と撫でるものがあるんださうです。元よりさういふ事には人一倍に敏感な男ですから、先程から連の滑川君が妙にそわ〳〵して、その鼠族に近い敏捷な目をちらちらと例の女に投げては、身體をもぢ〳〵さして、時々山元君が何か話しかけてもとんちんかんな返事ばかりするのに注意してゐた矢先ですから、これはてつきり滑川が例の女の手と俺の手とを間違へて探りに來てゐるのだな、と氣がつきますと、忽ち持前のいたづら氣が起つて來たものですね、山元君は一寸逃げるやうな振をして見たり、又一寸握つてほしさうに、滑川君の手が觸つて來てもぢつとしてゐたり、だが、恥かしいわ、といふやうな表情をしてみたり、それを悉く、よく戀の表現を目や身體の形に現すといふ話がありますが、山元君はそれを暗闇の中の手に表現

さしたのです。先に私が長々と山元君の手の話をした意味がお分りになつたでせう。これは、この藝常は確に山元君の外には誰も出來ない、彼の獨壇場ですからな。

無論、成功したんですよ。一つの寫眞が終つて、パッと場内が一時に明るくなると、滑川君と女との、實は滑川君と山元君との、手の活動が丁度その活動寫眞が中途で切れた時のやうに無慘に中斷されてしまふのです。そして滑川君はいくらか顔を赤くして、幾分か吃つた口調で「仲々面白い寫眞だね、」とか、「變に蒸し暑いね。」とか、さういふ言葉を實に不自然に言ふのです、「さうだね、」と山元君は答へながら、實際は、滑川君以上に、早く次の寫眞が映り始めて、あたりが暗くなるのを待つたに違ひありません。

こゝで、滑川といふ人があゝ言ふ性質の人でなかつたら、大して珍しい話ではないかも知れません、あの人の性格は、中學時代からのお友達なら、私よりもあなたの方がよく御存知でせう、何しろあの人が、あんな細心な、氣の廻りの早い、神經の過敏過ぎるやうな、だから身體だつて山元君の半分しかない小男のあの滑川君が、ね、不斷は滑川君は山元君のことをまるで

驢馬か何かのやうに輕蔑してゐますね。それがその時は物の見事に擔がれた譯なんです。山元君に言はせますと、段々と暗の中の手の方の活動が接戰して來るに連れて、滑川君の一生懸命の呼吸の急しい音さへ聞えて來て、終には氣の毒になつて來たといふことです。だが、山元君にしても、善良な山元君のことですから、實際、中途で氣の毒になつて、そのいたづらを中止したいと思ひ立つたに違ひありません、が、今更狀態の進行上中止する譯には行かなくなつたに違ひありません。そして、暗の中の滑川君の手と女のそれに化けた山元君の手とが、到頭親密に握り合つた譯なのです。ところで、話はそれだけぢやないのです。

愈よ手を握り合つて次の、芝居でいふと幕間の時ですな、山元君が默つて氣をつけてゐると滑川君が頻りに自分の袂の中や懷を探つてゐるのです。そしてやつと、一枚の皺になつた鼻紙を見付け出して、それを叮嚀に延ばしてから、山元君に向つて、君、萬年筆か鉛筆かを持つてゐないか？　といふのです。はゝあ、あの女に手紙を書いてやるつもりだな、と山元君は氣がつきましたが、何にも言はずに萬年筆を貸してやりますと、滑川君はその鼻紙の切れ端に何だ

かこそ〳〵と認めて、さてビリ〳〵と笛が鳴つて、あたりが暗くなると、その鼻紙の手紙を女に渡したものです。女即ち山元君だつたから堪りません。その次に喜劇物の寫眞が一つあつてそれが濟むと彼等はそこを出たのですが、出て半町ほど行つたところで、滑川君が、「君、僕は今急に思ひ出したんだが、一昨日親類から法事に來いと言ふ葉書を受取つてゐたんだが、それが今日なんだ。あゝ、少し時間が遲いが、何にしても今思ひ出してよかつた、」と傍白のやうに言つて、「君、失敬だが、親類は下谷だから、僕、あそこから俥に乘る、ぢや、失敬、」と言ふので、「さうか、ぢや、失敬、明日でも又遊びに來給へ、」と山元君も言つて、そして別れたんださうです。

山元君は何だか妙に自分のした惡戲が恐くなつて來て、大急ぎで電車に飛び乘つてから、例の活動小屋の中で滑川君に渡された手紙といふのを讀んで見ると、十時まで公園の池のまん中の、亭のとこで待つてゐます、といふ意味のことが、彼が貸してやつた彼の萬年筆で走り書してあつたさうです。「僕は妙に恐いやら、氣の毒なやら、今ならあれからもう隨分月日が經つて

ゐるからいゝだらうが、到頭あの時の眞相を滑川に打明けずにしまつたよ。」と山元君は言つてましたが、して見ると、滑川さんはその晩公園の池のまん中の亭のところで、十時が十一時までもぼかんと待つてゐたに違ひありません。變だな、どうしたんだらうな、女なんて分らないものだな、確にさつきは俺の手を隨分堅く握り返したやうだつたがな？　などと思ひながら……。だが、この話は内所にしといて下さい、先にも申しました通り、言ふのは罪ですからな。

これは話が飛んだ餘談になりましたが、まあ、大體さう言つた風な、山元君には　と變つた癖、といふよりは、人と一ところ變つた身體の組織があるといふことを、斷つておく代りに申上げた挿話なんですが。ところで、今度私たち、山元君と私と、外に四五人、その人たちは大抵私たちよりは三歳四歳下の、學生達なんですが、同勢六七人でK――海岸へ避暑に出かけたと思つて下さい

K――は去年汽車がそこ迄開通しましたので、昔と違つて今年なぞは何處の宿屋も滿員といふ素晴らしい景氣でしたが、我々は元より書生流儀で、十疊と八疊の部屋を二間打通しで借り切つて、そこに七人で共同生活をしたものです。海岸には葦簾張りの簡單なカフェーのやうなものや、汁粉屋や、一寸した晝食などの出來る小料理屋のやうなものやが、丁度棟割長屋のやうな體裁で軒を竝べて、各々赤い旗や青い幟に屋號や商賣品の名を書いたのが、如何にも夏の海岸の繁昌を示すやうと、海の風にひら〳〵してゐるのです。その中に『リリイ』といふ一軒のカフェーがあつたのです。カフェーと云つたつて、買置きの果物と菓子の外に、飲物と言へばサイダアとかシトロンとか、瓶詰のビールとか、水にシロップを交せた珈琲糖位のもので、それだけでは別に我々の注意を引く何物をも持たない譯なんですが、實はそこにそんな物が一つもなくても、十分我々を引き寄せるものがあつたのです。斯ういへばもうお分りでせう、女なのです。

その女といふのが、一通りのカフェー女ではないのです。名前を先に言つて置きませう、百合子さんと言ふんですがね、それで屋號にもカフェー・リリイといふ名を附けたんでせう、我

我もいつとなくリリイさんと呼び習はすやうになりましたがね、そのリリイさんといふ女は、斯うお話したらお分りになるでせうが、そのカフエーの主人で、兼ねてエートレスの役目をも務めてゐたのです。外にもう一人、これは本當フエーの雇ひ女で、その近在の百姓の娘なんでせう、下宿屋の女中のやうな、十五六の女が助に來て居りましたがね。リリイさんは何でも淺草の府立女學校の卒業生なんださうです。本當か嘘かそこのところは保證は出來ませんが、學校にゐた時分から不良少女で、發賣禁止の小説ばかり買集めて耽讀して、先生から注意されたり、こんな事は多分本當でせう、不良少年の大將になつたりした擧句、實は學校の方は卒業問際に退學に處せられたんださうです。これも本當なんでせう。そして帝劇の女優を志願したと言ふのです。本當か嘘か、そこの所保證が出來ないと言つたのはこの點で、彼女の言ふところに依りますと、それは第一期生の募集に應じたといふんですから、無論森律子や村田嘉久子などとは友達だつたと言ひます。もつとも彼女等の性質や、癖や、顔や形のことを隨分詳しく話しますから、或ひは本當かも知りませんが、近頃の女

は本當の事より嘘の事の方がうまく話しますからね、的にはなりません。

そのうちに、あんまり、どうも身持がおさまらないらしいので、到頭去年の冬だつたかに、彼女は親の家へ呼び歸されたんださうです。親の家といふのは、別にこれと言つて商賣はしてゐませんが、可成りな財産家らしいのです。隨分あの邊では、おや、言ひ忘れましたが、その彼女の親の家といふのがそのK——海岸にあつたのです、一寸目立つやうな立派な家ですからね。しかし兎に角東京では帝劇の女優は嘘にしても、氣儘に面白いことの有りつたけをしたものでせうからね、あの立派な家に呼び戻されたつて、牢屋以上に窮屈だつたでせうね、もつとも始めのうちは一度とか二度とか、飛び出したこともあつたさうですが。まあそのうちにいつとなく落着いて、この半年程の間は大人しくしてゐたんでせう、ところが何と思つたのか、この夏の始めに今言つた海岸にカフエーを開店したいと何ケ月ぶりかの駄々をこね出したんです。土地ではちやんとした家でせうからね、まさか娘に海岸で前掛を掛けて、いくら道樂とは言ひながら、商賣をさせる譯には行かないでせうが、今度は誰が何と言つて止めても、まるで

大事な男でも出來たやうな調子で、これを聞いてくれなければ、死ぬの生きるの飛び出すのと言ふ騒なんださうです。で、兄といふ人も思ひ切つて、今では父親がなくて、母親がゐて、そして一番上の兄といふ人が跡を繼いでゐたんださうです、彼女の願を入れてやつた、とまあ、さういふ經歴の女なのです。

顔ですか？　さあ、ね、どの位のとこですか……無論、もつとも十人並ですがね、私なぞあゝ言ふ顔は嫌ひですね。どつちかつて言ふと、丸ぽちやの、肉附きのいゝ、ゴム鞠のやうにふか〳〵した色の白い女です。その時は氣が附きませんでしたが、今考へて見ますと、あれは山元君の理想の型だつたんですね、山元君が彼女を形容する時が見物ですよ、あの細い目をまるで一本の皺のやうに細くしてしまつて、兩手の掌を上に向けて、何かその上に林檎とか手鞠とか、さういふ丸い物でも載せてゐるやうな恰好をしながら、ポチヤポチヤ、クル〳〵してゐて可愛いぢやはいか、ハハハハハ、と何とも言へぬ可愛らしさうに、相恰をくづして笑ひながら言ふのです。さういふと、これも後で氣が付いたのですが、何かの話の折に、その女にポンと

肩何かを叩かれた時に、此方の受ける感じが、先にお話しました、山元君に觸られるのとおんなじ感じがしました。

「山元君、君こそよつ程あの女に參つてるね、」と誰かゞ言ふと、彼はにこ〳〵、にこ〳〵目を皺にして笑ひながら、

「それや、無論、僕は好きだよ、」と當り前のやうに言ふのです、「鈴石萬三郎君がなければ、早速僕が文を附けるね。」

これは山元君が一番正直に言つただけの話で、實の所、多少の相違はありますが、その時K――に出かけた私たちの連中は、みんなこの女を好いてゐたものです。始めのうちはさうでもなかつた者でも、遂には七人が七人とも可成り眞劍になつて惚れたものです。やつぱり何處かに、さういふ不良少女になる位の女ですから、口に言へない魅力があつたんでせうね。年ですか？　二十一だといつてましたが、二十三四だつたでせうね。先に私が説明しましたゞけだと一寸小柄の女らしく思へるかも知れませんが、何方かといふと大柄の方なんです。大柄だつて

丸ぽちやだつて、女の若さは雪景色のやうなもので、殊にそれが十人並の縹緻の持主で、東京の本場で不良少女と言はれた位ですから、何處にどんな魅力があると詰問されると困りますが、何處となしに何とも言へぬ男を引きつける力があるのです。白狀しますが、無論山元君のみならず、私も大いに彼女に興味を持ちました。私たちより三歳四歳年下の連中は又連中で、彼女の懐に抱いて欲しい、といふやうな、少年によくある、言はゞ姉さんを慕ふやうに慕つたものです。だが、それ等の少年たちは言ふに及ばず、私にしても、當の山元瀬藏君にしても、實は彼女の方では取卷連中といふ扱ひで、つまり芝居の役割で言ふと、その他大ぜい、と言ふ格で問題の人物ぢやなかつたのです。そんなら問題の人物は誰か、といふと、それが今話した鈴石萬三郎なんです。

私たち外の者はK——で始めて知り合ひになつたのですが、山元君は鈴石君とはこれ迄東京で二三度友達の家か何かで顔を合はした間柄なんです。何しろ貴家と小説家ですからね、職業から言つても友達の譯です。もつとも山元君は二十三歳で鈴石萬三郎、御存知でせう、あの小

説家の、あの人は三十一歳とかですから、年は大分違ふのですが。今度K——で私たちの泊つた家の、すぐ隣の宿屋に彼は泊つてゐたのです。もつともそれだけならあんなに親しくはならなかつたでせうが、そこから海水浴に一日に何遍となしに私たちが海の方へ出かけて行つたんですが、その度毎に例のカフエー・リリイに寄つたものなんです。すると、そこで屹度彼に會つたものなんです。彼のはひどいのです、海なんぞには三日に一度這入るか這入らない位なんですからね。それで、リリイには毎日何度となしに、いや、彼がK——滞在中最も多くの時間を費したのは、宿屋でよりもリリイでだと言つた方が當つてゐるかも知れません。

彼の小説は御承知でも顔は御存知ないでせうがね、私なぞはどうもあの感じを好きませんね、男前は十分好男子に屬するのでせうがね。それに背も高いし、無髯で、目のくり〳〵した子供らしい感じのする、それでゐて何處となく傲然としてゐて、俺程の好男子は一寸外に類がある まい、と言つたやうな顔をしてゐる男です。男前さへ好ければ必ず女に持てると信じてゐるらしいところは、小説家なんて案外甘いもんですね、まだ獨身ださうです。私なぞのやうな素人

にはよく分りませんが、あんな自惚れのあるうちは、まだ〳〵女なんて書けないだらうと思ひますが、どうでせう？　ところで、さうして私たちがいつも七人の賑かな連中で、どや〳〵とリリイに押しかけて行きますと、そこの、いつでも、汽船會社の石版畫のビラの懸つてゐる、隅の方の壁、と言つても簾建ですが、その下の小さい卓子に倚り掛つて、その恰好が又いつでも畫にかいたやうに同じなんです。卵色の洋服を着てゐるんですがね、その洋服を着て、虫のペッタのやうな長い脚をゆつたりと組み合して、右腕で肘を突いて、その右手の拇指と人差指で顔の寸法を計るやうな恰好に頬杖を突いたものです。そして左手でビイルの杯を輕く握つてゐるのです。一日に何度行つても、曇つた日でも晴れた日でも、据ゑ付けられたやうに同じ恰好をしてゐるのです。その恰好を私たち、殊に少年連中は氣障だ、と言つて好かないと言ふのです。實際、何も言へず氣障なのです、が、それだけならまだいゝのです。

私たちが海水浴の行き歸りに、どうかすると海水浴を止めて、大勢で唱歌などを歌ひながら思ひ思ひに、カフエー・リリイの卓子に着きますと、定つて例の隅の方の椅子にもたれて、ち

びり〳〵と麥酒の杯を傾けてゐる鈴石萬三郎が、私たちの仲間の最年長者、と言つても當時二十三歳の山元君だけには、一寸唇を突き出して、それを下にではなく、天井の方に上げるといふ仕方の會釋をするのです。そしてその外の者をば全然無視したものです。場所がカフエー・リリイでない時はさうでもないのですが、そこでは萬事がそんな風に無暗に威張つた風をするのです。お前たち子供の友ではないぞ、と言つた風に見せかけるのです。それが私たちにさう見せるといふよりは、その態度を百合子に見せようとするらしいのです、が、それだけならまだしも辛抱が出來るのです。

そこで、私たちが、或者はサイダアだとか、或者は珈琲だとか、又別の者が麥酒だとかと百合子さんに注文しますと、それを一々鈴石が横から口を出して、「おい、リリイさん、珈琲だとさ、」とか、「リリイさん、誰某君のとこへは麥酒を出して上げな、」とか、悉く亭主然として見せるのです。そして、それが實際に亭主の位置にゐたのなら、それは我々だつて、いくら癪に觸つても、何とも言へない譯なのですが、實はさうではないのです。或時百合子が山元君に、「私

あの鈴石といふ奴、本當にいけ好かないわ。彼奴、始終私にいやアな事ばつかり言ひかけたり、毎日會つてる癖にわざ〳〵家の方へ手紙を寄越したりするのよ、」と言つたものです。

それを聞くと、我々の少年連は思はず「萬歳！」と叫びましたね。それからといふものは、イ芝だつて決して遠慮はしてゐませんでしたが、益々鈴石君を輕蔑して、それに此方は何といつても大勢なんですからね、そこへもつて來て、當のリリイさんが我々の方へ應援したものですから鈴石君も堪りませんよ。ところが、百合子はその應援する言葉として、慶應の普通部の學生の三ちやんが一番無邪氣だから、私大好きだわとか、一高の學生の高良君の男らしい樣子が好いたらしいわとか、色々と鈴石君の脈がるやうなことを言ふのです。だが、それが鈴石君を脈がらせると共に、その時その時に引合ひに出された三ちやんや高良君を如何に無上に嬉しがらしたかは、想像が付くでせう。私なぞはそれを見てるますと、心のうちで百合子を憎んだものです。如何に不良少女とは言ひながら、さういふ罪のない少年連に、その場その場の出鱈目を言つて、その出鱈目を眞に受ける無邪氣な少年たちの心にしみを附けて行くのは、ねえ、

怪しからんぢやありませんか？　それを山元君に私は或時そつと洩らして、大いに憤慨しますと、山元君はいつも變らぬ善良な表情をした丸い鼻をくつ〳〵鳴らして目を絲のやうに細くしながら、「大丈夫だよ、三ちやんや高良君がまさか失戀して自殺するやうなことはあるまい、アハハハハ、」と笑ふのです。なる程、彼等が失戀して自殺するやうな氣遣はないでせう、私も妙に苦勞性な人間ですね。

ところで、到頭次のやうな事件が起つたのです。「諸君、素的に面白いことがあるんだよ、これを見給へ、」と或日山元君が宿でみんなが夕飯の膳の前に坐つた時、あのまん丸い鼻に嬉しさうな皺を寄せながら、一通の水色の封筒に這入つた手紙を見せました、「三ちやん、これを讀み上げて見給へ、」と言はれて、三ちやんは元氣よくお箸を持つたまゝの手でそれを拾ひ上げて、小學生が讀本を讀むやうに讀み上げたものです、『……今夜の八時頃に××の妙見樣のお堂のところに待つてゐますから、僕を信用して、是非そこ迄お運び下さい。僕は山元の連中のやうな不良少年ではありません、僕は一個の紳士です。決して淑女に對する禮を失ふやうな事はし

ないことを誓ひます。……鈴石萬三郎。わが星とも景慕する百合子の君へ。二伸、御都合の程を是非お返事だけはいたゞきたう存じます。』

「ワハハハハ、」と一同が聲を上げて笑ふ聲と拍手が一緒に起つたものです。それにつゞいて、

「山元君、どうしてそれを手に入れたんです、本當ですか、本當の鈴石萬三郎の手紙ですか？」

と二三人の聲が聞きました。

「本當だよ。」と山元君は善人のみが持つことの出來る、善人らしい明るい、無邪氣な笑ひ方で笑ひながら言ひました、「……どうしたつて？　リリイちやんから手に入れたんだよ。」と言ふと、

「山元さん、怪しいな、」

「ヒヤ〳〵、」などと少年たちのまぜつ返す聲などが起りました。

「大丈夫だよ、と山元君は言つて、「ところで、素的に面白いことがあるんだよ、といふのはあのリリイちやんとこのお鶴さんね、」（お鶴といふのは百合子の家の女中で、兼ねてカフエー・リリイに百合子に附いて來て、給仕女の役を勤めてゐる、少し足りないかと思はれる女なのです。）「あのお鶴さんにこの返事をとゞけて貰ふことになつたんだ。いや、それだけでは分らないが、この手紙の中にある××の妙見堂へ、鈴石の注文の八時に出かけるといふ返事を、リリイちやんに書いてもらつて、」と言ひながら、桃色の封筒に這入つた手紙を浴衣の懷から出して、みんなの方に見せながら、「こゝに持つてゐるんだ、これをあのお鶴さんに、鈴石のところへ持たしてやるんだ。……」

「それや面白い、」と第一番に飯を食ひ終つた三ちやんが膳の前から立上つて、山元君の傍に行つて、その桃色の封筒を手に取つて見ながら言ひました。

「すると、」山元君は話をつゞけるのです、「あの鈴石の助平野郎、屹度その手紙を見ると、有頂天になつて今夜の八時に××の妙見堂へ出かけて行くに定つてるだらう。ところが、その妙見堂では一人我々の中から誰かゞ女になつて、つまりリリイちやんに化けるんだね、女の裝をして待ち伏せてゐて、彼をおびき寄せるんだ。その時外の連中は皆あの妙見堂の椽の下に隱れて

あて、鈴石が甘くなつてお堂のところまで來た時、一度にワーツと叫んで飛び出す、と斯ういふ趣好なんだ。……」

「面白い、面白い！」ともうその時は悉く飯を食ひ終つてゐたところの、みんなの者は手を拍つて飛上りましたが、誰がその女になるんだ、俺たちは駄目だよ。…「三ちやんがいゝだらう、」

「いやアなこつた。」

「高良君は？」

「やつぱり山元さんだよ。山元さんに限るよ。」

山元君は前以て、自分がその女形になるつもりであつたかと思へる程、譯なくみんなの勸めを受け入れて、ぢや、もう少しゝて、暗くなりかけたら、僕はリリイちやんとこへ行つて、白粉なぞを借りて附けて、彼女の着物を借りて着て來るから、みんなもその時分には妙見堂で待つてゝくれ給へ。八時といふ約束だから、七時半頃には向ふに行つてなければならないよ、」

「よしよし、」とみんなは大喜びで答へました。

「だけど、山元さん、」と三ちやんが言ひました、「女に化けるつたつて、頭をどうする、困るだらう？」

「いや、何とかうまく工夫するよ、」と山元君が言ひました。それから色々あつて、やがて山元君は一人で、「ぢや、ぽつ〳〵妙見堂へ行つてゝくれ給へ。鈴石に氣附かれちや駄目だよ、」と言ひ殘して出て行きました。

「山元さん、百合ちやん大丈夫かい、山元さん一人でうまくやるんぢやないかい？」などと或者はひやかして言ひました。

それから先は山元君の話ですから、保證は出來ませんよ。が、まあ、大體は嘘ぢやないでせう。何でも畫間のうちに百合子ちやんと謀し合はしてあつたとかで、彼女の家の裏手の丘の上に上つて、母屋の裏の方にある二階建の離家を見たんださうです。それが彼女の部屋なんださうですが、そこにまだ畫間のまゝに簾が掛つてゐます。山元君との約束では、その簾を卷き上げるのを合圖に裏門から這入つて來てくれ、と斯ういふのださうです。そこで山元君は丘の上

からその簾ばかり見詰めてゐたんださうですが、空には俗に土地の人たちが鰯雲と呼んでゐる眞赤な夕燒の名殘がまだ殘つてゐて、時々頭の上の木立でカナ〳〵蟬が鳴く外には、一枚の木の葉もそよがない程、むつとして風がないのださうです。だから、合圖の簾が、時々此方が自分の目を疑つて、見定めたくなる程、それが雨戸ではないかと怪まれる位に、一搖すれもしないのです。流石に、向ふの方の海岸に目をやると、その中の一軒が百合子のカフエーであるところの、簾張りの長屋も、彼方此方に立つてゐる旗や幟も、そこらを歩いてゐる如何にも都からの海水浴の客らしい男女の群と共に、生々と悉く動いてゐるやうに見えるのださうですが、山元君の立つてゐる丘の下の邊は、その中に百合子の家が岩のやうに立つてゐるのですが、その邊の畑に、たとへ一人や二人の百姓が肥料桶を擔いで動いてゐても、牛を追つて歩いてゐても、悉く風を失つた木の葉と共にとろりと沈んだものゝやうに見えるのです。と、その時、山元君がはつとした、といふのは、そこの離家の簾が卷き上げられさへしたら、大急ぎで彼自身がそこに行かうとしてゐたところの、百合子の家の裏門の前に、ぽつんと現はれ出たやうに一人

の男が立つて居るのです。それは何も地の中から湧き出した譯ではないのでせうが、山元君が一寸他所見をしてゐるうちに、そこへやつて來たものに相違ないのです。そしてそれが鈴石萬三郎だつたので、山元君は一層驚いた譯なのでせう。

山元君ははツとして、その場に蹲んでしまつたさうですが、やがて向ふから此方に氣が付く筈がないと氣がつきましたので、いつとなく木の影の幹の後に身を隱すやうにして、殆ど目瞬きもしないで樣子を窺つてゐますと、鈴石も亦何かを待つてゐる樣子で、到頭その場に蹲んでしまつたものださうです。見てゐるうちに山元君は變に一種の嫉妬が心に感じられて、何の事だ、あの百合子の奴、晝間自分にいゝ加減なことを言つたんだな、そして鈴石にも同じやうに出鱈目を言つておいて、そして何處かゝら望遠鏡でも持つて、自分と鈴石が斯うして別々の所でぼんやりと待つてゐるのを見て笑つてゐるんぢやないかな？　さう思ふと、鈴石は一人だが、此方は自分だけでなく、大勢の友達を妙見堂に待たしてあることなどが考へ出されて、心がやきもきして來ました。いつその事、こゝからあの離家を目がけて石でも三つ位投げつけて、妙

見堂にゐる友達の言ひ譯にしようか、いや、いや、晝間にあれ程……と思ひ直してゐる時、突然向ふの門の前に蹲んでゐた鈴石が立ち上つたかと思ふと、門が開いて、どき〳〵と打つ胸を抑へて、せはしく息を吐いてゐる山元君の目にうつつたのは、門から出て來たのは、例の薄のろのお鶴ちやんです、で。ほつと安心して尙暫くじつと息を凝らして見てゐますと、お鶴が一言二言鈴石に何か話した樣子でしたが、するといそ〳〵と鈴石が歸つて行つた樣子なんです。

その途端、離家の二階の簾がする〳〵と卷き上げられました。卷き上げるのは、丘の上から見る山元君の目に、間違ひなく、見覺えのある、荒い瀧縞に水玉を飛模樣に置いた中形を着た百合子なのです。山元君はそれを見屆けると、身體を丸くして、横つ飛びに飛んで行つたと言ひます。無論、晝間の約束通り彼はそれから五分後には彼女の化粧部屋に通されて「さあ、私がちやんと化粧も何もさして上げますから、」と彼女は身體の割合に、細い、可愛らしい持前の聲で言ひました「さあ、恥かしがらないで、裸におなりなさい。恥かしがらなくてもいゝぢやないの？　さあ、素裸におなりなさい。」

さうなると、男と女とは、二人とも多分二十三か四で同じ年だと思ひますが、小學校の先生と生徒程の違がありますからね。それに驚いたことには、さうする事が、山元君よりも、或ひは又妙見堂に待つてゐる惡戯子たちよりも、誰よりも彼女がひどく愉快らしく、見ると鏡臺の前には、白粉とか紅とかは言ふ迄もなく、水刷毛も牡丹刷毛も、水の這入つた金盥も、タオルも、クリームも、香水も、何から何まですつかり用意して並べてあつたさうですし、傍の衣桁には今夜女裝する山元君のための、着物から帶から腰のものまで、それに頭の恰好をごまかすための海水浴帽までもちやんとそろへてあつたさうです。さあ、これからの話は當人の山元君でなければ、代辯ではうまく行きませんね、くるりと山元君があの色こそ白くはありませんが、むつちりとした、きめの細かい、丸々した裸の背中を彼女の方に向けますと、彼女はそのすべ〳〵した手で一面に、前は臍の邊から後は大方お尻の邊までも、白粉下を撫すり附けた上に、その後からぴちやり〳〵と水刷毛に白粉を溶かした水を滴るやうに含ましたやつで、べた〳〵と糊でも引くやうに撫で廻すのださうです。ひやりひやりとその刷毛が膚の上を通つて行く跡

が冷たくて、その度にきゆつと首が縮まるやうな思をするのが、それが又何とも言へぬいゝ氣持なんださうです。あんまり刷毛に白粉のとき水をたつぷり含ませてやるものですから膚に刷毛を落す度に、つうつと滴が筋を引い　身體を傳つて垂れるのが、心持が悪いので、あゝ、と彼がその度毎に小さく叫び聲を上げると、彼女は權威を持つた聲で、

「靜にしてらつしやい、後でちやんとして上げるからさ、」とたしなめるやうに言つて、山の言葉を借りて言ひますと、「まるで子供が蒟蒻を玩具にするやうな鹽梅で、」それからは水を捨てゝ、ぢかに彼女の手で身體中の白粉を附ける部分を撫で廻したり、かと思ふと牡丹で無暗矢鱈に叩き廻つたり、そして愈よ肝腎の顏の化粧　取掛つた時分は可成り疲れて來たと見えて、彼の前に廻つて、手がだるいから、あなた下から私の手を持ち上げてゝ頂戴な、と言つてさうさせたり、山元君が固くなつて坐つてゐる膝の上に遠慮なく膝を載せかけて、まるで彫刻師が被造物の彫刻の手入をする時のやうに、人間扱にしないのださうです。無論山元君は彫刻ぢやありませんから、彼女の汗ばんだ身體の熱や、吐く息の臭や、それに彼女は腋臭だつ

たさうですから、その臭やを、傍若無人に嗅がされたものださうです。そんな事をしてゐるんですから、いくら暑くても、部屋を開け放つ譯には行きません。山元君だつて、鼻の頭と言はず、頸筋と言はず、じり〳〵と汗を掻くでせう、すると、あゝ、又仕樣がないわね、直に汗でよごれてしまつて、と言つては彼女は邪慳に手と牡丹刷毛でそこのところを叩き直すんださうです。それに蚊いぶしの線香の爲に部屋の中はむせ返るやうに煙でつまつてゐるんださうです。

さうして一通り化粧が了ると、さあ、今度は着物、と言つて彼女は立上つて、豫め用意してあつた衣桁に掛けてあつた着物の方へ進んで行きまして、「さあ、女になるんですから、」と言つて、腰の物からすつかり髪へさせるのはいゝのですが、「あなた、あなた、そこでぢつと立つてたらいゝのよ、ぢつと立つてらつしやいと言ふのに！」と大いに權威を以て言つて、何から何までですつかり、まるで人形に着物を着せるやうに、自分で着せてやるんださうです。もつともうその時は山元君の方でも段々に馴れて、多少度胸が出來てゐたものですから、ぢつと棒の

やうに立つてゐると、突然、衣桁から外して來た着物をすつくりと疊の上に投げ出して、「さうだ、」と獨言のやうに言ひますには、「やつぱり改まつた裝などすると却つて變だわ。それに海水帽など被つて行くんですもの、私のこの不斷の浴衣の方がいゝわ、」と言ふうちに、彼女自身くる〳〵と早業のやうに帶を解いて、すぽりと今迄自分の着てゐた、可成りしつとりと汗げで、生溫さの感じられる瀧縞の中形を脫いで、それを山元君の後から抱きすくめるやうにせて、すこし氣持が惡くつても我慢なさいな、ね、ね、いゝでせう？」と後から背延びして元君の顏をのぞき込むやうにして言つて、「一寸、一寸動いちやあいけないことよ。後見ちやあ厭よ、私裸なんですもの、一寸ぢつとしてらつしやい、」と言つて、衣桁から投げ捨てゝあつた着更への着物を手早く自分の身體に引つ掛けると、「もういゝわ、」と言つて、自分は帶もしないで、今度は山元君の帶を締めに掛つたものださうです。そして、やつとの事で仕度がすつかり出來上ると、「さあ、これで出來たわ、いゝ女になつたでせう、」と言つたかと思ふと、彼女は突然後から飛び附くやうに、小鳥のやうな早さで山元君の頰に接吻して、ぽんと一つ背中を叩い

「さあ、行つてらつしやい、うまくやるんですよ、」と言ふのださうです。さう言つて、丁度活動寫眞の一幕が終つたやうに、彼女はかちりと電燈[illegible]ねつたのださうです。その時まで少しづゝ大膽になつて、この傍若無人な彼女の仕方に對して何かその仕返へしをしてやらうなどと腹の中で考へてゐた山元君は、それと共にさつと照らし出された電燈の光に忽ちまぶしさと恥かしさとを感じて、畏縮してしまつて、他愛もなく彼女の言葉に、兵隊のやうに從順に「ぢやあ、行つて來ます、」と挨拶して、彼女の家を出ましたところで、厚化粧の白粉のために硬張つて感じられる顏に、そよ〳〵と吹いて來る夕風と、すつかり暮れ切つた夜の空氣とに會つて、その瞬間、彼は鈴石のことも、妙見堂に待つてゐる連中のことも、悉く煙のやうに亡れて、ほつと生き返つたやうな息を吐いたさうです。……

つまり、それだけの、一時間餘りの間を、私たち後の連中は、御丁寧に、うつかりその邊でがや〳〵騒いでゐるところを鈴石に見られては、折角の計畫が何にもならないと言ふので、妙見樣の高い椽の下に蹲んで、藪蚊に攻められながら、こそ〳〵聲をひそめて馬鹿話をしながら

待つてゐたものなのです。そこへ、私たちにも無論十分見覺えのある、瀧縞の中形を着た、何だか變に元氣のない山元君の姿を見出した時には、思はず喜びの聲を上げましたが、それに續いて高良君が、「どうしたの、山元さん、妙に悄氣てゐるぢやないの？」と聞きました「さうかい、」と聲は不斷の快活な聲で、山元君が言ひますには、「何しろ白粉で顏が硬張つて、あんき物を言ふと、壁見たいにひゞが入りさうなんだよ。」それでみんなは椽の下でどつと笑ひました。

「しつ！」と誰かゞ言ひました、「もう鈴石が來る時分だから、大人しくしてなければ……」

「さうだ、さうだ、」と別の者が言ひました、「山元君、もう少しこゝから離れてる方がよかないい？」

それから五分と經たない時のことでした。

「しツ！」と山元君が椽の下に向つて聲をひそめて言ひました、「來たやうだよ。」

ところで、私たちの這入つてゐた椽の下といふのは、その上までに六七段の段梯子が附いてゐる位ですから、立つて歩くことは出來ない迄も、隨分高いのです。それに私はみんなの一番端の、丁度建物の角になつてゐるところにゐましたので、そこに中腰になつて蹲んでゐながらずつと向ふの力まで見張らせるのです。月の無い夜と言つても、海岸のことですから全くの暗ではありませんしするので、ふと見ると、白地の浴衣で、此方に向つて、確に鈴石萬三郎らしい人物がやつて來るのが見えるのです。萬三郎は煙草をすつて居るのです。だからその火が、彼が一すひする毎に、ぱつぱつと螢の火のやうに見えるのです、そして近づいて來るのです。

さうなると、敵を待ち受けてゐる兵隊の心持と少しも變らないに違ひありません、十二分に緊張してしまつて、今自分たちの企てゝゐることがほんの惡戯であるなどといふことは全然忘れてしまふのに違ひありません。胸に動悸さへ打ち始めました。私のみならず、無論、椽の下の少年たちも同じ思ひだつたに違ひありません。その證據に、彼等は先程までとは違つて、さゝやき聲一つ立てず、彼等の吐く息の音だけが聞えるのです。

ところが、當の山元君が最も大膽でした、といふのは、彼は先の樣子とはすつかり打つ一

つて、いつの間に見覺えたのか、心持ち肩を振つて歩く百合子の歩き方の通りを眞似て、彼の方を指して來る鈴石を迎へるやうにずん〳〵と向ふの方へ歩いて行くのです。私たちはらはらしました、「いけないな、いけないな、」「どうしたんでせう？」「大膽だな、」とその時始めて椽の下の連中は小聲で言ひ合ひました。しかし、それは杞憂に過ぎませんでした、といふのは、或る程度まで、山元君は迎へに進んで行つたところで　一寸立止まりまして　ポンポンと二度ばかり輕く手を叩いて。それから反對にくるりと踵を廻らして、我々のゐる妙見堂の方へそろそろと引歸し始めました、そして二三歩毎に鈴石の方を振返つて、一寸手招きをしたり、輕く手を拍つたりして、彼を呼ぶのです。鈴石のすひながら來るのは、葉卷と見えて、依然としてパッパッと螢の火のやうに煙草の火が息をするのが見えて、それを喞えてゐる者が、次第に足を早めて來るのさへ、椽の下からはつきり見えるのです。

私たちの始の計畫でば、彼を妙見堂のずつと奥の邊までおびき寄せて、そして頃を見計らつてわつと椽の下から飛び出して、それで彼の逃路をふさいで、私たちの方が先に宿屋に走つて歸るといふことになつてゐたのです。そして、彼がすごすごと町へ歸つて來たところで、もう一度わーつと宿屋の二階からはやし立てることになつて　たのでした。ところが、彼が妙見堂の三四間手前まで來た時です、實は私は餘り自分たちのしてゐる惡戯が慘酷なものであることを感じ始めてゐましたので、その時、もうその時は煙草をすふ拍子にパッとその火が明るくなると共に、はつきり眞赤に見える彼の顏が見てゐられなくなつたものですから、「山元君！」と一聲、しかし小さい聲で呼びかけたのです。それと殆ど一緒位に、椽の下の外の連中が「シッ！」とたしなめた、その舌を鳴らす聲が、可成り高く響いたものです。途端に、それは、兎のやうだとも、水鳥のやうだとも、何とも言へぬ早さで、一目散に逃げ出した鈴石の恰好と言つたら、繪にも文字にも書けません。みんなが「わーッ！」と言つて椽の下から飛び出した時には、もう鈴石の姿は見えなくなつてゐた、と言つても間違ひではありません。……

話はもう少しあるのです。もう少しですから、してしまひませう。

ところで、先の事があつてからは、妙に私たちの連中は大人しくなつてしまひました。鈴石

君が如何に、溝に落ちたやうに悄げた恰好をしてゐたかは言ふ迄もありません。彼もそれからはカフエー・リリイにはちつとも姿を見せませんでしたし、我々の連中も、たまに山元君が出かけて行く外は、急にカフエーへは行かなくなりました。無論、鈴石君と道で遭つても、顔を反らすやうになりました。唯山元君だけ、昔からの友達でもあるからでせうが、一寸立話をする位のところでした。今になつて、みんなそれ〴〵K――海岸を引上げて、東京で顔を見合はすやうになつた今なら、大いに笑ひながらあの晩の話は、あの時の連中が二人寄つたらするに違ひありませんが、その當座は誰も妙にあの話に觸れないやうにした位です。別に何も法律に觸れるやうな惡い事をした譯ではありませんが、だがそれよりももつと惡い事をしたやうな氣になつただけは確ですね。流石に年少の連中でさへ、言はず語らずのうちに一種の後悔の念に打たれたものと見えました。外の話には隨分これ迄通り笑つたり騒いだりしましたが、あの事だけには決して觸れないやうにしてゐたのは事實です。唯、少しも變らないらしいのは百合子です、百合子は我々の行動が急に變つたのを異しく思つたのに違ひありません。だから、始終

あの薄のろの女中のお鶴を使に寄遣して、山元君に手紙で持つて、みんながどうして來てくれないのか、と催促して來ました。そして、先にも言つたやうに、山元君だけが時々「惡いよ、一遍行つてやらうぢやないか、」と言つて、一人か二人友達を引つ張つて、然し大抵は一人で出かけて行く位のことでした。唯、そのお蔭で、鈴石君も例でもそれから、やつと白いまゝになつてゐた原稿紙を汚して、小説を一つ書き上げたやうですし、何でも『夏の日の戀』といふ、一寸評判になつた、センチメンタルな小説がありましたね、あれがあの時書いた小説ださうです。山元君もそれから何だか大きな畫を始めたやうでした。

そして九月になつたのですが、そのうちに學校の始まる日も近づいたものですから、連中はそれ〴〵三度ほどに、二人位づつ連れ立つて歸つて行きました。私は學校はありませんが、家から急に歸つてくれといふ手紙に接しましたので、高良君と一緒に歸りました。鈴石君も、書き上げた原稿を持つて、私の歸る二三日前に一人で歸つて行きました。そして山元君が一番後に唯一人殘つたのです。畫きかけた大きな畫が出來上るまでゐると言つてゐました。だから、

誰が歸る時にも、私なども結局送つたり送られたりした方ですが、山元君だけは徹頭徹尾送り通しだつた譯です。ところが、K――の停車場まで送つて行つて、プラットフォームに出て、東京行の汽車に乗り込んだ友達に向つて、窓越しに山元君は屹度、

「これ、つまらないものだけど餞別に、」と言つて、歸つて行く友達に一人づゝ、白い半巾に葉書十枚分位の大きさの紙のやうなものを包んだものを渡すのです、「だけど、一つ約束があるんだ、といふのはその半巾の包を今直に開かないといふことを約束してくれ給へ、しかし、汽車が出て、暫く行くと隧道があるだらう、あの隧道を拔けさへすれば、それから先は東京へ歸つてからであらうと、汽車の中であらうと、何處で開いて中を見てくれてもいゝよ、」と斯ういふのです。誰が歸る時でもさうなのです。山元君は屹度プラットフォームまで送つて行つて、一人一人に、いつも同じ半巾の包を餞別に送るのです。唯一度だけ、私があれは何なんだ？　と聞いたことがありましたが、

「どうせ、君も僕より先に歸るだらう、」と山元君は目を細くして笑ひながら言ふのです、「その

時には君にも是非送るよ、」と言つて、そのものが何であるかを明かさないのです。そして、到頭僕も貰ひました。私は高良君と一緒だつたのですが、正直に汽車が隧道に這入るのを待ち兼ねて、隧道の中で半巾の包を解いておいて、パつと汽車が隧道を出ると共に、私も高良君も左手に半巾を、そして右手にはそれに包まれてゐたペサ〳〵した西洋紙の紙切を掴んでゐましたが、何の事だ！　それは二人とも桃色の、既に封を切つた手紙の反古なんです、「何だ、こんなもの、」と言ひながら、ふとその表裏に書かれてある文字を見て、「おや！」と二人とも一緒に聲を上げて叫びました。それは二人とものが同じ、日附だけが違つた、百合子から山元に宛てられた手紙なんです。もうお分りになつたでせう、それは百合子から山元君へのラヴ・レターなんです、驚きましたね。もつともラヴ・レターと言ふよりも、どれもこれも逢引の時間を約束した手紙なんです。何といふ私たちも迂濶者だつたのでせう、アハハハハ……

後で聞くと、我々には皆同じ百合子からの手紙だけだつたのですが、鈴石君には、その外に鈴石君から百合子に送つた手紙を、彼女から貰つて、入れておいたんださうです。「いつから、

君は彼女とさういふ怪しからん仲になッたんだ？」とその時私が山元君に尋ねますと、彼はいつもながらの愉快極まる顔をして、

「あの、化粧をして貰ひに行つた時からだよ、」と言つて、笑つてゐました。

「君も隨分ひどい事をするね、」と私も仕様がないので、附き合ひ笑ひをしながら言ひますと、

「ところが君、」と山元君も一寸眞面目な顔になつて言ひますには、「愈よ、僕がリリイちやんに別れて、K――を引上ける時のことだつたがね、プラットフォームまで百合ちやんが送つて來てくれて、さて發車の鈴が鳴つて、汽車が動き出したと思ひ給へ、すると、少しづゝ動き出した汽車に附いて、「あゝ、あの山元さん、」と百合ちやんが歩きながら言ふには、『これを上げるのを忘れてゐたわ、』と言つて、動きつゝある汽車の窓を通して僕が君等に贈つたのと同じ手紙の包のやうなものをほり込んだものだ、そして、『ぢや、さよなら、』と言ふと共に、急に冷淡になつて、さつさと踵を返して、段々速力をめ出した汽車と反對の方に歩いて行つたんだ。それを、僕は馬鹿らしい話だが、もう一度位屹度僕の方を振り向いて、何か親愛をこめた挨拶でもするかと思つて、窓から首を出して見送つたにも拘らず、そのまゝ汽車の道が曲ると共に、プラットフォームと一緒に彼女の姿は隱れてしまつたんだよ。で、僕はひどくセンチメンタルな氣持に襲はれて、暫くぼんやり窓から首を突き出したまゝでゐた時に、『もし〳〵、』と僕の隣に腰かけてゐた、無論三等車だからね、薄汚ない田舍者の婆さんが、僕を後から搖すりながら、

『もし〳〵、あんた、これはあんたのでせう？』と言つて、それは明らかに手紙を包んだ半巾の包を僕に渡すんだ。今し方彼女が窓を通してほり込んだものなのだ。僕は何となくはつと胸を突かれたやうな氣がしたよ。而も半巾の中からは、これ迄彼女が僕に手紙をくれる時にいつも使つてゐた、見覺えのある桃色の封筒、（「これは君たちも皆知つてゐる筈だ、」と言つて、そこで山元君は一寸笑ひ顔をしました）に、見覺えのある彼女の筆蹟で僕の名を宛てられてあるんだ。それだけの事はちつとも驚く程のことぢやないんだが、それが僕が君たちにした惡戯の通りなんだからね、無論その事は僕から彼女に話して、彼女と相談づくでやつたんだから、彼女も十分知つてゐる筈なんだ。それを彼女が今僕にも用ひたんだから、僕がはつと胸騒ぎをし

たのも無理はないよ。もつとも、もうその時は、僕も彼女に少々ならず壓迫をされて、多少逃け出す氣味でK――を出發したのだが、そして確に彼女もそれを感じてゐたに違ひないのだ。でも、やつぱりその時はツとしたとこを見ると、十分彼女に對して未練はあつたに違ひないね。で、君、その手紙にはどんな事が書いてあつたと思ふ？……」と山元君にしては、一寸珍しい程、眞面目な顔をして、眞面目な口調で言ふんです。

つまり、その手紙に寄ると、私たち、山元君などの連中がK――に行つた時迄、或ひは私たちがそこに行つた始めの時分まで、百合子と鈴石萬三郎とは關係があつたんだといふのです。そして手紙の終に、唯殘念に思ふのは、これまで男を何度捨てたか知れないが、捨てようと思つてゐるうちに、あなたには先に歸つてしまはれた、つまり先を越して捨てられたのが口惜しい、と書いてあつたさうです。そして「こゝの所は痛快だらう、」とそこで山元君は始めて彼らしい愉快な笑顔を浮べました。

そんな女を、それ程まで引きつけたのは、つまり、やつぱり山元君のあの變な觸覺ではない

でせうか、と私は思ふんですが、どうでせう？……

（・・・）

搖籃の唄

少年のための物語

臺灣の蠻地に近い、或山の麓に、戸數は僅かに二十軒に足りない小さな村があつた。その村はづれに正直者といふ評判の夫婦と、その間にお千代といふ、その時三歳になる可愛らしい女の子と、親子三人暮しのむつまじい家があつた。

指折り數へると今から丁度十五年前の冬の初めのことである。それは、年中暑い所の樣に思はれて居るこの臺灣でも、十一月の末といへば、況してそんな山里のことだから、蟲の聲さへ日毎にうら枯れて行く、夜となると凄い程さびしい時だ。

裏の山の端に小さな月が出て居た。それを背にしてお千代の父は流場で、明日の仕事の用意にとて斧を砥いで居た。家の中では薄暗いランプの下でお千代の母が冬着のこしらへに忙しく針を運ばせて居た。その母の頭の上に、丁度ランプと反對の位置に、一つの新しい搖籃が掛つて居て、その中に小さいお千代が眠つて居たのである。母は小さな聲で子守唄をうたひながら針の手をつゞけて居るのだが、時々思ひ出してはその針を持つたまゝの手で搖籃を動かすのである。と、搖籃はしばらくの間母の子守唄と調子を合はすやうに搖れるのであつた。

「靜かな晩だな、」と丁度斧を砥ぎ終つた父が、今まで曲めて居た腰を痛さうに伸しながら聲をかけた、「明日もいゝ天氣だらう。」

「しッ・靜かに！」と母はたしなめるやうに、やつぱり針を持つたままで、ものを抑へるやうな手つきをして言つた「今お千代が寢かゝつて居るところですから……。」

そしてまた母は靜かに子守唄をつゞけるのであつた。父も靜かに砥石を片附けたり斧を仕舞つたりしてゐた。

折りから戸外の方、遠くの方から穩かならぬざわめき聲が起つた。で、お千代の父母は思はずその方に耳をそば立てると、聲は段々と大きくなり、段々と近づいて來た、そして次第にはつきりと人々の叫ぶ聲、泣く聲、足音などが聞えて來た。

やがて・何事が起つたのかと確かめる暇もない中に、「生蕃だ、生蕃だト」と叫ぶ聲がした。父は慌しく家の中に走り上つて、壁から銃を取り下ろし、それから短銃を母の手に渡した。お千代はその時すつかり寢入つてゐた。そんな人々の喧き聲にも眼を覺まさない程よく眠つてゐた。父は・狼狽しながらも寢て居るお千代に氣をとられて、立ち縮んでゐる母を無理やりに引き連れ、ひとまづ戸外に出た。

ところが丁度二人の者が戸外に出た時、その喧き聲が一層大きくなつて・折から鐵砲の音とともに、數人の村人たちが逃げて來るところであつた。そして直後から生蕃の追つて來る氣配がした。

「大變だ・大變だ！　大變な數の生蕃だ！　すぐ逃げなければ危い！」

で、父は咄嗟に母を肩に掛けて、皆の人々と共に走つた。「お千代を、お千代を！」と母が泣き聲になつて叫んでゐるのも氣にかけてゐられない程、父も、皆の者も、夢中で驅け出したのである。

さうして漸くの者は無事に隣りの村まで逃げ延びた。しかしお千代の母はそこに着いた時には氣絶して居たのである。

無事に逃げて來た人々の中にも、子供を連れ出した人は稀であつた。子供の愛に引かされた

人は大抵逃げ遅れてしまつた。お千代の母とても、その時無理に背負はれて逃げなかつたなら屹度お千代と共に、その時限り行方不明になつたか、或ひは外の多くの人たちのやうに、首だけ持つて行かれて、殺されたに違ひない。

――これは前にも云つた通り、今は昔十五年前の出來事である。その當時はお千代の父母も殆んど御飯も喉に通らぬ位に悲しんだけれど、やがてお千代の妹や弟たちも生れ、今ではもうその一番上の妹が十二になつてゐて、その外に九歳になる弟と五歳になる妹も出來て居るので、お千代のことは次第に死んだもののやうに悲しさも薄らいで行つた。そしてたゞあの騒動の日を命日として懇ろに後の弔ひをして居たのであつた。

お千代が昔寢てゐたあの搖籃は、もう古びてしまつたけれど、昔のままの所に吊られて、今は一番末の妹のお露のものになつて居る。父はやつぱり毎日夜になると裏の流場で斧を砥いでは、それが濟むと、晝の疲れに早くから寢てしまふ。母は子供が增えたので、殊にこの冬の始めには、子供等の冬着の仕度に忙しく、毎晩遅くまでランプの下で針仕事をして居る。たゞ十

五年前と變つたのは、近頃町から買つて來た新らしい錫の壺の、今迄のよりはずつと綺麗な、ずつと明るいランプと、それに省の口は搖籃を搖する者が、針を持つ手の忙しい母ではなくて、一番上の姉のお小夜になつたことである。それに年毎に開けて來て、今は生蕃の襲來することなども稀になり、又よし襲うて來ることがあつても、それを防ぐだけの備へも出來た。

ところがその十五年目の冬の初めの頃である。又もや殆んど隔日位に、その邊の村々を順々に襲ふ生蕃の一隊が現はれた。そしてその度毎に村々では幾人かの死傷者を出すのであつた。

この生蕃の一隊は數は餘り多くはないが、驚くほど荒々しくて、而もその隊長は馬に乘つた少女だと云ふことであつた。のみならず、その少女は確かに日本の女であるといふことが誰云ふとなく傳へられた。

そこでお千代の村では一層嚴量に守りを堅めて、尙出來得るならはその一隊を攻め滅ぼさうと用意をした。

ところが到頭その生蕃の一隊が襲つて來た。それは、不思議にも、お千代の命日に當る晩で

あつた。丁度十五年前の晩のやうに、裏の山の端には小さな月が出てゐた。

「そら來た！」といふので、村の家々は皆戸を閉めて、そして働き盛りの男ばかりが、鐵砲をもつて生蕃を迎へて戰つた。

今度は用意も出來てゐたこととて、生蕃の方が負けて逃げた。村の男たちは勢よく鐵砲を發ちながら、それを追つかけた。逃げながら射たれて仆れた生蕃も澤山あつた。その中に此方から發ち出した一つの彈丸が、その隊長の少女の乘つて居る馬に中つた、で、馬もろ共にその少女は眞逆樣に地上に轉がり落ちた。そこを追ひつめられて、少女は激しく抵抗つたけれども、何といつても女の身の、而も一人に大勢であるから、その時遂に生捕にせられたのであつた。

評判の生蕃の隊長の、日本の女が捉まつたと言ふので、その翌日は村の人々は言ふに及ばず一里も二里も離れた隣村からも、人々が大勢見物に來た。ところが不思議なことには、その生蕃の隊長は、十五年前、三歳の時にこの村から攫はれて行つたお千代だと言ふ噂が、人々の口から傳はつた。年齡は十八九で、色こそ黑いが、綺麗な娘である。それに右の眉の横にある疵

痕までが、お千代に違ひないと言ふのである。

そこで、村の總代からお千代の父母を呼びに來たのと、噂を聞いて二人が取るものも取りあへず出かけたのと、殆んど同時であつた。お千代の父母は呼吸もつまるかと思ふ程、胸の騷ぐのを覺えた。その二人が村役場の庭に駈けつけた時には、折からその女生蕃を取り卷いてゐた群集は俄かにどよめいた。そして誰が命令するともなしに二人のために通路を開いた。群集から三間と離れて居ない所に、生蕃の服裝をした女が、恥かし氣もなく、それどころか恨めしさうな鋭い目つきをして、後手に縛られたまゝ四邊をぢろ〳〵と見廻してゐる。その傍に五つ六つの椅子があつて、村長と、巡査と、村の總代たちが腰を掛けてゐた。

お千代の父母は夢中でその前に飛び出した。四邊は急に水でも打つたやうに靜まり返つた。その縛られてゐる女の前に、父は釘付けにせられたやうに立つて、ぢろ〳〵と無神經な顏をしてゐるその女を見つめてゐた、母も亦その傍に寄つて、相手の鷹のやうな鋭い目を避けながらしげ〳〵と眺め入つた。

突然、母はその前に仆れるやうに膝をついて、何事か口の中で言ひながら泣き出した。それと共に父は一歩村長の前に進んで、小さいけれど決然とした聲で斯う言つた。

「これは確かに娘の千代です！」

そして父も亦頭を垂れた。

今まで默つて見てゐた大勢の人たちは、急にざわ〳〵と騒ぎ初めた。そして口々に何か話し合つた。

「靜かに！」と巡査が椅子から立つて人々を制した。

「お千代や、お千代や！」とこの時母は堪り兼ねて、人目をも恥ぢず、泣きながら言つた。「お千代や、よく生きてゐてくれた。これ、わたしが分らないか？　母さんだよ、分らないか？　分らないのも無理はない、三歳の時に別れたまゝだからね、お千代や。わたしはお前の母さんだよ、そしてこゝにお前の父さんも來ていらつしやるのだよ！　お千代……』

しかし、お千代と呼ばれて、泣きながら話されるのを、却つて不思議さうに見返しながら、

かの女は默つてゐる。

「お前はもうわたし等の言葉が分らないのか、忘れたのか？　無理もない、三歳の時のまゝだからね……」

母は流石に女心に果てしもなく、わが子と思つて搔き口説くのであつた。その時通辯人が傍に來て生蕃の言葉でお千代に斯う話しかけた。

「お前の名はお千代といつて、言はずとも知つて居ようが、元來が日本人だ。それどころかこの村で生れて、この村で育つたのだが、三歳の時に生蕃に搔はれて行つたために、今の樣な身になつたのだ。こゝに立つて居られるのはお前を生んで下さつたお父さんとお母さんなのだよ。」

通辯が斯う言ふと、かの女はぶつきらぼうに頭を振りながら、生蕃語で答へた。斯う言ふのである。

「わたしは生蕃人だ、日本人ぢやない。わたしには父母などはない。わたしは日本人は嫌ひだ、

わたしは生蕃人だ！」

これを聞いて母は聲を上げて泣いた、そして父は、やつぱり釘付けにされたやうに・立つたまゝ一言も口を開かなかつた。

色々と通辯の口を通じて、すかしたり、脅したりして見たけれども、かの女はたゞ「わたしは日本人は嫌ひだ、わたしは生蕃人だ！」と繰り返すだけであつた。

そこでふと思ひ付いて、この女をその生れた家の前に連れて行くことにした。そしたら、どうかして、幼い心に映つたことを思ひ出して、氣心も柔かくなるかも知れないと思つたからである。

先づ村長と村の總代たちが歩いた。その次にお千代の父と母とが行つた。それから巡査がその生蕃女を連れて從つた。數多の見物人が、海嘯のやうにその後から押し寄せた。

漸く村はづれの古びた、小さな家の前に來た。家の前には三本の大きな樫の木が並んで生えてゐた。

「お千代や」と母はその木の根下に立つて、その梢を見上げては、又かの生蕃女を見ながら言つた。「お前はこの木を覺えてゐるかえ？　お前は毎日、この木に止つて喧ましく鳴き立てる雀を取つてくれと言つては、母さんを困らしたことを忘れたかえ？」

それを通辯は傳へた。しかしかの女は冷やかに答へた「そんな事は知らない。知つて居る筈がない。」

その頑固な言葉に人々は途方に暮れてしまつた。見てゐる數多の群集も追々と疲れて來て、欠伸をする者や、惡口を言ひかける者や、次第に四邊が喧ましくなつて來た。

「やつぱりあれは日本人に似てゐても實は生蕃の娘なのだらう、でなければ十八や十九の年頃であんな剛情な娘があるものか！」と一人が言つた。

「さうだ、それにあれがお千代だなどゝ、誰かいゝ加減なことを言つたんだらう。若し本當にお千代だつたら、あれ程母親が涙をこぼして話してゐるのを、それに皆があゝして事をわけて言つて聞かすのを、少しは分りさうなものぢやないか！」ともう一人が言つた。

「しかし現在の母親が人目も關はず掻き口説いてゐる程だもの、まさか人違ひでもあるまい。それともまた『生みの親より育ての親』といふ諺もある位だから、それに此方では何も知らない時分に三年の間育てられたのを、彼方では十年以上も育てられたのだとすれば、よし氣が付いても早速名乘つて出られまいぢやないか、」かう年寄の男が言つた。

「成る程、さうかも知れないよ。」と二三人の者が賛成した。

「まつたくそんな譯かも知れない。して見ればあんな生蕃のやうな者に育てられたのだから、自然氣も荒くなつてゐるだらうし、そして十五年も前のことだし、その上此方にゐた間は何も知らない子供の時分なのだもの、本當に生蕃の子だと思つてゐるのかも知れないよ。」

「でも、わたしには父母はないと言つたぜ。それに如何にも憎らしさうにわたしは日本人は嫌ひだと云つた邊は、どうも意地からさう言つてゐる樣子だつた。ひよつとするとあれは生蕃の方に義理立てをして、そのために此方で云つて聞かす事はすつかり分りながら、あんな風をしてゐるのかも知れないよ。」

こんな風に噂は口々にとり〴〵であつた。その中にも、父は流石に男らしく何も彼もあきらめたやうな顏をして、しかし悄然と立つてゐたが、その傍に母は流石に女の身の、矢張あきらめ兼ねて、しかしもうその上いふ言葉もなく、泣きながら立つてゐた。村長や村の總代たちも當惑したやうに同じくその傍に立つてゐた。

ところが肝心の女は、一向皆には頓着なしに、きよろ〳〵とその鷹のやうな目で、隙があつたら逃げてやらうと言つた風で四邊を見廻したり、かと思ふと懐しさうにかの生蕃の住む・自分等の山の方を眺めたりした。

「これ程までに云つても、お前は何も白狀しないのか？」遂にかう通辯が云つた。

「殺すなら殺してくれ、」と女は少し聲を荒々しく答へた。「煩さい事は言はないで、早く片を附けてくれ！　逃がすものなら、早くあのわたしの山に歸してくれ、そしたらまた今度はもつと大勢連れて來るから。それが恐ろしければ殺しても好い兎に角ぐづ〳〵言はないで早くどつちかに片を附けてくれ！」

通辯はこの言葉を皆に通じた。皆の者はたゞ茫然としてしまつて、返す言葉がなかつた。そこで暫らく四邊が靜まりかへつた。

その時、家の中から靜かな子守唄が聞えて來た。家の中では末の妹の五歳になるお露を、姉のお小夜が寢かし付けてゐるのであつた。小さいお露をあの搖籃の中に入れて、それを搖りながら、お小夜は母に代つて、搖籃の唄をうたつてゐるのである。

その搖籃の中から、十五年前の昨夜お千代は攫はれて行つたのだ。その同じ搖籃の中で今唄をうたつてゐるお小夜も育てられ、その弟も、今また一番末のお露も育てられてゐるのである。

坊やはよい兒だ、
寢んねしな——

その懷しい搖籃の唄が、折から靜まつてゐる人々の耳に、靜かに靜かに、皆をも眠らしてしまはうとするかのやうに聞えて來た。皆もまた眠らされてしまひさうに咳一つせずにぢつと呼吸を凝らした。

と、その時、かの女はぶる〳〵と身震ひをした、そしてその鷹のやうな目が今迄の鋭い色を消して、子供のやうな無邪氣な色に光つた。

「お千代や！」と、一分の間も目を放さずにゐた母は、かう聲を上げて一二歩進み寄つた、「お千代や、思ひ出したかえ、子供の時分の事を？」

その言葉を通辯がかの女に傳へた時には、女はもう元の通りの鋭い目付にかへつてゐた。そして頑として答へた。「わたしは早く山に歸りたい。わたしは生蕃人だ。歸してくれないのなら寧そ早く殺してくれ！」

見てゐる人々は再び口々に騷ぎ始めた。

「殺してしまへ！」とその中から言ふ者があつた。

「山へ逃がしてやれ！」と外の者が叫んだ。

「毆り殺せ、いつまでも女一疋に威張らせておくな！」と別の者が呶鳴つた。中には石を一つ女の方に向つて投げた者もあつた。

ところが、餘りの騒々しさに、その時家の中で切角眠りかけてゐたお露が目を醒ました、そして物に驚いたやうに泣き出した。お小夜が色々にすかしてゐる樣子であつたが、どうしても泣き止まないで、却つて大聲に泣き立てるのであつた。

そこで仕方なく母は家の中に入つて行つた。もう殆んどあのお千代に違ひない女生蕃を、我子にかへす事はあきらめてゐたけれど、しかし涙は止まなかつた、そして泣きながらむづかるお露をあやしつゝ、靜かに搖籃を搖つた、そして母は泣きながら知らず〳〵搖籃の唄をうたつた。

ねんねをする兒はよい兒だよ——

戸外では、かの女を圍んで、折から見て居る人々は三たび言葉なく靜まりかへつてゐた。その中をかの母のやさしい搖籃の唄が聞えて來た。

その靜かな、聞く人の腸に食ひ込むやうな唄の聲に、人々は身震ひしつゝ耳を傾けた。

同じやうに、かの生蕃の女はその唄を聞いた。ふたゝび前よりは大きく身震ひをした。ふたゝび前よりはもつと優しくその目の光は變つた。そして次第に顏色が靑ざめて來た。まるで今までの樣子とはうつて變つて見えた。それはもう荒々しい生蕃の女ではなく、確かに十八の可愛らしい日本の娘となつた。

忽ち、かの女はくづれるやうに膝まづいた、そしてその優しくなつた目が濡つたと見る間に大粒の涙がはら〳〵とこぼれて來た。そして目の前の大地に痛々しく泣きくづれた。激しく泣きながら、かの女は早口に何事か喋つた。

それを聞いて、先づ通辯がいたく感勤したやうに言葉なく立つてゐた。

聞えるものはたゞ家の中から洩れて來る、かの母の物悲しさうな搖籃の唄だけであつた。

かの女は泣きながら何と云つたか？　通辯がそれを默つて立つてゐる一同の者に傳へた。

「あの唄をわたしは覺えてゐる。あの唄をわたしは忘れない。あの唄をわたしは確かに聞いたことがある。何處で聞いたのか、何時聞いたのか分らない。ひよつとすると生れぬ前に聞いた

のかも知れない……」

こゝでかの女は言葉を切つて激しく歔欷つてゐたが、忽ちものに打たれたやうに顔を上げて聲高く言つた。

「あゝ、あれはわたしのお母さんの聲だ。あれはわたしのお母さんの唄に違ひない。あの唄をうたつて居る人こそわたしのお母さんだ。……お母さんの聲だ。お母さんの唄だ。あの唄を聞いて居ると、色々の事がぼんやりと思ひ出されて來る、色々の事が。あゝ、その中にはこの三本の樫の木も浮んで來る……あゝ、この家の中からあの唄が聞える、これはわたしの家だ、あゝ、あれは、わたしのお母さんだ……」

かう言つて、十五年前に攫はれて行つて、生蕃になつたお千代は泣いたのである。

甘き世の話

―新浦島物語―

何の事はない。

「浦島太郎は龜に乘り……」

と言つた風な流儀なのだ、それでも無論日本帝國の政府が經營してゐる鐵道會社の汽車に違ひはないのだが、恐らく龜の背中の力がもつと乘心地がよい位のものであらう、中央線飯田町の停車場を乘り出して、新宿、中野、八王寺・と汽車はガタ馬車のやうに搖れながら、甚だ威勢惡く走るのだ、何處へ行くとて走るのだ？……今の世に龍宮なんてないことだ！

汽車が信州に進むと、四邊の景色が忽ち眞白になつてしまつて、そのうちに窓硝子も磨硝子に變つたやうに凍つてしまつて、やがて十一月の日は暮れて、私、半子半四郎が目指す下諏訪町に着いた時はもうすつかり夜の景色であつた。

暗い、しよんぼりした下諏訪の停車場を下りたところで、山からか湖水からか、私の耳に吹いて來る風は東京の二月の位に鋭いのである。

「早くから寒くなるんだね、」と私が俥の上で首を縮めながら叫ぶと、

「いんや、まだ〳〵寒くなります、」と車屋は泥濘が泥濘のまゝに凍つて固まつた道を走りながら言ふのである。それを大凡四五町も行くと、それから急に阪道になるところで、今迄の一筋道が二筋に分れるのであるが、私の俥はその左を取つてよつち〳〵とだら〳〵阪の道を二町あまり上り詰めた突當りにある、私が二度目にその門をくぐるところの、旅館花屋に這入るのである。

「この前の時のお部屋が今丁度塞がつて居りますので、表の方の三階――三階は一間切りで、この家では一番閑靜な部屋でございます、眺望も一番宜しうございます、」と株式會社になつてゐるその旅館の、支配人の息子の丈治が私を案内しながら言ふのである。なる程、その部屋の西に面した窓に立つと、下諏訪の町中が一目に見えるのである。鼠色の湖水も見えるのである。あの手前の正面に見える山の裾の邊から天龍川が始まるのであります、と丈治が教へたことである。あの向ふの山のその又向ふの左手には、晴れた晝には木曾の御嶽山も見えるのであ

ります。又停車場から此方の方を見ますと、甲州八ケ嶽の頭も見えるでありませう。あそこからは諏訪湖の隅の方の、山と山とが切れたところに駿河の富士山も摺鉢のやうに見えます、と私が山を見ることが大好きだと言ふのを聞いて、二十四歳で、金時見たいに太つた、大男の丈治は色々と教へてくれたことである。だが、今暗い寒い窓に立つて、湖水の向ふ側の右手にちら〳〵と大都會のやうに無數の電燈の光つてゐる、四萬の工女が住んでゐるといふ岡谷の町の夜景や、ずつと近く私のすぐ目の下に夜目にも一筋に明るく通つてゐる、今私が停車場から俥で來た道の兩側の景色や、更に近く私の目の下の右手に明るい陽氣な障子の影を一せて、その中から醉うてうたふ人々のざわめきの聞える料理店秋野屋の夜の景色や、それ等を見てゐるのか見てゐないのか、兎に角それ等の景色を前にして、寒い風に吹き曝されながらぼんやりと立つてゐる私の心の中が、阿呆らしや、三十面を下げて、如何にセンチメンタルに傾いてゐたか、それを話すに就いては、先づそれより二ケ月前に第一回目に私がこの町に來た時のことから始める方が便利である。

二

手取り早く言つてしまはう、私はその前に始めてこの町に來て、旅館井屋に十日ばかり滯在してゐた間に、旅のつれ〴〵に呼んだ藝者ゆめ子に心をとられたのである。だから私自身が誰であるか？　それは話の中で追々に織りまぜて話すことにして、最先に藝者ゆめ子が誰であるか？　を話しておきたいのである。

藝者ゆめ子はその時二十一歳であつた。背はすらりと高くて、撫で肩の恰好のいゝ女である。顏は幾分かしやくれ顏で色は少し淺黑い方ではないかと思へる。お世辭にも大層美人であるとは言ひ難いが、私には彼女が始終俯向き加減にしてゐて、口數が少なくて、その髮毛は少し太い質ではないかと思へる上に、幾分か大きな波を打つ癖があるのだから、そのために結ひ立ての時でも撫で付けて來た時でも、島田の髷がいつでも心持ち投げやつたやうに傾き加減に見えるのさへ、少々ならず氣に入つたことであつた。よく見ると口の邊が少うし不吊合ひにふくれてゐて、二三本の金齒の外に二三本の味噌齒さへあるのだが、それまでも私には氣に入るの

である。

女には、男でもだが、一寸見のよい女と、ぢつと見てゐるうちに案外別嬪になつて來る女との二種類があるものだが、私のゆめ子はその前者であつた。始めて彼女が「今晩は、あり」と言つて私の部屋の入口に手を突いて、そして私の向つてゐる机を兼ねた食臺の斜め右の前に俯向いて坐つた時、私はこんな田舍町にも隨分い〻藝者がゐるものだなア、とつく〴〵感心させられたことである。彼女はほんの十七歳で、藝者ではあるが、知らぬ男の前になぞ未だ一度も出たことがないと言ふやうに見えたものだ。

「君は近頃藝者に出たの？」と私が聞くと、

「い〻え、もう隨分長く……」と彼女の答である、「お酌の時分からですから、もう七年になります。

「では年は幾つなの？」と私は思はず膝を乘り出して聞いたものである。

「もう二十一です、」と言つて彼女は一寸上げた顏を又俯向かせて唇を嚙むのである。

私、その者はその時二十九歳で、獨身で、だが生れてからずつとの獨身ではなく、その以前に激しいヒステリイの婦人と連添つたといふ經歴を持つてゐた上に、少年の頃十五六年の間大阪の或色町に住んでゐたことで、その頃は言ふ迄もなく、その後も、今人生の三十歳の阪に來る迄も、一人として善き婦人に會つたことがなかつた。女は皆不道徳家ではない無道徳家で、腹からの嘘つきで、良心といふものを持たなくて、惡者でない惡者だ。三千世界の女共みな、私自身の母だつて、妹だつて、悉く鬼に食はれてしまへと思ひ込んでゐた私は、それでゐてこの世の中で一番私の心を引きつけるものは學問でもなく、名譽でも、仕事でも、金儲けでもなく、その鬼にやりたい女人どもなので難してゐた私は、斯う言へば賢明な諸君は十分察してくれるだらう、何と並々ならぬロマンチストである私は、どんなにその後追々と、三度が五度とゆめ子と顔を會はすうちに、彼女に心をとられたかを。だが、それはずつと後の話なのである。

今年私は三十歳で、そんなら諸君、今言つた話の時からやつと月日は一年しか經たないことだのに、二十九歳の暮を下宿屋の部屋住で暮した私は、今は借家ながらに一軒の家長になつて、私の女中を使つて、私の女房と呼ぶ者を持つ身となり變つたのである。ところで、この話は、その今の私の女房が、今言ふ私が三十年の人世に於いて心から愛したところの、そして今も愛し、これから後も私の墓の下まで愛するであらうところの、藝者ゆめ子ではないのである。

話が脇道に反れたが、さて私は始めて會つたゆめ子とぽつり〳〵と四方山の話をしたことである、「自前とか分とか七三とかつてあるやうだが、君はその中の何なの？」と私が聞くのである。すると彼女は微かに笑つて、「いゝえ、」と言つて俯向くのである。「こゝではさういふ區別はないの？」と聞くと、「ございます、」彼女は答へるのである、「ぢやあ、君はその中の……？」と聞くと、「私……」と言つて彼女はやつぱり微かに笑つて俯向いて答へないのである。

が、だん〳〵氣が付いて見ると、ゆめ子の身に着けてゐるもの、着物から帶は言ふに及ばず、櫛から、簪から、半襟から、指輪から、帶締に至るまでも仲々そこらの田舎藝者にはなく贅澤

なことであつた。これでは餘程よい旦那が付いてゐるのに違ひないと思ひ付くと、私は今夜始めて會つた間柄をも忘れて、最早や燒餅をやいて、味氣ない氣持に襲はれたものだ。が、後で知つたことには、彼女は下諏訪の町の藝者家中での一番金持であると評判されてゐる、夢の家の娘分だといふことである。彼女の眞の叔母に當る彼女の養母であるところの夢の家の主人は以前やつぱり藝者をしてゐたものだが、有數な辣腕家で、藝者を止めて藝者家になつてからは益々金を貯めることを心がけて、その爲に人の評判はよくないが、その爲に稼業は益々發展して、今では隣の町の上諏訪とこの下諏訪とに二軒の藝者家を經營してゐるといふ話であつた。

「三味線をひいてくれない？」と私が言ふのである、「木曾の御嶽山をうたつてくれ給へ、ついでに伊那節も敎へてくれ給へ。」

「私駄目なんですよ、」と半分聞える聲で言つて、ゆめ子は極く素直に傍の三味線を取つて、場所が宿屋であることの遠慮からなのであらう、極めて低い水調子で、

「木曾のなア、ナカノリサン、」と歌ふのである。三味線の調子が低いので如何にも歌ひづら

さうに唱ふのである。

「木曾の御嶽山はナンヂヤラホイ、」と、だが一寸も不平も言はず、辯解もしないでつゞけるのである。

「夏でも寒いヨイヨイヨイ、」そして一節うたひ終ると、「駄目ですわ、」と言つて一層下を向いてしまふのである。彼女の唄の聲は聞き手に彼女の幼な聲を思ひ出させるやうなそれであつた。その唄の意味に就いては無論のこと、何の爲にさういふ稽古をせねばならぬかといふことも何にも知らぬ幼年の頃に、彼女の剛慾な叔母の養母からか、癇性な藝者上りの師匠からか、二尺ざしで叩かれたり、恐い目で睥まれたりしながら、無心の聲を張り上げて歌つた頃の聲を忍ばせるのである。それは又私の少年の頃に私が養はれた、大阪の色街にあつた私の叔父の家の隣の、私の幼な馴染で私と同い年の小さいおもよの事を私に思ひ出させるのである。おもよの姉は二人とも藝者であつた。だから小さいおもよも藝者になることに定つてゐたのである。小さい私と小さいおもよとが、大阪の小路では夏になると此方側の家と向ふ側の家との屋根か

ら屋根に布切の日覆を張り渡すのである。そこらは色町のことだから、藝者が芝居をしたり踊の會をしたりした時に、客や贔屓の者たちから贈られた幟や幕の古いのをその日覆に廢物利用がされるのである。だから私とおもよとはその幟の日覆の下で、夏の日盛に、道には犬一疋も通らず、大人は皆家の中で晝寢をしてゐる頃を、お母さんごつこをして遊ぶのである。が、私たちが夢中でお母さんごつこをしてゐるうちに、いつか時計は四時になつて、恐いおもよの姉さんが、「おもよちやん、そんなとこでいつ迄も遊んでゐないで、お稽古をしな、さあ、直お歸り、」と呼ぶのである。そこでおもよは彼女の家に歸るのである。小さい私は連れに捨てられて悲しくなつて、おもよの歸つたおもよの家の表の格子戸の外に立つのである。夏のことだから格子戸の内側には障子の代りに簾か吊つてあるので、格子の棒につかまつて、家の中を覗き込むと、小さいおもよが體を斜めにして大きな三味線にすがり付きながら、手に餘る撥をつかんで姉さんの前に坐つてゐるのが見えるのである。そして、一本目には池の松・とおもよは冬になつてから鳴く蟋蟀見たいな、枯れた悲しげな聲を上げて歌ふのである。簾越しだからさう

見えるのかも知れないが、おもよの顏は歪んで泣き顏に見えたものだ。ゆめ子の唄は今私にそれを思ひ出させるのである。

尙、餘談だが、おもよと私とはいくら友達にからかはれても、早い話が同じ家に住んでゐるやうな感じになつて、好きは好きでも戀の好きにはならなかつたところが、十五歳の時から三年程の間私たちはお互に妙に恥かしくなつて、道で會つても餘り話をしなくなつて、終にはだん〳〵知らぬ顏をするやうになつて、中學生の私と藝者の彼女とはもう永久に並んで坐るやうなことにはなるまいと思はれてゐたのに、ふとした事から十八歳の夏に二人は戀仲になつた。それは彼女が病氣で藝者を休み、私も病氣で學校を休んだ間のことである。そこで戀仲の私たちがどんな話をし合つたか、今はもうすつかり忘れたが、私は藝者が止めたくて止めたくて仕樣がない、と何かの時彼女が嘆いて言つたのを覺えてゐる。私は今ゆめ子の顏を見てゐると、そんな事も思ひ出すのである、するとゆめ子とおもよとがどこやら似てゐるやうにさへも思へて來るのである。

「伊那の平に葦なら二本、思ひ切るよし、思ひ切るよし、切らぬよし。

とゆめ子が歌つた時、靜かになつた夜の表の方を、チョンチョンと拍子木を打つて通る音が聞えるのである。十二時を知らせる藝者町の、各々の藝者に引上げるべき時の來たことを知らせる合圖なのである。「さやうなら、」とゆめ子は叮嚀に挨拶をして歸つて行つた、後に私は坐つたまゝ、一時間ほどぼんやりとしてゐたものである。

三

その次の日の夕飯の時、束髪に結つた、丸々と肥つた、田舍の女學生見たいな、可愛い顔をした十七八位に見える女中のおむなが、「今夜も藝者をお呼びになりますか？　で、やりぱりゆめ子を掛けませうか？」と言つた時、

「さあ、そんなに呼んでもいゝものかなア、」と私は冗談見たいに言つて、それはまだよかつたが、「ゆめ子さんはいゝけど、そんなに毎日呼ぶと惚れてるやうで惡いかなア？　今夜は誰か別の人にしようね？」とつい私一流の本心を晦ますやうな冗談見たいな言葉を吐いてしまつたので、直にその後から相手のおむなにもそれと察しられるやうに、「ゆめ子さん見たいな背のすらつとした、大人しくて悧巧でそして正直な優しい人を呼んでもらはうな、」と言つた。結局そんな人はゆめ子の外にあるまい、だからやつぱりゆめ子を呼んでくれ給へ、と言つた私のつもりなのである。だが、此方から何か言ふと、恥かしがるやうな恰好にその丸々として肩を拗るやうに縮めて、にやりと笑つて眞白な齒を見せる越後生れのおむなには、私のそんな廻りくどい言葉の通じよう筈はなく、やがて昨晩とは違つて割合にからりと快活に私の部屋の入口の襖が開いて、「今晩は、あり」と言つて這入つて來たのは、ゆめ子ではなくて、後でその名を知つたのであるが、三春家のくれ葉といふ藝者なのである。

くれ葉は顏も恰好も當り前の形をしてゐるのに、背の高さが五尺に足らぬものだから小女といふよりは背低といふ種類の女である。彼女は部屋の入口で手を突いて、立上ると「御免下さい、」と言つて私の机を兼ねた食臺の眞正面につか〳〵と來て坐つた。少し胸が鳩胸で、突き出てゐるので、相對して見ると仲々りゆうとして見えるのである。それにしても重ね重ねその背

の低いことが残念に思はれるといふことは、少し荒れ性の膚かと思はれはするが、色は生地から白くて、眉の恰好も目元も鼻附も十分に美しい女なのである。年の頃は二十二か二十三かと見えるが、難を言へば口が少し大きくて、笑ふと奇麗な、細かくそろつた齒がこぼれるやうに見えるに拘らず、どこやら少し悧好でなささうに見えるのだ。さう言へばその張りのいゝ目の光も些か鈍いと思はれるのだ。だが、仲々いゝ藝者がそろつてゐるわいと私は心の中で思つたことである。

くれ葉はその顏から覗はれる通り、到底氣の廻りの早い、心のきいた藝者といふ譯には行かなかつたが、その代り善良なる事に於いては閻魔大王をも微笑ませるに違ひなかつた。

「君は若く見えるな、」と私は何氣なく言つたのであつた。「綺麗な人は德だな。」

「私、これでもう八なんですよ、」と正直にも彼女は口に袖を當てゝ斯う言ふのである。もう二十八になると聞いて、實際私は大いに驚かされた。

「二十八でも三十でも、男でも女でも、兎に角獨り身が一番いゝな。獨り者、八千歳九千歳萬

歳だな、」と私は言つた。先にも一寸言つたやうに、嘗てヒステリイの女と一年間連れ添つた間、毎日程彼女に打たれたり抓られたり、人に聞える大聲で泣き叫ばれたり、何處へ行くにも私を一人で外出さしてくれたことはなかつたところの、地獄見たいな夫婦生活がまだすつかり記憶から乾き切らなかつた時分のことで、私は何の氣もなくさう言つて、「ね、獨り者のうちが花だよ、君はこれ迄に世帶を持つたことがある？」と聞くと、

「……」と彼女は答へないで點頭くのである。

「この町で？」

「いゝえ、甲府で、」と彼女は答へるのである。彼女が私の聞くところに答へて言つたことには、彼女は甲府の生れで、始め上諏訪で藝者になつて、そこで引かされて、男と一緒に甲府に歸つて一年餘り世帶を持つて、それから男と別れて又上田で藝者に出て、そして今はこの町で同じ稼業をつゞけてゐるとのことなのである。

「君、ゆめ子さん知つてる？」と私は當り前のことを聞いて見た。何とゆめ子のことが忘られ

ないので、そんな風なことを言つて見たのだが、少し恥しくなつて、「知らない筈はないだらうが、昨夜、僕、あの人を呼んで見たの、大人しい人だね。ずつと去年から休んでゐて、四五日前から又出たんだつて？」

「えゝ、」とくれ葉は返事をする度に殊更に口を噤んで點頭く癖があつた。すると少し大振りな口元が受け口になつて、それも亦彼女の魅力になる仕方で、「赤ちやんが生れたもんですからね、」と言ふのだ。

こつんと私はその言葉で腦天を叩かれて、思はず目をつぶつた時のやうな氣がされたが、「それは目出度いな、」と出來るだけ冷靜に答へたものだ。實際、私はさういふ時、腹の中はいくら煮え返つてゐても極めて冷靜を裝ふことが出來る質なのである。「で、且那樣と一緒にゐるの？」と無論そんな筈はないとは萬々察しながらも、まあそんな風なことを聞いて見たのだ。

「いゝえ、」

「それやいけないね、」と私はわざと大きに驚いた見えをして見せた。

「だつて、此邊の人は皆薄情な人ばつかりなのよ。あなた、ばかに心配してるのね？」

「心配だよ、」と言つて、私はくれ葉と共に聲を合はせて無邪氣らしく笑つたことである。だが、その會話があつてからは、私の一流奇妙な冗談がもう口を突いて出なくなつたことだ。ゆめ子と、彼女とはその時私はまだ一度しか會つてゐない仲ではあるが、だが親愛極まる彼女と、その彼女の腹に子を贈物にした男とに就いて、私の心は妙に抽象的に色々と物思に沈んでしまつたのである。ずつと先から、表の料理店、多分秋野屋の二階でだらう、三味線に太鼓が這入つて、かつぽれや、深川や、木曾節の囃子が秋の夜の空氣に響いて頻りに聞えて來るのである。年少のお酌たちの合唱として、「そら來いアバよ、又來なよ、」と黄色い叫聲も聞えて來るのである。だが、かつぽれも深川も木曾節も、お酌の甲高い叫聲も、私の耳には皆諸行無常と響いたことである。

四

その時分は妙に雨ばかりつゞいたことであつた。二階の私の部屋の椽側に置かれた籐椅子に

横たはつて、くれ葉に會つた翌日のことだが、一週間ぶりで空が晴れたのだ。秋の空を青い天に白い羊のやうな雲がふわり〳〵と浮いてゐるのである。當時、私の身と心はその白雲の如く悠然とした境涯にあつたことを、私はまだ諸君に話してなかつたが、私はその前の四五年の間といふもの、眞にその日その日の食に困るほど貧乏してゐたものである。もう少し身體が丈夫であつたなら私は恐らく街で立ちん坊をしたことに違ひなかつた。今少し臆病な性質でなかつたら多分私は盗坊になつてゐたかも知れなかつた。もし私が女であつたら無論私は身を賣つて今頃は泣いてゐたことであつたらう。ところが幸か不幸か、年頃私が身を窶してゐた文學といふ變な夢見たいな仕事は、その外のどんな寛大な會社でも又主人でも、或ひは楠正成だつて、又大海のやうに度量の廣い神様だつて、氣の毒だがこの人間は片輪です、何處へ廻しても何の役にも立ちさうにありません、死んだ方が此者の爲です、無論帝國にも無用の人物です、と言つて共和政府にだつて鼻つまみでせう、かと言つて過激派に入れたつて邪魔者に過ぎないでせう、仕樣がありません、島流しにしてしまひませうか、一思ひに殺してしまひませうか、と言

はれるやうな人間の私を、何とその片隅に住むことを、長の苦勞の後だつたが、許してくれたのであつた。だから、私は長い間の貧乏から稍々救はれ、恐いヒステリイの女房からも獨立し、さういふ私見たいな子を持つて、外に他依りにする者がないものだから、泣き泣き他人の家から家を轉々してゐた母親をもやつと私の下宿に引取り、そしてこの信洲下諏訪の町に新稼業の小説を書きに來てゐた身の上だつたのである。ところで東京の雜誌社に賴まれてゐた二三の小説も最早や書き上げてしまつた時であつた。籐椅子の上に寢轉んで天を見てゐると、これは少しをかしいぞ、と私は自分と自分の身をそつと抓つて見たものである。うか〳〵してゐると、私の目の前に突然ふつと烟が上つて、それと共に私は白髮のお爺さんになつて、そして墓の下に入れられてしまふんぢやないかな？　だが、やつぱり夢ではないらしい、と思へるやうな身の上だつたのである。だが、諸君、私は言ふが、そんな時、人間はたとへ三十歳が四十歳、五十歳が六十歳であらうが、或ひは又虛無主義者であらうが、人道派であらうが、はた惡魔主義者であらうが、さては私のやうなロマンチストであらうが、うつかりしてゐると、トン〳〵と

彼の胸を叩きに來るものに見舞はれるのである、戀といふものである。

藝者ゆめ子には因業な養母があつて、おまけに子があるといふ事を聞いた時、私は一つこつんと頭を押されて突き飛ばされた氣になつたが、時計の秒針が一廻りしないうちに、私の心持は忽ちそんな溝を飛び越えてしまつて、因業な養母を持ちそして赤ン坊を生んだところの藝者ゆめ子にやつぱり熱心に戀したものである。だが、私の癖として、その日は晝間から彼女を呼んで、夕飯を一緒に食つて、そして十二時の拍子木が鳴るまで彼女と向ひ合つて坐つてゐたが、酒を飲まない私が彼女にした話はなるべく彼女を退屈させないやうに、而白い話や倦きない話をしたといふだけで、而もその形式はこの前の晩より一層洒々淡々と表現したものである。その中に一言や二言位、私はあなたが好きであります、といふ意味を盛つたとしても、それは到底相手に分らない程、廻りくどい言葉や、別の言葉や、冗談の言葉で言つたもので、而もそれが相手に通じさうになると、私は又あわてゝ忽ちそれを打消すやうな冗談でごまかしてしまふのである。

藝者ゆめ子はやつぱりこの前の晩のやうに、俯向き加減に行儀よくきちんと坐つて、「さうそんなに隅の方に坐つてないで、机の前まで來給へ、」と言ふと、一二度辭退してから私の言葉の通りにし、「何か食べない？」と聞くと、「いえ、今澤山です、」と答へ、それも二三度私が勸めて「ぢやあ、果物とサイダはどう、嫌ひ、食べる？」と聞くと、「いたゞきます、」と答へるのである。唯、その日は前の時と違つたことは、彼女はもう十七八には見えないで、二十一二の立派な、一人前の藝者に見えたことである。女はたるべく悧巧で、拔目がなくて、時々は惡いこと位企らんで、しかし成るべくぼろを見せないで、惡魔の子分位にはなれるやうな方がいゝ、と私はこれ迄屢々考へ、今もやつぱりそんなのもいゝと思ふことであるが、それと共にやつぱり着實な考は、このゆめ子のやうな素直な、そして悧巧な、正直な女が一番いゝ女なのかなア、とつくづく思つたことである、私はこんな善い女を始めて見たと思つたことである。戀は輕信の母親だといふ諺があるが、諸君、私の話を笑はずに聞いてくれ給へ。

私はそれからまだ二三日の間何するといふ用事なしにその町に滯在してゐた。その間もう大抵外の藝者は呼ばずにゆめ子とばかし會つてゐた。近いうちに、明日にも、歸ると言つてゐたので、時々ゆめ子から電話で聞き合はして來る、すると私は「來給へ、」と呼ぶ、そして又滯在を一日延ばす、と言つた風で泊つてゐたのである。その間に私の方からも無論彼女の方からも彼女の赤ん坊に就いての話は一度も出さなかつた、そして私たちは或朝別れたのである。

私は私のゆめ子に對する戀心を、實は餘りはつきりと戀戀と言つてゐると、何だか自分と自分で誇張して物語つてゐるやうな氣もされるのである。だが、汽車がいつの間にか信濃の山を下つて、甲斐を通つて東京に進むに連れて、私の彼女を思ふ心が薄れて來ないのである、そしてセンチメンタルになるのである。私は私の母の待つてゐる東京の下宿に歸ると、早速彼女にゆめ子の話を聞かせたものだ。だが、お母さん、心配は入りませんよ、その藝者には子供があるのですよ、ハハハハハ、と言つて笑ふ後から、私は又なるべく淡白な着物を着せて實は惚氣の話を彼女に聞かせたものである。それを聞く老いたる彼女の心も亦哀れむべきものなのであ

る。彼女は長い間、五六年前彼女が東京の私の傍に來て以來、始めの一二年の間こそ今にどうにかなるだらう、とたよりないながらに望みを持つてゐたのではあるが、三年四年と經つと共に殆ど望を失つてしまつて、のみならず一方ならぬ激しいヒステリイの嫁に虐待されたり、自分の持つてゐた着物をみんななくされたり、この世は長生して住むに宜しくないところだと觀じてゐたものに違ひない。それがいつどんな事をその不甲斐ない息子がし出かしたのか知らないが、今年になつてから、而もこの二三ケ月以來大分彼にも運が向いて來たやうに見える。神樣有難うございます、と思つてゐたのである。この上は、どうぞ彼によい嫁が來ますやう、その嫁は別にどんな無學な者でも卑しい身分の者でも、彼の氣に入つた者でありさへすれば、そして願はくば前のヒステリイの嫁女のやうに無道に私を虐めるやうなものでさへなければ、私はもうこの上の願はありません、と思つてゐた者であつた。だから、今私から諏訪の藝者のゆめ子が如何に大人しくて素直で、優しくそして悧巧な女であるかと聞かされた時、私がどんなにそれを何でもなささうに、別に惚れた譯ぢやありませんよ、と淡白に話したとはいへ、六十

年に近い彼女の浮世の經驗は、そのゆめ子とかいふ女、息子の大分氣に入つたものらしいな、子供があるとかいふが、それは少し困つたことだが、まあ、それも一緒に貰つて育てるとか、里親にやるとか、何とか仕樣があるであらう、と彼女は思つたに違ひないのである。そこで彼女は、その人は幾歳ぐらゐ？　ヒステリイ氣はない？　子供は男の子？女の子？　そのちう私も一度湯治かた〳〵行つて、會つて來ようか知ら？　などといふのである。それを聞くと、長い間この世に倦してなるべく自棄に出鱈目に、不逞に、味氣なく考へ馴れてゐた私も、久しぶりでこの世の甘さに泣ける氣になつたことである。

「ところで、僕は妙に變なはにかみやですから、色々世話になつてゐながら、到頭一度もゆめ子に祝儀といふものをやつて來なかつたのです。で、子供に何か玩具のやうなものを送つてやりたいと思ふのですが、お母さん、何か買つて來て下さいませんか？」

「よし〳〵、」と母は言つて、それを買つて來ては、こわれてはいけないが、何か木の箱を造らせなければいけないだらうか、すつかり綿で包んだものだらうか？　などと色々と心配して荷

造をして、これは小包郵便よりも鐵道便の方がいゝだらう、では、私が夕方散歩かたゝ、牛込の停車場に持つて行つて來よう、と言つて老の白髪を秋風に吹かれながら、その表に下諏訪町夢の家ゆめ子樣と書いた荷札を附けた小包を、私の息子も他所の藝者にたとへ僅な物でも送つてやるやうになりました、この上は私を邪魔物にしない大人しい嫁が彼のために一日も早く出來ますよう、と心で祈りながら、彼女も亦世の中は長生もせねばならぬ、私が一年前に心に願つてゐたことを神樣が直にお取上げになつて、その時死んでしまつてゐたなら、今のこの世の甘さを知らずに墓に行つたらう、と思ひながら夕方の神樂坂を下りたことに違ひないのである。

或時は又彼女は自分の下駄を買つたついでに、こんな下駄を買つて來た、と言つては私に二十歳の女の下駄を見せるのである。彼方はこれから寒い、雪の多いところなんだらう、だから日和下駄をと思つたけれど、齒の高いのにしたの、直に荷造りをして送つてやりませうね、今度は私の名にしてやらうか、と母は四十年も前の娘の時にしたかと思はれるやうな、子供らし

い首の傾げ方をして私に言ふのである。

「いや、それはいけません、」と私は唾を呑みながら、わざと快活に、「それでは向ふで僕の細君だと思ひますよ、女名前ぢやいけませんよ、」と言つて磊落に笑つたものである。

けれども、それ等に對してゆめ子の手紙はいつも餘りに淡白極まるものなのである。それは無論私のやうに裝つた淡白ではないことに違ひない、有難く存じ候、一日も早くお出で下さるやう指折り數へて待入候と書いてあるのである。二度ともさう書いてあるのである、「書簡文手引」とか、「女の文の數々一とか、そんな本の文句そのまゝなのである、だが、それ故に私は尙一層彼女に心を引かれるのである。

そして私はその年の十一月の末の頃、一ケ月ももつと滯在してゐるつもりで、この話の第一回に書いたやうに、浦島太郎のやうに勇んで、ゆめ子の町へと立つたのである。

六

さうして第二回目に下諏訪に着いた晩、私は心の中では、早速ゆめ子を呼びたい思に充ちてゐたが、それでは餘り心の中を見透かされるやうな氣がするので、女中の入れてくれた炬燵の前に坐つて、これで先づゆめ子の町に來たことだ。と海岸で朝の深呼吸でもするやうな氣持になつて、心よ靜まれ、靜まれと思ひながら、私は賴まれてゐた雜誌の小說を書き始めたのである。そして書き疲れると、部屋の南側の梯子段の下り口のところにある、半間の廊下に立つのである。そこに立つと南に向つて半間の硝子窓が嵌まつてゐて、それを通して下諏訪の町の南の部分が見えるのである。方々に風呂屋の煙突のやうな煙突が百本も立つてゐるのである、製糸工場の煙突である。その中の何本かの持主がゆめ子の父親なのであらうと思ふと、無心の煙突も憎らしく見えるのである。それ等の煙突よりもずつと近くの私の目の下に見える町々が、その中にゆめ子の家もあるところの、下諏訪の色町なのである。ゆめ子よ、健在であるかと思つて、私は又部屋の中に這入つて原稿紙に向ふのであつた。

一つの題目の原稿を書き上げてから、とも思つたし、何よりも宿屋の丈治などはどうでもいゝが、ゆめ子に彼女に對する私の心持を見透かされることが恥ぢられて、私はそこに着いてか

ら三日の間辛抱して彼女を呼ばなかつた。だが、四日目の晩に彼女を呼んだ時、私の心は彼女の顔を見るまで少年のやうに震へたものである。だが、二ケ月振りで私たちは向ひ合つて坐ると、先づ彼女が叮嚀に私の贈物の禮を言ひ、私は「お禮を言はれては閉口です、」と挨拶を返し、隨分寒いところですねとか、今年はまだこれで寒くない方なんですよとか、二人の會話は普通の客と藝者との初對面の會話の十二倍も冷淡なのである。私のはさうでない感情をさういふ衣で包んだのであるが、彼女のはそれが表面でもあり內容でもあると見えるのである。この前の時は、到頭彼女に、あることは知つてゐながら私から彼女の赤ン坊に就いての話をしなかつたが、今度は玩具や何かの事があるので、いつとなく彼女からその話をし出した。始めのうちはお座敷に出てゐても、乳が張つて來て困つたものだとか、夜家に歸つて行つた時分に丁度一眠りした坊やが目を醒ましますので、私が抱いて寢させるのである。坊やの體はそれは溫かいのですよとか、その可愛さは十二人の市村羽左衞門とでも換へ事が出來なさうに、眞に可愛いもののやうに彼女は色々と話すのであつた。私は少しばかり平らかでない心持を抑へながら、

赤ン坊よりも可愛いものはないでせうね、自分の腹から生れた子を持たない女なんてものは、女であつて女でない、女は元來男の肋骨一本から神樣がこしらへたもので、人間と獸との間位のところのものだが、子の愛を知つて始めて人間の仲間に這入れるものだと物の本に書いてありますよ、それは本當のことですよ、今こそあなたには坊やはあなたの苦の種に違ひないけれど、それはあなたの玉手箱で、金庫で、寶石で、命ですよ。僕は今のところ女房といふものは一寸も欲しいとも、それがないと不自由とも思ひませんけれども、自分の子といふものは本當に欲しいと思つてますよ。男の僕だつてさうなんです、貰つた子供なんて駄目なことです、目がつぶれてゐても、足が一本位なくても、自分がなくてはこの世に出て來なかつたところの、自分の子といふものがなくてはならないのですよ、と私はそんなことを、口で言へなくても私の十二倍も心で感じてゐるに違ひないゆめ子に、今更らしく言つて見るのである。

相表らずゆめ子は下を向いたまゝ、時々一層下を向いて點頭くのである。そして「母さんはね、」と彼女は言ふのである。「うちの母さんはそれや嗔ましくつてね、私が自分の乳が十分にや

れないものですから、半分はミルクで育てるんでせう？　それが何處のはいけないとか、あそこのは薄いとかつて、それや嚴しいんですよ、」それればかりではない、彼女は彼女の養母の話を色々と賞めてするのである。餘り露骨でない程度で、彼女が若い頃どんなに三味線や唄がよく出來たかといふことや、自分は二歳の時に貰はれて來たので本當の母さんのやうな氣がするとか、又その母さんはどんなに自分の爲を思つてくれるか、從つて嚴しく叱るかとか――私はこの文章の始めに彼女の母親が因業で、慾張りで、金の爲にはどうやら人の義理などは平氣で缺かす女のやうに書いたが、無論それはゆめ子から聞いたのではなくて、他の人々から後に聞いたことなのである。他の人の言ふのには、あんな喧しい、嚴しい人はない、ゆめちやんはそれでも自分の眞の叔母さんだからでせうが、まあよく辛抱したものですよ。御覽なさい、藝者もあそこの家で二年なり三年なり勤められたら、それだけその人間が信用が出來ると言はれてゐる位ですよ。

「それにしてもゆめちやんは、」とこれはこの物語のずつと後で出て來る小瀧といふ老妓が話したことである。彼女が言ふのである、「私はゆめちやんが未だお下げに結つてお辨當を下げて學校へ行つてる時分に、あの家に抱へられて行つたのでしたが、それからずつと四五年あの家でお世話になつてゐましたが、あゝ、夢のやうですね、學校の歸りが遲いと言つては叱られ、お稽古の覺えが惡いと言つては叱られ、女の癖に炬燵に足を出して坐つたと言つては叱られてゐたゆめちやんが、もう人の子の母さんになつてるんですからね。大人しい子でしたよ、だが、とても强情な子でしたよ、その代り、ゆめちやん、これは誰にも言つちやいけませんよと一言口止めしておいたら、誰が何と言つても口を切られても喋らないやうな子でしたよ。私はゆめちやんが身持になつたといふことを聞いた時には何遍嘘だと思つたか知れませんよ。私も迂濶ですわね、あの人が七ケ月になるまで知りませんでしたの。ゆめちやんはね、七ケ月になるまでお母さんにその事を言はなかつたんですよ、今日は言はう、明日は打ち明けよう、と思つてから二ケ月經つたと言ひますものね、いつその事死んでしまはうと、お坐敷の歸りに湖水の傍へ行つたことが幾度あつたか知れなかつたと言つてます。到頭私がその事を聞いて、私から母

さんに話して上げたんですよ、」と老妓小瀧はつゞけるのである。「そして愈よ赤ちやんが出來るとね、母さんは少しのお金を附けて、やつてしまはうと言ふんでせう、ゆめちやんはどうぞ勘忍して育てさして下さい、どうぞ人にやらないで私の乳を無駄にさせないで下さい、と色々とあつた末、それぢやあ私は知らない、お前藝者に出てお前の力でお養ひなさい、といふことになつたんださうです。ね、可哀さうに、そんなにしなくたつて、あそこのお家はお金はどつさりあるんだつて言ふんですものね、ゆめちやん一人ぐらゐ結構遊んで居られるんですから、せめて赤ちやんが乳を離れるやうになる迄、ね……」

七

でも、その頃は私は一日おき位にゆめ子と會つてゐた、少しでも原稿を書く時間を縮めて彼女と會ふ時間を長くし、そして向ひ合つて坐るとぽつり〳〵と張り合ひのない話をするだけであつた、が、私にしてはさうして彼女の顏を見て、彼女と切々の話をして、彼女と一つの膳に着くことだけで十分の喜びを感じられたのであつたし、大人しいゆめ子にしても酒を飲んで大騒ぎをしたり、直に體を觸りに來たりする亂暴な客の席に出るよりも、私の席に來る方が、蠅のやうに退屈な客ではあるが、如何程か保養になると思つてゐたのに違ひなかつた。ところが、それが一週間か十日程した日のことであるが、上諏訪の町に、その町の藝者の演藝會がこの十二月の十五日に催されるとかで、彼女の母親がその町にも藝者家を經營してゐる關係上、抱へ子に餘り藝の出來るものがゐないからといふ譯で、ゆめ子がそれに出ることになつて、彼女はこの寒いのに毎朝九時の汽車でその町に稽古に出かけるのである。稽古を終つて歸るのが午後の四時の汽車になるのである。私は妙な私の遠慮する心から、すると、今迄のやうに日のあるうちは無論彼女は隣の町に行つてゐないのだし、夜だからと言つてもさう自分だけのものゝやうに呼び附けておくことはどうか知ら、と氣が引けるのである。折から町の名產の生糸の相場は天井知らずで、未曾有の高値といふ好景氣なのだ、從つてこの町では犬も藝者を呼ぶ時なのだ。それに金と約束とに縛られてゐる私の原稿も急がねばならなかつた。午後の四時頃になると、私は原稿のペンを置いて、私の部屋の西に面した窓に立つのである、何を見ると

て立つのであるか？　ポツポツと白い烟を吐いて、上諏訪からの午後四時の汽車がこの町の停車場の屋根の下に止まるのである。あの汽車でゆめ子は稽古を終つて歸つて來るのであると思つて、私は彼女の停車場から家への通路を考へるのである。それは當然私の窓の下に一直線に通つてゐる道に來て、私の宿の下で曲つて、温泉町らしいでこぼこの町の阪の中途に建つてゐる、彼女の家に歸るに違ひない。だが、彼女を見ようとして窓に立つ私を彼女に見られることは、人の七倍も恥かしがりな性質の私には氣が引けてならぬので、私はその窓のところに坐つて、目だけを窓の緣に出して眺め又眺めたものであるが、十分待つても三十分まで待つても、到頭私は一度も彼女の姿を捕へたことはなかつた、停車場から彼女の家へもつと違つた近道でもあるに違ひないのであつた。

八

花屋旅館の私の窓の、その家と隣り合はせのやうになつた、私の斜め右手には先にも言つた料理店秋野屋の座敷が見えるのである。ところで、花屋は丁度一本の道の突當りの位置にあつたので、その道の兩側の角に、それと三角形の各々の頂點の位置をとつて、私の窓から向つて左には旅館角屋、そして右には諏訪ホテルが、私の方の位置が一段高いところにあつたので、目の下に見えるのである。毎日窓に立つて、ゆめ子の姿の見えるのに待ちあぐんでゐる私の目を、いつも必ず引く一つの部屋があるのである。それはその角屋の三階の二間を占領して、多分湯に這入つては炬燵にあたり炬燵にあたつては酒を飲んでゐるので、この寒さにも拘らず絶えず體が暑いのであらう、眞白な雪空を背景にして障子を一ぱいに開けて、いつでも一人か二人の藝者を傍に置いて、屢々取卷らしい一人の男を傍に置いて、いつも獅子のやうに大聲に叫んで飲んでゐる一人の男の遊蕩する光景である。始め私はその取卷の方の男を主人公だと思つてゐた、そして叫んでゐるのもその男のやうに見えてゐた。何故と言つて、そこと私との間は近いやうで可成り離れてゐたからで、顏の形がやつと見えるか見えないか位であつたが、よく見ると、主人公の方が色の眞黑な、五尺に足りないかと思はれる小男なのである。そして取卷の方が確に髭を生やした痩せてはゐたが背の高い立派な男だつたのである。その事を發見した

のは、或時、それはゆめ子を見ようとしてゞはなく、湯上りの體を冷ますために私が例の窓に立つてゐると、その私の姿を認めて「ワーイ、君――君――」と叫んで向ふの窓に立ち上つたのが、その獅子のやうな大聲で、そしてそれが小男の方だつたからである。

そこに、二人の時でも一人の時でも、或ひはもつと大勢ゐる時でも、必ず缺かさずに呼ばれてゐる藝者は、どうも三春家のくれ葉らしく見えるのである。そして後で聞いたことであるが、確にそれはくれ葉で、そのくれ葉を贔屓にする大聲の小男は伊那の大百姓とかで、長い間彼の女房との間がうまく行かなかつた、二人の間には子もあるのだつた、が今度愈よ全財産を眞二つに分けて、その半分を女房に、後の半分は自分が持つて家を出て來たのださうである。そして彼はもう一ケ月半ほど角屋に泊つてゐるのだが、持つて來たその女房と山分けの財産を全部そこの料理人の熊といふ男に管理さして、あの口髭を生やした立派な男の取卷といつたのは料理人の態だつたのである。連日連夜さうして遊んで居たのださうであるが、近頃、彼は誰に勸められたのか、妙な事を考へついたのである。と言ふのはくれ葉を彼の女房として身受し

て、彼女にし る粉屋を出さして、自分もそれを渡世にして送らうと計畫したのである。そこであれこれと物色した結果、兄弟で飛脚を渡世にしてゐる、角屋の筋向ひの某といふ者の家を買收して、そこの二人の獨身の飛脚に汁粉を造らへたり、出前をしたり、或ひは家に食べに來た客の前にしる粉を運ぶ役をさせることにして、勘定場にくれ葉を坐らして、自分は奥の間で風雲を見てゐよう、そしてよい機會には相場でもしよう、と斯う考へたのださうである。そして一週間ほど前からその飛脚の家に大工を入れて、それを汁粉屋に改築してゐるのださうである。

「ところがね、その方お酒飲みなんでせう、」と或晩藝者ゆめ子は、上諏訪で買つて來ましたと言つて、私に私の好物の煎茶を持つて來てくれて、それを立てながら、持前の靜かな調子で話しつゞけるのである、「二日に一遍位はその普請場に出かけて行つて、飛脚さんの兄弟も、大工さんや左官さんも、みんな集まれ、集まれと言つてね、その鉋屑だらけの中に坐つてお酒をお上りになるんでせう、だから普請がちつとも進まないんださうですよ。」

「何といふ人なの？」と私は興味を覺えて聞くのである、「主人公といふのは、あの小さい、色の黑い、獅子見たいな聲を出す人でせう？」

「えゝ、」とゆめ子は俯向いたまゝ更に俯向いて點頭く癖をして、「何でも香取權右衛門とかつて聞きましたが、よく存じません。」

そんな他所の人の噂をして、私とゆめ子とは彼女が上諏訪に通つてゐる時でも、三日に一度は一緒に御飯を食べて話し合つたことであるが、何故か、それは幾ら甘い私でも戀してゐるからと言ふばかりでなく、私の態度もさう下品ではないが、彼女の上品な顏立や、態度や、往來する度數が增すに從つて益々彼女が貞淑な女の心持を持つてゐることが見えるにつけて、私は固くなるのか、言葉使ひも女友達に對するやうに叮嚀になつて行つたものだ。そんな貞淑な女がどうしてその爲に我と我身を淵水に身を投げようと再三企てるやうなことに至らせたところの、人の子供を身持するやうになつたのか？　諸君よ、女の腹から生れた人間で、誰かこの女に石を投げる資格があるか！　それは神樣でなければ知られないことである。

だが、私が信じて疑はないことは、姦淫の罪を犯した者として、死んで彼女と彼女の子の父とが閻魔の前に引出されて、姦淫を犯した者は地獄の法として、一身兩頭の獸に墮して、魂の生きてゐる限り、その獸は針の林を駈けながら、兩方の頭と頭とが一刻も休まずに憎み合つて嚙み合はねばならぬところの責苦を受けるのだ、そら、小使の靑鬼よ、この兩人の體を一つにして、首だけをそのまゝ二つ一つの體につけて、劍の林に追ひやれ！　と閻王が宣告する時、一日に萬里を走る白馬に跨がつて、觀音菩薩が現はれて、その女を助けてやれ、その女の罪は釋迦牟尼如來が許すと仰せられたぞと言つて、ゆめ子を自分の白馬の上に抱えて、極樂の國へ連れて行かれるのは疑ひないことである。

九

或日私が宿の湯に這入つてゐると、「半子半四郎先生ですか、お正月の雜誌の小說でお忙しうございませう、しかしお退屈な時ちつとお遊びに入らつして下さい、私は九番の部屋にゐる者でございます、」といふ男があつた。四五日前から時々顏を合はしてゐた人物だが、彼はその日

始めて斯う物を言ひかけたもので、黒いたつぷりある髪の毛をまん中から分けた、少し赤ら顔で、自動車の運轉手にしたら隨分よく似合ふだらうと思はれるが、無論一寸した美男で、少し舌の短かいやうな物の言ひ方をする男である。後で知つたのだが、切塚重十郎といふ名で、何を職業としてゐる人物だか、終まで到頭分らなかつた。「青島の司令官大島大將ですな、あの方にお目に掛りまして、」とか、「實業家組合總長の春山夏吉さんですな、あの人の家の隣に、」とか色々な人間の名を擧げて、何の話をするにも悉くそれ等の名前に結びつけて說明する癖があつたが、同業者なら隨分無名な人の名でも知つてゐるが、少し方面の違つた人だと一億圓の財產家でも、大將の中の一番ゑらい大將の名さへ知らない迂濶者の私のことだから、「はゝあ、いや、知りませんが、その人が？」と言つた風な答へ方をするので、相手の切塚重十郎は私との會話の緒を見付けるのに持て餘した恰好で、今度は目先を變へて、「あなた、谷崎潤一郎さんを御存知ですか？」と聞くのである。「いゝえ、名前は無論知つてゐますが、會つたことはありません、」と私が言ふと、「私、始終谷崎さんのところへ伺ひます、」と言ふので、「谷崎潤一郎のところへ

始終入らつしやるなら、佐藤春夫も御存知でせう？」と私が聞くと「えゝ、時々お見えになります、存じて居ります、」と答へるのである。そして「私、長田幹彥さんとは京都でよく一緒にお酒を飲みましたが、面白い方ですね、」とも言ふのである。

それが始まりで、私の部屋に遊びに來たり、自分の部屋に私を女中を使に寄越して呼びに來たりした結果、重十郎と私は段々一日おき以上に往來するやうになつた。すると重十郎の隣の部屋にゐる、佐々丸四八ともすぐ知合ひになつた。四八は重十郎とは違つて隨分醜男の方で、年も彼の言ふところに依ると、「私は自分の生れ年月を忘れないやうに、親が四八と附けてくれたんです、明治四年の八月生れです、」と言ふから、その時四十九歲に違ひなかつた。彼は印刷業だと自ら名乘つてゐたが、その後彼の口振から察すると、印刷だけでは儲からないので、何でも生糸業者の名簿のやうなものをこしらへて賣りつける計畫を立てゝ、その準備にこの土地にやつて來たものらしかつた。顏中が凸凹だらけで、色が赤銅のやうに黑くて、目が一寸見付からない程細いのである。

「如何です、花を引きませうか？」と彼等と知り合ひになつた始めての日だつたか、重十郎の部屋に私が招待されて行つた時、四八が言ひ出した。無論カラ花である。が、男三人では興味がないと言ひ出して、「それぢやあ、私が藝者をおごりませう、その代り私の惚氣の丸子を呼ばして下さい。」

さう言ふ前に、私は四八と重十郎との會話の中に再三その丸子の話が出てゐたので、どんな綺麗な女なのだらう、この四十九歳の四八がもうその爲に三四百圓の金をこの町に來てから使つたといふ程の女は、と思つて窃かに期待してゐたところが、現はれた丸子を見て私は二度吃驚したことには、それはなる程、四八と似合ひの夫婦だと思はれるやうな、丸々とした、怒り肩の、縮れつ毛の、さしづめ宿場女郎と言つた風な藝者なのだ。ところが、その宿場女郎の藝者丸子は始めて見る私などが列席の場にも拘らず、露骨に四八に好意を見せないのである。「さあ、一杯やらう、」と四八がさし出す盃を、「いや、私今ほしかないの、」と酒だけは下諏訪中でどの藝者にもひけをとらないと言ふ丸子は、さういふ挨拶するのである。「まあ、さう言ふなよ、

今日はこれからずつと時間（十二時の拍子木の時）までゐてもいゝのだらう？」と四八が言ふと、「いえ、六時からお約束があります、」と凛としていふのである。「でも、もう六時ぢやないか？」「えゝ、だからもう行かなければならないのです、」などといふ會話のうちに、四八の醜い顔の表情がだん〳〵堅くなつて來るのである。何でもこの女は、この女にもやはり色男と呼ばれる者があると見えて、時々四八の座敷に呼ばれてゐる間に、一寸家に忘れ物をしたからとか、或ひは四八が醉ひ潰れてゐる間を窺つて、無論四八の玉を應用してその色男と相引するといふ事を、後で重十郎が言つたことである。田舎の下諏訪でも可成り劣等な藝者に違ひない彼女に、彼女の外に色んな藝者のゐることを、腐つても東京から來た四八に分らぬ譯ではあるまい、それにも拘らずそんな丸子を特別に贔負にする四八の心根は哀れなのである、が、この女なら大丈夫だらうと彼女に目を付けたのが四八の悲しむべき失敗だつたのである、

「女なんか抜きにしませう、さあ〳〵、三人で花を引きませう、」と私たちは言つて、それから花を引いたのである。すると四八は花を引きながら、時々口の中で「丸子の畜生、あの悪知ら

ずめ！」などと獨言ちてゐたが、突然彼は自分の家にゐる彼の女房の自慢を始めるのである。かと思ふと、彼女が一方ならぬ燒餅やきだと嘆くのである。すると又一轉して重十郎が好男子であることを羨む言葉を放つのである。その時の四八の言葉に依ると、重十郎は何とかいふこの町の藝者に惚れられてゐながら、彼の方で嫌つて振つてゐるのださうである。すると又四八はこんな嫌な町はない、と下諏訪の町を罵倒し始めるのである。私が桑名に行つた時は、あそこの藝者はこゝのなぞとは比べものにならない、そこの金太といふ藝者が私に惚れて、いまだに東京に手紙をくれるものだから、女房に燒かれて困つてゐる、と四八は變な話を持ち出すのである。さう言へば、それから後も私は彼の口からこの桑名の金太の話を何度聞かされたか知れない。だから私と重十郎とで彼に桑名の金太といふ綽名を與へたことである。

が、私たちが知り合ひになつても間もなくの事だつたが、四八はだん〳〵宿の方から不信用になつて、彼がいくら藝者を掛けても、その返事にもうふさがつたとか、ひどい時は女中に命じても返事がなかつたりするやうな狀態になつたのである。そして重十郎も同じ狀態らしかつ

た。私が彼と知り合ひになる迄は隨分賑かにやつてゐたらしいのに、彼も亦毎日ぽかんと部屋の中で口笛を吹いて炬燵に當つてゐるのは、彼は年こそ若いが四八よりは悧巧で、厭な目を見ない前に彼の方から用心して、藝者を呼ぶことを謹んでゐるらしかつた。それはさておき、しかし私が困るのは、彼の話が相變らず私に餘り愉快な印象を與へないことである。やれ、自働車を、もう二臺ばかり賣つたが、もう一臺賣らないと小遣が不自由ですとか、私の從兄弟が青島の大島大將（又大島大將だ！　一體そんな大將がゐるのか知ら？）に特に目をかけていたゞいて製鹽事業をやつてゐる、今では四五百萬圓出來たので、去年は八十噸ばかりの汽船を一艘こしらへた。半子先生、來年の春には如何です、是非青島へお供しませうか、青島の棧橋からその從兄弟のとこの船に乘つたら、一時間で彼の家に着きます。方々に案内しますよ、と言ふやうな類の話ばかりするのである。

幸ひにして、彼等は私のゆめ子を知らないやうであつた。だから私はゆめ子を呼ぶ時は、私の方からわざと彼等の部屋に遊びに行つて、そして丈治に頼んでそつとゆめ子を掛けておい

て、そのうちに彼女が來たら、女中に、お客樣ですと言はせて、私の部屋に歸つて行くことにしてゐたのである。ゆめ子の出る演藝會は十二月の十四十五の兩日であつた。彼女はそれを自分の意見にしないで「あの、母さんが先生に是非いちつしつて下さるやうに、と言つてましたの、私、恥かしいんですけど……」と言ふのである。私も行きたい心は十分あつたが、やつぱり恥かしい氣がしたので到頭行かなかつた。その十五日の晩のことだつたが、私、部屋に重十郎と四八とが遊びに來た。そして又花をしようと言ふ事になつたところで、人傳にでも噂を聞いてゐたのであらう、四八が私に、半子先生、あなたのゆめ子さんといふ方を是非拜ましていたゞきたいものですな、と言ふのである。で、私は、呼んでも宜しいが、彼女は餘り花を好かないやうですから、と斷つた。實際彼女はそれを好かなかつたし、又よくそのやり方さへ知らなかつた。「それよりも、」と私は言つた「一つ花の出來さうな藝者を、あなた方は色んな藝者を御存知でせうから紹介して下さいな、私が玉の方は持ちますから。」と、正直者の四八は一寸首をひねつて「ぢやあ、さうしませう、私にすると、丸子がいゝが、皆さんはあれをあんまりお

好きでないやうだから……」と、そして重十郎と相談して、丸子と同じ家の、喜扇といふ藝者を呼んだのである。

一〇

新梅鉢家の藝者喜扇は丑の九紫で、その時十九歳であつた。背のすらりと高い癖に、一體が骨細で、丸顔で、くる〳〵した目をした、口元の可愛い、鼻の小さく低いのも亦彼女の魅力の一つとなつて、見たところ未だ大人の骨組になつてゐないやうな恰好だものだから、十六七歳にしか見えなかつた。鼻の邊にそばかすがあつたが、白粉をつけるとそれも目に立たなかつた。髪は癖のない毛だつたが、少し赤くて分量が少ないやうに思へる、しなやかな小さな手を持つてゐた。斯う私が言つたら、諸君にも大凡想像がつくだらうが、一目で私の氣に入つた女になつたのである。

彼女も決して口數の多い方ではなかつた。だが、ゆめ子がおつとりと、どうかすると取澄ましてゐるやうに見えたのに反して、喜扇は笑はなくても快活に見え、口をきかなくても沈んで

ゐるやうに見えなかつた。一口に言ふと萬人向きのする藝者であつた。私だつて利益のためにこの二人の女のどちらを抱えようかといふ事になつたら、恐らく後者をとるに違ひなかつた。だから、喜扇は土地でも指折りの賣れつ子だつたのである。私は又ゆめ子に對するのと別の心持で彼女が好きになつて、それから二日おき位に重十郎や四八を呼んで、そして花を引く席に彼女を招いた。男三人と女一人とが炬燵の四方を圍むのである。餘り寒いと、私はどてらの上からインバネスを羽織るのである。或時喜扇も寒いといふので、ぢや、僕のインバネスを貸してあげようと言ふと、えゝ、有難う、ぢや、一緒にその中に入れて下さい、と言つて、四八などが冷かすのも平氣で、私が少々赤くなるのもかまはずに、私の袖の下に這入つて、大きに私に藝者らしい好意を見せてくれたものだ。又、炬燵に當りながら花を引いてゐた時、彼女はゆめ子とは違つて遠慮なく、札を持たない空いてゐる方の手を炬燵の中にぐつと入れるのである、と、直隣に坐つてその中に投げ出してゐる私の足に彼女の手が觸るのである。始めは、すると、彼女はその手を引込めたが、いつとなく「私の手、冷たいでせう？」と言つて、しつかりと私の足をつかむのである、「いゝ氣持ですよ、」と私は言ふのである。何と可愛い妓だらうと私は甘くなつて思ふのである。終ひに炬燵の中で私の手と彼女の手が行き合ふのである、それもいつとなく握り合ふやうになつて、終には炬燵の中でお互の手を探し合ふやうにさへなつた。

その時分のことであるが、佐々丸四八は無斷で花屋から姿を消してしまつた。もつとも一寸上諏訪までと言つて、私に、濟みませんが、今夜歸つたら直お返ししますから十圓お貸し下さいませんか、と言つて、實はそれを汽車賃にして東京まで歸つてしまつたらしいのである。女には振られ、宿屋からは虐待され、金はなくなつて、心細くなつたのであらう。だから、それからは私は重十郎と喜扇と三人で花を引いたものである。そして或晩のことである、十二時の拍子木などは夙に鳴つてしまつて、二時三時と時が過ぎてしまつたのである。喜扇も歸らうと言はなかつたし、私も彼女を歸したくなかつたのである。その時は何かの都合で、さうだ突然ゆめ子が他所のお座敷の歸りなぞに、一寸私の部屋を尋ねてくれた時に、彼女を呼ばないで喜

扇がゐるとよく思はれないだらうと遠慮して、その晩は重十郎の部屋で花を引いたのであつた。が、三時になつた時分にはみんな眠くなつて、疲れて來た上に、炬燵の火がなくなつてしまつた。これはいけない、と言つて、私は立つて私の部屋へ火を見に行つた。喜扇も一緒について來た。見ると、私の方には幸ひ僅ばかりの火があつたので、それに炭をついだりなぞして、ぢやあ、重十郎さんも呼んで來て、三人でこゝで寢ませう、といふことになつて、喜扇に重十郎を呼びにやると、やがて歸つて來た彼女の答に、重十郎さん、もうぐう〳〵言つて寢てしまつたのよ、と言ふのである。

「それはいけない、あんなとこでごろ寢をしたら風を引いてしまふ、僕、起して來ませう、」と言つて私は重十郎の部屋に向つて走り出した。ゆめ子以來、いつとなく私はすべての藝者に敬語を使ひ出した、と思つてくれ給へ。あわてた私は喜扇と二人で私の部屋で一夜を明かすことが夫のある夫人とでもさうすることのやうに考へたのか、そんな筈のある譯もないが、と言つて、そんなら重十郎が風を引くことがそんなに心配になつたのかと言ふと、無論そんなことも

さう心配になる筈もないのである。兎に角私は何といふ事なくひどく狼狽して、このところ喜扇が男で私が生娘になり代つた場合のやうなあわて加減で、震へながら、重十郎の部屋に飛び込んで見ると、彼は花札の散らばつた中に、なる程、ぐう〳〵と大いびきをかいて寢てゐたのである。

「切塚重十郎さん、切塚重十郎さん、」と私は叫んだ。だが重十郎は微かにうゝむと呻つたゞけで、一瞬間に又元のいびきに戻るのである。私は心の中で、おゝ、喜扇と二人では嬉しくて困る、困る、嬉しいが困る、とさうくり返し思ひながら、寢てゐる重十郎の肩を搖つて、「切塚重十郎さん、風引きますよ、風引きますよ、僕の部屋にお出でなさい、火がありますから、」と言つて、荷物のやうな狀態になつてゐる重十郎を抱き起した。今考へると、喜扇と二人で何故あの時一夜を明かさなかつたのだらう、と殘り惜しい氣もするが、そして私は荷物の重十郎をハア〳〵と重い息を吐きながら、二階の彼の部屋から三階の私の部屋に押し上げた。重十郎は「濟みません、ウー、ウー、」と言ひながら、私が手を放した炬燵の一角で、そのまゝ完全な會話は

一言も交はさずに、又大いびきを立てながら寝てしまつた。

「まあ、重十郎さんつたら、意氣地がないのね、」と言つて、喜扇はその可愛い顔を一層可愛らしく笑はせながら言ふのである。はア、と私は溜息を吐くのである、が、直又立ち上つて、勝手を知つてゐる二階の隅の大押入のところに出かけて、一人前の夜の物と女枕とを引擔いで、私は三階の部屋に歸つて來ると、床の間の柱にもたれて襟に頤を埋めて思案らしい恰好をして立つてゐた喜扇は、「まあ、すみません、」と言つて蒲團を下ろした私の傍にやつて來た。普段は小さい、十六七の小娘にしか見えない彼女が、その時は正體のまゝの、痩せ形だが五尺五分餘の堂々たる十九歳の藝者に見えた私は、あゝ、この嬉しい時間、長くつゞけ、と思つた瞬間、喜扇の手が私の手をきゆつと握つた。臆病な私もきゆつと握り返したが、その時一頻り大きなぐうといふ重十郎のいびき聲に私たちは一度に握り合はした手を離した。それから炬燵を中心にして、西の方に體を延ばして寝てゐる重十郎に對して、喜扇の寝床をその隣りに南稍々東にゆがめて敷き、私の寝床は彼女の隣に東稍々南に向つて延ばした。

帶だけ解いて晝の着物のまゝで左を下にして寝た喜扇と、やつぱり晝の着物のまゝで右を下にして横になつた私との間は顔と顔との距離が向ひ合つて三尺離れてゐて、それが漏斗形に下になる程狹まつて、足の先に於いて一つの炬燵で結び付いてゐる譯である。そして兩方から右と左の手を片つ方づゝ延ばして握り合つて、さあ、二時間程寝たり醒めたりしてゐるうちに、ほの〴〵と雪の町の夜が明けたのである。その二時間程の間に私は十二度も目を開いたことである。そしてその度に三尺離れて向ひ合つてゐる喜扇の顔を見ると、恰もそれが彼女にもエレキで傳はるかのやうに、彼女も又ぱつちりと目を開くのである。喜扇の目は、否顔全體がさうして眺めると、西洋の眠り人形のそれに似てゐるのである。彼女は睫毛の長い女である。兩方から目を開き合つて、見合はしてにつこり笑つて、そして兩方でそーッと目を閉ぢるのである、そしてその度毎に依然としてつなぎ合はしてゐる手にきゆつと力を込めるのである、そして夜が明けたのである。諸君、斯ういふ場面は私の三十歳になる迄の生涯に、それ〴〵の場合にそれ〴〵の女と、七度以上も出遭つたことであるといふことを參考して貰ひたい、それがこ

の話の終の別の女との場合では、その女が一歩だけ積極的だつた爲に、玉手箱の蓋が開いて、白い煙がすつと立ち上つて、私の頭が禿げた、といふのが此物語の終であるのだが、それは後のこととして、この場面に依つても、諸君に私の人物の一端が十分紹介せられたことだらうと信ずる。

一

半子半四郎さんは一體どちらが好きでどちらが最負なのだらう、ゆめ子か、喜扇か？　などと宿の丈治を始め小さな町の色町では取沙汰するのである。善良なゆめ子にしても、檢番の土間の壁に喜扇の札が花屋の札の下に下がつてゐるのを見れば心が平らかならぬのである。喜扇だつて、ゆめ子の札が花屋の下に掛つてゐるのを見ると、たとへ自分が他所の座敷に呼ばれて行く時、檢番の壁をちらりと見たゞけのことにしても、やつぱりあの人はゆめ子姉さんのものか、と心が平らかでないのである。無論藝者のことであるから、色の戀のと言ふのではないが、他所の店で買物をされた商人の殘念さになるのである。

だから、二人が讓り合つて、私が喜扇を掛けて待つてゐると、彼女から電話があつて、ゆめ子姉さんも今聞いたら明いてるやうだから、一緒に、と言つて來るやうなこともあるのである「あゝ、一緒に、一緒に、」と私は電話口で吃りながら答へることである。どちらか一人になさい、と學校の校長先生にでも命じられたら、私はどちらにしようと一寸迷ふ程の狀態になつたのである。私のゆめ子は、こんな物の言ひ方をすると、私自身にも背中がむづ〳〵するが、私の三十年の浮世の苦勞に報いるために、神樣が遣つて下された天使ぢやないか、恐らくさうに違ひない。私のやうな者だつて、プラトンの孫弟子位にはなることもあるのだ。どうして諸君は笑ふのだ？　私のやうな人間だからこそプラトン的な戀もするのだ。この後も、神樣が私にまだ何年か何十年か何百年かの壽命を下さるならば、私の婆婆には幾度となしに暴風もあらうし、山崩れも、津波も、戰爭も、色んな事が起つて私は難儀することだらう。現に始めにも言つた通り今はこれ等の事のあつた時から一年の月日が經つのである、大神の時計で言へば唯の一秒にも過ぎないこの間に、私は今暑い東京の町の隅に細々の烟を上げて暮してゐる。一年

前を思ふと夢としか思へない。今の私の心は終始蟲り勝である、だが、諏訪にゐるゆめ子を思ふと私の心は晴れるのだ、ゆめ子は私のお伽話なのだ。

色んな別々の話をするが、私は雷といふものが恐くて恐くて堪らない。この夏は殊に多いやうだ。あれが鳴つて來るとたとへ私は大臣の前で勳章を貰つてゐる最中でも、忽ち前後を忘却して逃げ出して蒲團を頭から引被つて、口を閉つて兩方の耳を抑へて平太ばつてしまふのである。私のこの恐がり方は全く尋常のものではない、と私自身もつくづくと思ふ、やつぱり前世などといふものがあつて、何か私がその時犯した惡い罪の爲に、こんな思をさせられるのぢやないかとさへ思ふ。ところで私はさうして蒲團を被つて耳を抑えながら、口の中で屹度唱へる言葉がある、丁度老人が念佛を唱へるやうに、無意識に唱へるのである。何と唱へるか？

「木曾の神嶽山は夏でも寒い、」と唱へるのである、それを雷が始まつて、終る間まで、百遍でも千遍でも唱へるのである。すると私の前には雷の代りにゆめ子が立つのである。此時ばりと雷が落ちて私が死んだら、私はゆめ子と死ぬ譯である。これこそ笑ひ話に違ひないが、「音

樂は回想である、」と言つた、諸君、英吉利の詩人の言葉を眞似て、私は音樂はお伽話である、と言ひたいのである。

一二

私は餘り感想に耽り過ぎたが、話が少し前に戻つて、私がその第二回目にこの町に來て、花屋の三階に通された時、炬燵に火を入れたり、茶を持つて來たりする女中が、この前のだつた越後生れのおむなではないので、おむなさんはどうしたの？　と聞くと、あの人は直この向ふのお醫者さんの家に奉公して居ります、との答である。さういふ女は、髪を銀杏返しに結つた二十二三の、色白の、平面の、妙に色つぽい姿態をする性質らしく、「君は？」と私が何氣なく聞くと、「私は今夜の汽車で國に歸るのです、」と言ふのだ。國はやつぱり越後で、もう三年前からこの家に來てゐるのだといふのである、「僕がこの前來た時はゐなかつたやうだが……？」と聞くと、「九月一ぱい一寸國に歸つて居りましたから、その時でせう、」との答だつた。

だから、その女中とは私はそれ切り會はなかつた。ところが、その翌朝から私の部屋に用事

をしに來る子守女のやうな、十五歳の、何を言つても「へえ、へえ」としか答へない女中が、後で聞くとその歸つた平面の女中の妹なのである。すると、その女と從姉妹に當るといふ、二十四五の右の目の邊に入墨のやうなあざのある女中が、それから二三日後にやつて來た。おたんといふのが彼女の名である。おたんはその大きな體にも拘らず、物を言つては一句毎に「おほほほほ、」とその熊のやうな黒い手を口に當てゝ、媚びるやうに笑ふ癖がある外には、何一つ厭味のない、神樣の小使見たいな善良な女であつた。そのおたんが言ふのである、「私はねえ、先生、おしよさんにだまされたんですよ、」おしよと言ふのは例の私が來た晩に國に歸つて行つた女中の名である、「だけど、おしよさんは私だけぢやない、あの妹の子の、そらこゝへ來るあの『へえ、へえ』しか言へない十五六の女中があるでせう、あれがおしよさんの妹です、あの子までだましたんです。私はおしよさんともあの子とも從姉妹になるんです、」とおたんの話はつゞくのである。

おしよの家もおたんの家も、越後の糸魚川在の有數な物持なのださうである。おたんは一度

或家に嫁づいて、今年四歳になる子もあるのである、「だが、嫌ひな男といふものはどうしても好きになれないものですね、おほほほほ、」とおたんが言ふには、去年到頭その嫌ひな亭主の家を子を連れて逃げ出して、此間までずつと自分の家に歸つてゐたのである。ところが、「私の旦那は、それや私と違つて、村でも評判のいゝ男振りなんですよ、だけど私は妙にその男が嫌ひなんです、おほほほほ、」とおたんは言つて笑ふのである、「すると、此間おしよさんが歸つて來て、「おたんさん、おたんさん、あんたさうして遊んでる位なら、私が此間まで行つてゐた諏訪の花屋といふ家、女中さんの手がなくて困つてゐるから、行つて見たらどうです。それは温泉もあつて體の養生にもなるし、仲々いゝところですよ、と言ふもんですから、……」退屈で困つてゐたおたんは直に動かされて、子供を親の家に置いてきぼりにしたまゝ、そつと默つて家を出て來たのださうである、「一寸そこ迄買物に行つて來る、おみやを買つて來てやるよ、と言つたら、私の子は硝子障子のところから首を出して、母ちやん、あばよ、母ちやん、あばよ、と言ひました、あゝ、あゝ、歸りたくなつた、」とおたんは流石に家戀しさうな顏をするのであ

る。

「君は默つて出て來たのか、赤ン坊までだまして？」と私が呆れて言ふと、

「えゝ、だけど罰が直に斯うして當りますから、惡い事といふものは出來ません、私はもう歸らう歸らうと此間から思つてるんですけど、あの子一人殘しとくのが、知らないうちなら兎に角、可哀さうでね。」

「あの子つて誰？」

「おふねッ子です、あのおしよさんの妹です、」とおたんは言ふのである、「私こゝへ來て始めて聞いたんですが、おしよさんは身持になつたので、歸つたんださうですね。その癖その子の親が誰だか分らないんださうです。だけど、ね、先生、觀音樣の申し子ぢやありますまいし、その子の親はこの花屋の中にゐるのに違ひありません。あの支配人か、あの若支配人の丈治さんか、板場の留さんか。……あの支配人だつて、お上さんに一昨年死に別れた切りで、子供は四人もありますけど、獨り者で、まだ五十といへば男盛りですものね。丈治さんだつて二十四で

獨り者でせう、留さんだつて獨り者でせう、男といふものは厭ですね。それに丈治さんには現に他所に隱し子が一人あるんださうですよ、やつぱりこゝの女中をしてた人との間に出來たんださうですがね、昨夜もあの子が言ふんですよ、あのおふねッ子がね、こゝの家はあたい何だか恐いから、姉さん歸りたいつてね、さういへば本當に何だか恐い家ですよ。……」

一三

その時分のことであるが、私は郵便局に行つた歸りに、町でバケツを兩手に下げて歩いて來る女中のおむなに會つた。おむなは二ケ月前と同じ丸々した顏をして、私を見るとバケツを路傍に置いて、白い齒を見せて笑ひながら、癖のその丸い肩を扭ぢるやうな恰好をして、「何處に今ゐるの？」と私が聞くと、「そこのお醫者樣の家に、」と答へた、「花屋を出てからずつとそこにゐたの？」と聞くと、「いえ、つい此間まで岡谷の某といふ呉服屋にゐましたの、」「ちつと遊びに來給へ、」「有難う、」と、私は彼女と別れた。その晩、夕飯の時に給仕に來た女中のおたんに何氣なく「君は前にこの家にゐたおむなといふ女中を知つてるかい？」と聞くと、「えゝ、あの

今お醫者さんにゐる人でせう？　私、おんなじ國ですもの、」と言ふ、「、さうさう、やつぱり越後だつたね、おんなじ村かい？」と私が聞くと、「いえ、私たちの村から一里ほど離れた村の人です。あの人、先生、もう幾つだと思ひます？　もう二十八なんですよ、そして子供が二人もあるんですよ、」と言ふ、私は吃驚して、「二十八は本當かい、子供は嘘だらう、」と言ふと、「何をそんなこと嘘を言ふもんですか、」とおたんが言ふには、おむなは國の方で子供を一人生んで、その子を人にやつて始めは岡谷に來たのだが、その町の呉服屋さんに奉公してるうちに、そこの息子さんの子を生んだんです。この間まで又その呉服屋さんに行つてたんださうですよ。けれどね、先月の末でしたか、その息子さんがお嫁さんをもらふ事になつたので、やつぱり厭でせうね、そこを出て今のお醫者さんのとこへ來たんださうです。いゝ人ですけど、お尻の落着かない人でね、こゝの家にも二三度も出入りしたさうですし、その岡谷の呉服屋さんにも出たり這入つたり、何でも三四度もしたさうですよ。どうも一つところにお尻が据らないんですね、それにしちやあ、いつも笑つてるね、」と私が言ふと、「えゝ、呑氣な人ですからね、おほほ

ほほ、」おたんも、彼女自身も、此上なく呑氣さうに笑つた。

色々と人の話を聞いて見ると、添寢せず、從つて生まさず、唯寺小屋に行つたやうに長こまつて、殆ど膝の上に手を置かんばかりにして坐つて、話し合つてるだけで戀をしてゐるなんて、私の外にはゐないことである。

一四

その晩だつたか、喜扇と向ひ合つた時に、私は「この二三日あのかどやの三階の、くれ葉さんのお客の加取權右衛門の聲が聞えないやうに思ふが、どうかしたんですか？」と聞くと、「さあ、その事で今大評判なんですの、」と喜扇はその可愛らしい顔に笑凹を浮べて言ふのである、「何でもあの加取さんのお金をすつかり預かつてゐたかどやの髭の生えたいけ好かない料理番の熊さんといふのがあつたでせう、あの人が預かつてゐたお金で、それを増やすつもりとかで、日歩貸をしたり、相場をしたりして大分なくしてしまつたと言ふんですけどね、實際は博奕をしてなくなしたらしいんですのよ、店の方はやつと八分通り出來上つたんですけど、肝腎

のお金がそんな譯でなくなつたものですからね、宿の拂もむつかしい程になつて來たんださうです。だけど、私あんな人大嫌ひですけど、あんな小さい、眞黑けの田舍者の癖に、加取さんといふ人、思ひ切りのいゝ人なんですね。さうか、ぢやあ仕樣がない、と言つてね、しかしもう田舍の家へ歸る譯には行かないでせう、お上さんが入れてくれないでせうからね、越前とかに材木屋をしてゐる弟さんがあるんださうです、その弟さんのとこへでも行つて當分厄介になつて來るつて、さう言つてやつと越前までの汽車賃をもつて、一昨日でしたか、立つてしまつたんですつて……」

「へえ！」と私は呆れた、「それぢやあ、くれ葉さん泣いたでせう？」

「いゝえ、くれ葉姉さん、まあ有難かつた、お汁粉屋にならなくて、まあよかつた、と言つて喜んでたわ。」だが、それに就いて喜扇が註釋して言ふには、「くれ葉姉さんは決して惡氣のある人ぢやないんですよ。だけどあの加取さんといふ人があんなにお金をかけて、あゝして色々されたもんですから、あの人のお上さんになるのも、お汁粉屋を始めるのも厭で厭でしやうがなかつたんださうですけど、くれ葉姉さんはあんな氣の弱い人ですからね、それを厭だと斷れなかつたんですね。だから、今度そんな事になつたもんですから喜んでるんですのよ、無理はありませんわ、」

「無理はありませんね、」と、「私、だけど、僕はあの加取といふ人とは話もしたことはないが、今迄は小さい、色の黑い、百姓見たいな體をしてゐて、時々獅子見たいな聲を出すので、それがこゝの座敷の硝子窓まで響くんですからな、非常に嫌ひだつたが、話を聞いて好きになつた。」

好漢、加取權右衛門はくれ葉や、髭、料理番や、角やの女中や、飛脚の兄弟に停車場まで送られて、ピイと汽車が走り出した時、「さよなら、萬歳！」と持前の獅子の聲で叫んで、帽子を振つたさうである。

一五

そして私の二十九歳の年の暮が近づいて來たのである、「今年は何十年ぶりでせう、珍しいこ

とでございます、」と雨戸を開け閉めに來る若支配人の丈治が言ふのである、「湖水がまだ凍りません、えゝ、だけど未だ分りません、一月二月の極寒になつたら無論凍ります。スケートのお客樣の入らつしやいますのも、大抵來年になつてからでございます。どうも今年は湖水のまわりの山の雪が少ないかと思ひます。あれが皆眞白になつてしまひませんと、湖水の水が凍りません、」と彼の言ふ通り、湖水のまわりの山はまだ眞白になり切つてゐないやうである。その山山の向ふに見える、木曾の御嶽山の頭は流石に氷のやうな色をして光つて見えるのである。私のその三階の窓の下を走る道の兩側には歳暮の賣出しの旗も見えるのである。

ところで、私のゆめ子を思ふ熱情の變らないことは諸君も疑はないであらう、その通りである。だがその外にもう一人喜扇を愛する心も仲々根を張り出したのである。プラトンの孫弟子なんて怪しいことである。私の隣人の佐々丸四八は東京に逃げて歸つたまゝ姿を見せないが、もう一人の隣人の切塚重十郎は相變らず私の部屋を尋ねて來るのだつた。彼が來ると、花を引くことになるのである。するとゆめ子より喜扇の方が適當になるのである。そんな譯で、二週

間前までは、まだ私が喜扇も重十郎も知らなかつた頃、そしてゆめ子が上諏訪の演藝會の稽古に通つてゐた時分には、早く演藝會なぞ濟んでしまへばいゝ、とあんなにゆめ子の體の暇になることを待つたことだのに、今は三と二との割合で喜扇の方と屢々會つた譯であつた。稀にゆめ子と喜扇とが並んで私の部屋に坐つた時に重十郎が居合はしたことがあつたが、その時彼は始めて彼女を見た譯である。彼女等が歸ると、重十郎が言ふには、「なる程、ゆめ子といふ藝者はいゝ藝者ですね、品のいゝ藝者ですね。私の知人の、御存知でせう、長野縣參事官天川地平さん、(私曰く、「(知りません、」)あの人の息子さんの奥さんの、あの人は松平杉村伯のお孃さんですがね、その人にそつくりです。並んで坐つてゐる喜扇が光を失ひますね、」と言つたことである。

「さうですかなア、」と私は自分の考へ事に耽りながら、上の空で答へた。

當時、諸君に斷つておくが、私はゆめ子に對して何の愛の報酬をも求めようとは思つてゐなかつたことである。始めは思つてゐたかも知れないが、段々思はなくなつたことである。私の

思ふには、私の方だけで彼女を愛することで滿足しよう、とまあ口で言つて見ればそんな風に考へておいたのである。實際、たとへ私が火よりも熱く、瀑よりも激しく私自身の死よりも強く彼女を戀したからとて、そして彼女がそれを感じてくれたからとて、彼女が彼女の薄情な男との間になした、子を愛する愛を奪ひ取ることも、もしくは割愛してもらふことも、それは出來ないことである。校長先生に頼んだつて、お廻りさんに頼んだつて、或ひは觀音樣にお願したつて、それは無理といふものである。私はあきらめるのである。だが、人間凡夫の淺しさで、私がそれの代りに又それを藝者喜扇に求めはしなかつたか、咄、不屈者め！　と叱る者があつたら、恐れ入りました、と私はあやまらなければならぬかも知れない。

一六

そして暮の二十五日のことであつた。

先生、今夜こゝの劇場で、町の忘年會があるのですが、如何です、お供いたしませうか？」と宿の若支配人の丈治に誘はれて、私は一人で行くのは困つたので、そんな時の退屈な連として、重十郎と一緒に出かけることにした。丁度その日も六時頃まで私の部屋には喜扇が來てゐたが、「忘年會は六時から始まるんですよ、私たちは寄附なのよ、だけど義務だから仕方がないわ。私一足お先に行つてますわ、」と言つて彼女は先に出かけて往つた。この町の藝者が總出で會に集まつて來た人々の接待をするのださうである。私たちは七時過に丈治に案内されて會場に出かけたのである。

諏訪の藝者は小瀧にくれ葉、奇麗どころはゆめ子に喜扇……

とか言ふ唄があるのである。例の善人女中のおたんが或時私に言ふには、「どうも一人として藝者らしい藝者がゐませんね。まあ、先生のところへ來るゆめ子さんや喜扇さんはいゝ方でせうけど、私の町の藝者などとは比べものになりませんよ、」と言ひ言ひしてゐたおたんが「先生」と或時私の部屋に何かの用に這入つて來た時に、「私、こちらへ來てから始めて藝者らしい藝者を見ました、小瀧といふんださうです。この町で一番だといふ話ですが、少し年をとつてますけど、それやいゝ藝者ですよ、」と言ふのである。その小瀧もこれから忘年會の會場に行つたら

見られますね、などと言ひながら私たちは凍つてかちん〳〵に固まつた道を歩いた。

丈治を先にして、私がまん中で、重十郎を殿にして、會場である劇場に這入つて行くと、棧敷平戸間一面に町の老若の男たちが、思ひ思ひの姿をして、戦場のやうな亂雑さで盃を傾けてゐる。正面の舞臺には高く赤い毛氈を敷いた上に、四五人の姉さん藝者が三味線を引きながら歌つてゐる。その前の舞臺で二人の若い藝者が踊つてゐる。確か『富士の裾野』を踊つてゐるのである。その中の一人を差して、あれが喜扇ですよ、先生、と丈治が言ふのである。さう言はれても、私の近眼のせゐか、どうも喜扇らしく見えないのである。場所が場所であるから可成りい〻加減に踊つてゐるのではあらうが、縱横無盡に舞臺の上を跳ね廻つてゐる喜扇は、どうもいつもの私の座敷に來て、口數少なく坐つてゐるあの喜扇とは別の喜扇に見えるのである。だが、その踊が濟んで、踊子等が舞臺の後に引込んだ後、暫くするとその同じ喜扇が私たちの姿を認めたと見えて、挨拶にやつて來た。そして、「ゆめ子姉さんも來てますよ、」と報告するのである。

「あの一番右の端に坐つて三味線を彈いてゐますのが、」とまだ喜扇等が踊つてゐた時に丈治が教へて言ふのである、「あれが新三春家の小瀧です。」

「ほお！　あれが有名な小瀧ですか？」と私は言つた。あんなによい藝者らしく聞いてゐた小瀧は背も高いかも知れないが隨分と大きく太つてゐる上に、素氣ない大きな目をした、鼻と口との間に決して魅力を添へないところの大きなほくろを持つてゐて、厭に堂々としたところが人を威壓するやうな、私には期待しただけに一向感心が出來ないやうな種類であるのに、私は失望したことである。

さて、それ等の踊も三味線も止んで、挨拶に來た喜扇の姿も何處かへ行つてしまつて、丈治ばかりがちびり〳〵と酒を飲みながら、彼は流石に仲々の顔ききと見えて、色んな人々と「やあ、今晩は、」などと挨拶してゐるが、私と重十郎とは酒も飲めないし、看に出された干物見たいな鯛ばかり突つつく譯にも行かず、いくら舞臺を見てゐても、どうやら藝者の餘興も先の喜扇等の『富士の裾野』で終らしいし、と閉口してゐるところへ、舞臺の前の花道のところの幕の

下からさつと私のゆめ子が現はれたのである。無論、その邊には大勢の町の人々の間に無數の藝者が酒の酌に廻つてゐて、それ等が立つたり坐つたりしてゐるのだから、可成目まぐるしい光景の眞中であつたにも拘らず、その中に現れたゆめ子のりゆうとした姿がさつと現れて見えたとは、私だけの慾目ではないのである。ゆめ子は左の手で一人の、これ又彼女と見劣りのしない藝者の手を引いて、その藝者はゆめ子の後に半分曲み加減になつてゐるので、私の方から顏はよく見えないが、ちよこ〳〵走りで器用に着物のすそをさばきながら、明らかに私の方にとやつて來るのである。二人ともどういふ譯でか變に恥かしさうに袖で顏を蔽ひながら、何事か囁き合ひながら私の方に來るのだが、何を言つてゐるのだか無論分らなかつた。もつともそれだけの間が時間にすれば一分のことであるが、私の傍に倒れかゝるやうに二人の藝者は坐つて、「先生、いらつしやいまし、」と言つて、ゆめ子が私に盃を出すと、彼女が連れて來た今一人の藝者が德利を私に出したのである。それが今の先、赤い毛氈の臺の上の、居並ぶ藝者たちの一番上座で三味線を彈いてゐた、下諏訪一番の新三春家の小瀧なのである。傍で見た彼女は、先

に遠くにゐるのを見た時とは大分私に違つた印象を與へたのである。先づその黑い、分量の多い髮の毛に私の目が引かれた。先にも見た通り大きな、可成り太つた女ではあるが、その年になるまでの藝者生活に依つてか、相當に體の恰好も定つてゐるのである。それに俯向き加減にして、目だけで見上げると、彼女の顏は可成り美人に見えるのである。成る程、やつぱりいゝ藝者なのかなア、と私は思つた。けれども、無論ゆめ子とは私にとつては比べられないのである。唯、これから時々ゆめ子と一緒に呼んで見ようと思つた位である。

そして、その翌晩だつたか、ゆめ子と一緒に小瀧を呼んだのが始まりである。何の始まりであるか？　それは後になつて自然と分ることであるが、さて、小瀧は二十九歳だから私と同じ年であつた。彼女は前の年の秋から新三春家の看板を買つて、即ち既に一軒の藝者家の主人でもあつたのだ。つい二三月前まで抱妓が一人ゐたが、それが身受けされたので、今は女中も何も使はずに、一人で暮してゐるとの話であつた。ずつと前のことだが、私が二度ばかり呼んだ女按摩がこの小瀧のことを、私との間に藝者の話が出ると、直に持出して盛んに推賞して言ふ

のには、あんない〻藝者で、そして人間としても善く出來た人はありません、と女按摩は言ふのである。前の主人の三春家のお上さんが、去年の夏腎臟炎で死にかゝつたことがあつたが、親身のものでもあんな介抱が出來るものではない、暑い夏の日盛りを彼女は毎日毎日上諏訪の病院に通つて、そして夜は夜でお座敷に出て、三春家のもう一人の抱え妓であるところの、くれ葉と一緒に精出して稼いで、それでも元もと三春家さんは餘りお金のない家ですから、小瀧さんは自分で借金して三ケ月のお上さんの病院代を工面したといふ話ですが、全くあの人は三春家の主人の命の親です、あの人は佛樣見たいな人です、と言ふのである。その位の女なら、無論い〻旦那があるんだらうな、と私が聞くと、え〻、ある事はあるんでせうが、私はまだ一度も見たことはありません。おや、按摩さん、君は目が見えるのかい？　と私が笑ひながら聞くと、おほほほほ、と按摩は顏にも似合はぬ優しい笑ひ方をして、い〻え、見えは致しませんけど、いらつしやれば分ります。何でも東京の人で、あるといふことは聞いてゐますが……。

もう四五日の中に正月が來ようといふのであるから、呑氣な私の東京の下宿にゐる母からも、一度歸つて來たらどうだ、と二三度位催促の手紙が來たので、明後日あたり歸らうと思つてゐた或晩の、夜の一時過に、私の三階の部屋に例の女中のおたんがおふねと一緒に這入つて來た。

「先生、こんなに遲く上つて誠に濟みません、」と彼女は言つて、「私、明日の朝の一番で急に國から呼びに來ましたので歸ることになりました、それでお別れに上りましたんです。就いてはおふねちやんをこゝに一人殘しとくと、又姉さんのおしよさん見たいにお腹がふくれると困りますから、私は連れて歸つてやらうと思ふのです。だからおふねちやんも一緒に挨拶に上りましたの、おほほほほ、」と彼女の唯一の色氣ある癖の、口を袂で抑えて笑ひながら、「おふねちやん、挨拶なさいな、」とおふねの方を向いて言ふ。十五歳で、獅子鼻で、客の前に出ると、「へえ、へえ、」としか外の言葉の言へない、いつでも物に吃驚したやうな顏をしてゐるおふねは、小學校の生徒見たいに、兩手を膝の上で組み合はしてぴよこりと私にお辭儀した。女ならこんな子

のお腹だつてふくれる事があるのかなア、と私は不思議に思ひながら、「さうか ぢやあ、さよなら、」と言つた。が、話好きのおたんは、それからまだ一時間以上も坐り込んで、この町は温泉があるからこんなに兎見たいに人が皆子供を生むんでせうかとか、先生、私藝者では小瀧さんが一番いゝと思ひますが、先生はやつぱりゆめ子さん？　喜扇さん？　とか、私よく下でからかはれましたわ、おたんさんは三階の先生にホの字にレの字だつて、先生、嘘ですわね、惚れてるなんてね、嘘ですわね、唯好きなんですわね、おほほほほとか、終には私はだん〳〵下を向いたり、用もないのに無暗に頬ぺたをさすつたり、君はしかし可愛い赤ン坊があるからいゝな、僕は年寄つた母親が待つてゐるだけなんだからな、とかそんな別の事を言つて對抗しなければならなかつた。

そしてその翌々日、私も一先づ東京に歸つたのである。東京の町では歳暮の賣出しで、町といふ町では樂隊が囃してゐた。私は畳寢から醒めて、寢呆けて朝と間違へた時見たいな、吃驚した顔をして、さういふ町の景色を見たものである。

一八

ところで、私が小説家であることは既に述べたが、その十一月十二月に渡つての下諏訪町の滞在中に書いた『心』といふ小説が、正月の××雜誌に出たことで、小さい町のことだから妙なことで少し問題になつたのである。といふのはその中の一部の藝者ゆめ子のことをゆみ子として少し脚色したものである。近頃の日本の小説界の一部には不思議な現象があることを賢明な諸君は知つて居らるゝであらう。それは無暗に『私』といふ譯の分らない人物が出て來て、その人間の容貌は無論のこと、職業にしても、性質にしても一向書かれてなくて、そんなら何が書いてあるかといふと、妙な感想のやうなものばかりが綴られてあるのだ。氣を附けて見ると、どうやらその小説を作つた作者自身が即ちその『私』らしいのである。大抵さう定つてゐるのである。だから『私』の職業は小説家なのである、そして『私』と書いたらその小説の署名人を指すことになるのである、といふ不思議な現象を讀者も作者も少しも怪しまない。小説家を主人公に使ふことも、私を主人公にすることも、悉く少しも排斥すべき事ではないが、その爲に小

說の主人公の『私』は、作者その人のことであつて、從つてその小說は悉く實際の出來事のやうに讀者がいつとなく考へるやうになつたことは嘆かはしい次第である。さて、その私の『心』といふ小說が『私』小說であつたために、中に書いたことが悉く事實と見られて、從つて私がゆめ子といふ人物を元として勝手に脚色したことも事實と見られて、私はどうでもいゝが、私の愛するゆめ子に多少迷惑をかけた次第である。正月になつて、その××雜誌が出ると、『ゆみ子ゆめ子？』とか、『ゆみ子はお蔭樣にて大評判に候、』などといふ差出人匿名の葉書が二三枚も私の東京の下宿に舞ひ込んで來たものである。で、私は取敢ずゆめ子に詫の手紙を出しておいた。

そして、一月の中頃に、私は又急いで書かねばならぬ原稿のために、何もそれを書く場所が諏訪に定つてゐる譯ではないが、又愛するゆめ子の町に出かけたものである。花屋の丈治は「いや、今年は實は珍しいことで、湖水がまだ少しも凍りませんので、スケートの方は大打擊です、我々宿屋連中も多少打擊です、喜んでゐるのは湖水の漁師だけです、」と言ふのである。そんなことは私にどうでもいゝのだが、何よりも先づゆめ子に會つて、詫をしたいと私は最先に思つたのだが、そんな事があつた後のことで、現に丈治も「ゆめ子がお蔭で大評判になりまして、なアに、いや、本人は內心は喜んでゐるに違ひありません、」などと言ふものだから、尙の事ゆめ子に會ひたし・會ひにくしと言ふ狀態で困つた末、ふと思ひついて、老妓小瀧を呼んだのである。

その晩、今晩は、と言つて私のいつもの三階の部屋の襖の外で手を突いた小瀧は、金屛風を背負つだやうに輝いて見えた。先に紹介した彼女の漆黑の分量の多い髮の毛を、正月のことだから島田に結つて、ずらりと裾模樣の二枚着を引きずつて、これも前に言つたと思ふが、お辭儀をして下げたまゝの顏を心持ち上げて、上目を使つた顏は、千兩に見える女なのである。さうなると恰服もあり、姿に工風もついて居り、明けて私と同い年の、だがそれが女の三十歲の落着きを具へてゐることだから、出來したり出來したりと扇子で煽いでやりたいやうな姿であつた。

私は小瀧と向ひ合つて、先つ今度の私の小說『心』に就いて、その爲にゆめ子に及ぼした迷

惑に就いて、簡單に辯解した末、どうそ君からその事をゆめ子に詫び、それに就いて彼女の身邊に惡い評判でも立つやうなら、どうぞ一言辯解の勞をとつてくれ、といふことを頼んだ、すると、小瀧は三十年增の辯舌をもつて言ふには、

「いえいえ、先生、そんな事決して御心配には及びません。私はじめて先生にお目に掛りましたのはあの忘年會の時劇場ででしたわね、あの時ゆめちやんが、突然私の傍に來て、姉さん、いらつしやい、姉さん、いらつしやい、どうしたの？　と私が聞いても、唯いらつしやい、いらつしやいと言つて、ゆめちやんが私の手を引つ張つて花道をどん〳〵走るんでせう？　そしてあの時先生のお傍へ引つ張つて行つたんですよ、何の爲にゆめちやんが私を先生の傍へ引張つて行つたんですか？……ところでね、先生と、先生、斯う言つてもお怒りなすつてはいけませんよ、と言ふのは先生とゆめちやんの事は、それや何も別にどうといふことはございませんでせうけれど、小さな町の事ですから、檢番の箱屋などの口からそれ〴〵みんなに傳はつてゐましたのよ。さうさう、私、あの忘年會の翌晩でしたか、先生のお座敷に呼ばれましたわね、

そのお席で確か切塚重十郎さんといふ方にお目にかゝりましたが、あの方先生のお友達？　いえ、あれから、先生のお歸りになりました晩だつたと思ひますが、私又花屋から掛つて來ましたので、行つて見ますとね、十番のお座敷でしたが、そのお客樣とあの切塚重十郎さんとがお友達らしいんです。あの方、話の面白い方でしたわね。で、その時、先生のお話が出て、あの方が仰るには、先生は、本當に好きなのはゆめちやんぢやなくつて、喜扇さんなんだよ、と仰つてましたよ。ところが、先生はあんな靜かな方で、喜扇さんといふ藝者はあれで仲々騷ぎ手の方ですからね、それには重十郎さんが喜扇さんによく言ひ含めて、先生のお座敷ではなるべく大人しくしてゐるやうにと注意してあつたんださうです。そして先生のお歸りになる時にも、あんな方だから口にこそ出しはされなかつたけれど、どうも喜扇さんに會つて行きたさうな樣子があり〳〵見えるもんだから、僕が氣をきかして他所のお座敷にゐる喜扇を無理に一時間だけ貰つて、そして先生にお會はししたんだ、とまあ、こんな話なんでせう。まあ、先生聞いてらつしやいませ、私は何にも知らないものですから、まあ、さうですか、とさう思つてたんで

すよ、（一寸別の話ですが、あの切塚重十郎さんて方、その翌日だつたかこゝの家の長い間の勘定もしないで逃げてしまつたんですつてね、）ところが、今年のお正月にこの町のお醫者さんの新年宴會がありましてね、私もゆめちやんも呼ばれて行つたんですよ。するとその席に××雜誌の正月號が二三冊も置いてあつて、突然あの先生も御存知ですね、世羽先生（或醫者の名）があの中の先生の小說を讀み上げられたんでせう、するとゆめちやんが眞赤になりましてね。……で、ゆめちやんは子供の時分から私もおんなし家にゐましたし、それに一緒に先生のお座敷に呼ばれたことがありますやうな譯から、後で私に、實は姉さん斯う斯う斯ういふ譯なんです、と言ふんでせう。その時私は言つたんですよ。それがね、外の人なら兎に角、半子半四郎先生と言へば、日本中に知れ渡つた先生です。噂に立てられても決してゆめちやん不名譽ぢやないつてね……」

私の背中が如何にむづ〳〵して來たかは諸君の想像に任さう。だが、ゆめ子が赤くなつたとか、ゆめ子がたとへ半日でも半時間でも私の爲に心を惱ましたといふだけで、甘くなつてゐる

私は一方ならぬ滿足を覺えたものである。だから「いや、そんな譯ですか、ぢやあ、僕は明日は大抵仕事を終りますから、明後日、明々後日は東京に歸らなければなりません。で、明後日あなたとゆめ子さんと、それから世羽丁滿さんとを松風亭にでも來ていたゞいて、一緒に夕御飯を食べませう、」と言つたのである。

小瀧は話好きな女で、それに自前の藝者であるから、いくらチヨン〳〵と十二時の拍子木が表を鳴つて通つても、主人や箱屋から迎ひに來られる心配もない身だから、色々とそれからそれと話すのである、「喜扇さんは、先生、口數の少い大人しい人ですけど、あの人、默つてゝそして時々隨分思ひ切つたことをする人なんですよ、」と言つて、私もそれはこの前宿の丈治から聞いた話だが、喜扇がこの町に來た旅役者の後を自働車で追つ駈けた話などをした、爭はれぬもので、さう言へば、私の前に默つて坐つてゐる可愛らしい喜扇がそんな情熱的なことをしようとは思へないが、いつかの忘年會の時に彼女が踊つてゐた恰好は、なる程、さういふ性質の方が現れてゐたと私に思ひ出させたことである。

「まあ、ゆめちやんの事はゆめちやんの事として、」と小瀧は云ふのである、「先生も早く奥さんをお持ちになつたら如何です、私が勸めしますわ。」

「當分そんな覺悟はありませんねえ、」と私、「だが、これで人間生身の體ですから、三十が四十になつても、いつ何處でどんな女に惚れることになるか知れませんからね、神様に任しておきませう。それよりも小瀧さん、あなたこそ女だ、女はどんなにお金があつても、縹致がよくても、男と連れ添はなければ後悔するものぢやありませんかね？　男だつてさうですが、女は尙のことさうですよ。浮氣は當坐の出來心で、その時その時に好きな男を持つのも一興ですが、やつぱり一人の男と身を固めるのが普通の人間の遣り方ぢやないですかね。」

「だけど、」と小瀧は妙に色つぽい目をして言ふのである、「私たちのやうな稼業のものは、どんなに正直に働いてゐても人が承知してくれませんから、行きたくても行きようがありませんわ。それや、私のやうなものでも、貰つてやらうと言つて下さる方は時々ございますけれど、斯ういふ稼業をして居りますと、勿體ないことですが、男に目が肥えて、先様で望まれる方は此方

で厭ですし、と言つて此方で望むやうな方は先様で手にして下さいませんし、私はもうあきらめて居ります。……だけど又先生、」と三十年增の身分を忘れて、小瀧は愈よ色つぽくなつて、二十の女見たいに襟の中に頤を埋めて、「私、自分が藝者することも、たとへ一人でも二人でも藝者を抱えて藝者家をすることも、厭あになることが始終ございますわ。」

小瀧が自ら述べたところの、彼女の經歷に依ると、彼女は東京淺草の太物問屋の娘として生れたが、幼ない時分に母親に死なれて、四歳の時に繼母を持つて、十六歳の時に父親に死なれた、父親の死ぬ時分に家の身代が大分傾いてゐたところへ、繼母が番頭と變な仲になつて、十七歳の小瀧を同じ淺草の或藝者家に養女にやつた。そしてそこの息子の彼女は嫁になることをいつの間にか約束されてゐたのだが、その男が何と思つても蟲が好かないので、二度も三度も繼母の家へ逃げて歸つて、歸る毎に邪見に叱られて養家に戻されたものだが、養家の方ではどうしても息子の嫁になりさうにないのを見越して、十九の年にこの下諏訪に藝者に突き出されてしまつたのである。その始めて抱えられた家がゆめ子の夢の家だつたといふのである。

見たところ、彼女は悪い性質の女ではなささうだつた。丁度私と同じ年だから、よくその言ふ事や從つて性質などが私に呑み込めるのである。要するに、可成り悧巧な女だが、それと共に可成り氣の弱い女でもあるらしいのである。その悧巧が少し走り過ぎて、彼女は或時は隨分惡いことまで考へることがあつたとしても、その氣の弱さが決してそれを實行させないやうな性質に違ひない。この女、下諏訪一番の姉藝者で、どんな確かり者かは知らないが、この女の着物の下の氣の弱さと情にもろさとを突つついたら、屹度落城するに違ひないと私には思はれた。だが、それはこの女と同じ卯歳の一白水性であるところの、私の仕事ぢやないのである。

一九

その翌日の午後、私はこの町の人で、この前に私が來た時咽喉を痛めたので見てもらつた以來知り合ひになつた、醫師の世羽丁滿に電話をかけて、今夜失禮ですが松風亭で夕御飯を一緒にいたゞきたいと思ひますが、御都合は如何でせうか？　と聞くと、遠慮なくお供しませうとの返事であつた。

その後も私はこの人と時々松風亭とか、秋野屋とかいふ料理屋へ飯を食べに行つたことがあつたが、彼はこの町での智識階級の一人であるためばかりでなく、私などが交際するのに可成り好都合な性格の持主であつた。彼はドクトル・デル・メヂチイネの學位を持つてゐた、「獨逸に三年程小便しに行つて、免狀を買つて來ましたが、アハ、、、、、」と言つて笑ふと、彼の醫者らしい獨逸型の顏が、そのカイゼル髭と共に忽ち形をくづして、漫畫化された猫の顏のやうに見えた。それが何とも言へず相手に愉快な印象を與へるのである。「お忙しいですか？　先生、」と聞くと、普通なら、「はあ、お蔭樣で、」といふところを、彼は定つて「なアに、門前雀羅を張るですよ、」と挨拶をした。從つて、こちらから夜分など訪問すると、必ず玄關には三四人の患者が詰めかけてゐたが、お客樣が見えたから、明日午前にして下さい、死ぬやうな人はありません、と言つて追返した。電話で「夕飯を一緒にいたゞきたいと思ひますが、」と言ふと、「直、伺ひませう、」と答へる。で、「餘り斯う屢々お呼び立てしますと、先生のみならず患者たちにも迷惑を掛ける譯ですね、」と私が言ふと、「なアに、」彼はといつも言ふことが同じだつた、「この町

には醫者が澤山ありましてな、二十人に一人位の割合ですからな、不自由はありませんよ、」と始め半分までは極めて眞面目な、持前の内所話をするやうな口調で言つておいて、言ひ終る一分前時分になると急に「ハヽヽヽ」と首を縮めて、これも持前の聲をひそめて笑ふやうな笑ひ方をした。

「晝間はこれで大抵働きますがな、夜はよく此方で頭痛を起したり、腹痛をやつたりするんですよ、」「どうしてです？」

「いや、患者が迫拂ふ爲です、ハヽヽヽ」とドクトル・デル・メヂチィネは大體さういふ人物であつた。

料理店　風亭に行く途々、

「半子先生、あなたの××雜誌のお作を拜見しましたよ、」と世羽丁滿が言ふのである、「どうも不思議な氣がしますな、あなたのやうな、お目にかゝつて話してるのと、お作との感じの違ふ方は珍しいですな、お目に掛つてゐると極く謹嚴な、寧ろ窮屈なやうな感じを受けますが、お

作は實に剛愎で、そして實にフライ（自由）ですな。」

「いや、恐れ入ります、世羽先生、」と私は言つた。道がカチン〳〵に凍りついてゐるので、馴れない私はともすると辷りさうになるのを踏みこたへながら、「世羽先生、僕は實際は御覽の通り人の十二倍も氣の弱い困り者ですが、筆を取りますと、急ち人の十二倍も氣が強くなりまして、早い話が鬼に催眠術を掛けられたやうな狀態になります。その代り俺はこんな事を思つてるのかなア、と自分で自分の書いたことに後で吃驚することがあります。だけど、何が本當何が嘘と言つても、普段したり言つたりしてる事は人間相手ですが、これでも書くことは神樣相手ですからな、その方が本當かも知れませんよ。」

「では、やつぱりゆめ子が好きだと言ふ譯ですかな、半子先生、ハヽヽヽ」

と言ふうちに、松風亭に着いた。そこではもうゆめ子と小瀧とが二十分も前から來て待つてゐた。先づ私たちの座敷に小瀧が這入つて來て、次にゆめ子の聲が長い間部屋の外でばかり聞えて、仲々這入つて來なかつたが、小瀧と女中とに勸められて、新婚の席へのやうに顏を抑へ

て這入つて來た。無論、さうして顏を合はして見れば、何も小學生や中學生ではないのだから、誰もわツと囃し立てるものもない代りに、極く平凡にみんなで話したり、食べたりして時間を過した。

「世羽先生、」と何かの話のついでに小瀧が言ふには、奧樣は如何ですか？」

私が不思議に思つたことには、この醫師の先生は今から二十年も前に妻に別れて、彼女の忘れがたみのその時二十歳とかになる、しかし生れつき聾で啞である、娘が一人しかないと聞いてゐたからである。が、今小瀧が奧さんと呼んだのは、冗談に、その不具の娘を指したものであることを後で知つた。その娘は不具ではあるが極めて賢女で、父の丁滿が茶屋遊びなどすると、その度に機嫌を惡くするとのことなのである。

「いや、」と丁滿は一寸頭を搔く眞似をして、直に眞面目な、知らない者が聞いてゐると、本當の細君の話をしてゐるのかと思へるやうな調子で、「いや、奧さんは近頃は寬大になりましたよ、」と言つたのである。

小瀧が三味線をとつて彈いてうたふのである。彼女はその三味線と共に十分自慢らしい聲を上げて、二上り新內をやつても都々逸をやつても、乃至は外の一寸した端唄をやつても、その文句が皆「いふにいはれぬ好いた仲」とか、「人の噂が何やら彼やら」とか、うつかりしてゐる世羽丁滿にはそれと氣が付かない迄も、私とゆめ子との顏を時々その大きな目で見比べながら、さういふ唄ばかりうたふのである。ゆめ子は俯向いてゐるのである。「ゆめちやん、何かおうたひなさいな、」と小瀧が言つた時だけ、「えゝ、」と言つて顏を上げて、そして直に俯向いてしまふのである、私は嬉しいのである。と、

「日本の唄は皆亡國の調を帶びてますね、」と突然世羽丁滿は二三盃の酒に眞赤になつた顏を振つて、例のひそ〳〵聲で何か大事件かなどのやうに言ひ出すのである、「いや、斯ういふ唄に限らずですな、どんな陽氣な文句の唄でも、斯う節だけ聞いてゐますと、そら駈落しろとか、いつその事心中してしまへとか、さあさ、何でもよいわいな、つてな事ばつかり言つてるやうなものですね、さうは思ひませんか、半子先生？」

「全く、その通りですな、世羽先生、」と私は言つたのである。

で、十二時の時間と共に、松風亭を出て、私が丁満を彼の家の前まで送つて行つて、花屋の自分の部屋に歸つて來ると、いつの間にか松風亭からゆめ子と小瀧とが來てゐて、火鉢や炬燵の火を調べたり、寢床を敷き直したりしてくれてゐる最中であつた。「もう時間も遲いんだから、かまはずどうか歸つて下さい、」と私が言ふと、「さうさう、ゆめちやん、」と小瀧が言ふには、「あなた、赤ちやんもあるし、母さんが喧ましいから、御免蒙つて一足お先に。私、後をちやんとしときますから、」で、ゆめ子が歸つてから、小瀧は又お尻を据ゑて、彼女が歸つて行つたのは二時近くであつた。

その翌々日、私は出來上つた原稿を持つて、やつぱりこの町はいゝ所だ、今度東京へ歸つたら、荷物などを少しまとめて、半永久的の準備をしてやつて來よう、さよなら、愛する下諏訪、と言つて東京に歸つたのである。

又汽車が信州に向つて走るのである。前の時から三週間と經たない二月の始のことである。丁度私がさうして第四度目の信州行の汽車に乘つた時、同じ箱の中で、「やあ、半子君、君はもう向ふに行つてるんだと思つて、僕、これから二三日邪魔する豫定で、君のとこへ出かけようと思つて、行くところなんだよ、」と言つて私の前に立つた男があつた。同じ職業をする私の友達の地引俊吉といふ男である。彼と手を取つて、その翌朝早く下諏訪の町に着いて、旅館花屋に乘り込むと、いそいそと玄關に出て來た丈治が、いつもの三階の部屋に私たちを案内して、例の西に面した窓を開けながら、「半子先生、今年は到頭湖水が凍りませんでしたよ、」と、この大男の若者は湖水のことばかり氣にしてゐる樣子である。

その晩、無論ゆめ子を呼ぶと、私の小説『心』を讀んでゐた俊吉は、彼一流の黄色い聲を張り上げて、「やあ、これが有名なゆめ子さんか、いや、これは始めまして、お名前は兼々……」などと、長い間の放蕩で練り上げた調子で言ふものだから、大人しいゆめ子は徹頭徹尾困り切つてゐた。で、私はこの前の切塚重十郎と同じく、俊吉の席にゆめ子を呼ぶのは氣の毒だと思

つたので、氣を利かして、その次の日からは小瀧を呼んだのである。小瀧は無論俊吉を十分相手にしたばかりでなく、例の遥り四方山話が盡きないと、一時が二時までも遊んで行くのである。そして三日目の晩の八時に俊吉が東京に歸つて行くのを、私が、彼女を私の部屋に殘しておいて、送つて行つて歸つて來て、氣の拔けたやうにぼんやりと炬燵の前に坐つてゐると、それを隔てゝ私と向ひ合つて坐つてゐる彼女が、「先生、急にお寂しくなつたでせう？」と變にセンチメンタルな調子で言ふのである。

「大いに寂しくなりましたね、」と、だが私もそれに應じて、色々寂しい場合の話をしてゐるうちに、次第に夜が更けて行くのである。すると、小瀧の三十歳の顏が、二十の娘のやうな媚を無理に裝つて笑ふのである。だつて、恐らく私も三十歳にもなつて、十八の少年のやうな優しい表情を造らうと骨折つたのに違ひないのである。「もう隨分遲いんでせうね、」とどちらかゞ言つた時は實際もう二時を過ぎてゐた。が、「遲いやうですね、」と言つた切りで、又別の話題を兩方から無理に探し始めるのである、「寒いでせう、」「いゝえ、」「眠いでせう、」「ちつとも」そして

ほのぼのと夜が明けたのである——私はこの話を書き始めて暫らくした時、これは飛んだ話を始めたものだと思つたことである。小說家なんて、いづれ身を切つて賣るやうな稼業には違ひないが、それにしてもこれはあんまり見當違ひな話を始めたものだと後悔しながら、五十枚書き、そしてつい百枚になり、斯く長々とつゞくのである。これは大正何年の小說の最も惡い見本であるかも知れない。これだけで切り上げても、先の『私』小說の流儀で言ふと、主人公半子半四郎を代表するこの小說の作者の罪は鞭に値するかも知れない、恐縮しながら私はこれから後をなるべく簡略に、早々に話の切だけを付けて筆を擱かうと思ふ。話半ばだが、寬大なる諸君の寬恕を乞ふ次第である。——

ところで、その晩はまだ私と小瀧との間に何の事もなかつたらう、と言ふことは、これ迄屢々說いた私の性質から、諸君は十分察してくれるだらうと思ふ。だが又、さういふ狀態が、その翌日か、その翌々日か、兎に角近い日に於いてどういふ結果に導くかといふことも、誰も想像するに難くないことである。

私は先に藝者小瀧が下から上を見上げた時は、仲々美人に見えるといふことを屢々諸君に紹介したが、ところで、その反對に彼女を心持ち下の方から見上げる位置に立つと、頰骨が出てゐて、きめが粗くて、三十歳といふ年に嘘のないことはその後知る機會を得たが、何と三十五歳以上にも見えるのである。私は彼女とさうして特別の仲になつてかちは、屢々心の中で計り事を廻らして思ふには、これは堪らない、早々東京に歸つて、彼女に手紙を遣つて、僕今まで君に隱してゐましたが、實は言ひかはした女があるのです、さよなら、と言つてやることにしよう、さう思ひながら、町に芝居が掛つたと言つては彼女と共に行き、隣の町に面白い活動寫眞があると言つては彼女と共に行き、そしてそれも始めのうちは必ずゆめ子を誘つたが、私にしてはさういふ風になつて小瀧が如何にもゆめ子を他人扱ひにするのを見るのが辛くて、終には誰か連れを誘ふにしても、くれ葉とかその外の藝者を誘つたものである。

或時、私と小瀧、そしてゆめ子との三人で芝居を見に行く約束をしたところが、ゆめ子が少し遲れることになつて、私と小瀧とで一足先に出かけたのである。すると、丁度喜扇が來てる

て、私たちの所へ挨拶に來たので、まあ、お坐りなさい、と言つて棧敷の小さな木の炬燵の三方を三人で圍んだ。どうも二人以上の人數で喜扇と私とが炬燵に手を入れると可笑しなことになるのである。といふのは、その芝居の煎餅のやうな掛蒲團の下で、彼女の手と私の手とが會つて、それから大凡二十分程の間、遲れて來たゆめ子の姿が見える時まで、何食はぬ顏をして握り合はしてゐたことである。「あゝ、ゆめ子姉さんが入らつしたわ、ぢやあ、さよなら、又、先生、さよなら、小瀧姉さん、」と言つて、喜扇は自分の席をゆめ子に讓つて元の自分の席に歸つて行つた。

喜扇といふと、もう一度、或時彼女とそつと約束して、なるべく人の目に付かない或料理屋に一緒に行つて、私の流儀でそこに午後の四時頃から十二時まで、三味線を引いたり話したり、又、

「先生、」と喜扇が、「みんなの噂では先生のとこへ小瀧姉さんがお嫁に行くといふ話ですが、本當ですか？　噂と言つてもそれは小瀧姉さんがみんなにさう自分で言つてるんださうですよ。」

「そんな話があるもんか？」と言ひながら私は赤くなつて、「僕は喜扇さん見たいな人が好きですよ。」

「だつて、私見たいなもの、」とこれも亦不正直者ではないところの喜扇が言ふのである、「それに私、さうなると、小瀧姉さんなんかと違つて、何と言つても抱えられてる身分ですから、先生に隨分お金の御迷惑をかけなければなりませんわ。」

だが、そして私と喜扇とは別れた切りである。ところが、私の最も親愛するゆめ子とは？それは私の方からも時々呼び、又小瀧のゐない時にも呼んで、呼んでゐる最中に突然小瀧がやつて來て、可笑しな睥み合ひ見たいな場も見た位であるが、彼女は私と小瀧のことに就いては一言も、何にも言はなかつた。惚れた惚れぬは別として、町では私とあんなに評判が立つてゐたのを、それを急に横合から小瀧が取つて行つたといふ事になると、はしたない色町の者どもは厚かましい小瀧を攻めないで、大人しいゆめ子を嗤ふだらう。だが、私のゆめ子はそれに就いては何にも、私には無論のこと、外の誰にも、時としては無遠慮な者があつて、ゆめ子さん、

一體どうした？と聞いても、私、何にも知りませんわ、と彼女は俯向いて半分聞える聲で言つたであらう。

三度ばかり、私が一度彼女の赤ン坊を見たい、見たいと言つてせがんだので、彼女は彼女の赤ン坊を連れて來たことがある。「ちつとも、ゆめ子さん、あなたに似てゐませんね、」と私が言ふと、「さうね、」と傍にゐた小瀧が引取つて言ふには、「ゆめちやんにちつとも似てないのね、お父さんそつくりね。」私は小瀧とそんな不屈な事になつて、ゆめ子にそんな恥を與へた後でありながら、その言葉を針の如くに感じたことである。或時は又彼女は、一寸母さんの用事で二三日甲府まで行つて來ましたの、と言つて、さういふ風にしてゐるとどんなにしても藝者とは見えないところの、髪を束髪に結つて、對の大島の着物に羽織を着て、「これをついでにお母さんに召上つて下さるやうに、お送り下さい、」と葡萄のお菓子を右手に、赤ン坊を左手に抱えて來たこともあつた。彼女は私に、小瀧が來て以來、一層天使に見えるのである。

丁度小瀧が來てゐない時のことであつた、彼女が子供に飲ませる牛乳を下の臺所へ溫めに行

つてる間、私は彼女の赤ン坊を、坊や、よしよし、と外に何にも言ふことを知らないものだから、そんなことばかり言つてあやしながら、私は例の西の窓に立つて氷のやうに光つて見える御嶽山を眺めたり、よくそこで獅子の聲を張り上げてゐた加取權右衛門のゐた角屋の三階の部屋の方を見たり、又は北の窓に立つて、そのうちの何本かゞこの赤ン坊の父の物であるに違ひないところの、生糸工場の百本の煙突を眺めたりして、抱いて歩いてゐると、その中にどうしたのか赤ン坊が急に泣き出して泣き止まないのである。あんまり泣くものだから、半分温まつた牛乳の瓶を持つて、下から上つて來たゆめ子に、「さあ、母ちやんが來た、母ちやんだ、」と言つて渡すと、赤ン坊は私の着物の前に小便を一合ばかりかけてゐたことである。

二

さうして、半永久的なぞと意氣込んで出かけた私の第四回目の下諏訪の滯在も、やつと二ケ月程ゐた後、四月の始めのこと、人には私が何かを得たと見えたかも知れない。だが私は實に何かを失つた心寂しさを感じながら、引上げることになつたのである。雨の降る晩のことで、一

雨づゝ暖かくなる春の雨だらう、私が乘る汽車の着いたプラットフォームに小瀧と私のゆめ子が送つて來てくれた。私たちが停車場に着いた時、もう汽車が出かゝつてゐたので、「さよなら」と言つただけで、外に何の言葉を交す暇もないうちに、呆氣なくピーと汽車が出てしまつたものだから、小瀧の傍に立つてゐると何と初々しく見える私の親愛なるゆめ子が、恐らく口の中で「さよなら、」と言つてだらう、一寸目を上げてそして俯向いた顔を、私は動いて行くプラットフォームの柱と一緒に、汽車の窓から一瞥して、そして別れてそのまゝ會はぬのである。

ゆめ子よ、私のやうな、そして又君の子の父のやうな、人間のそれではなく、變りない天地の恵み、いつ迄も君にあれ！

さて、この物語の始めに、去年の九月にはまだ獨身であつた私が、今はもう私の女房を持ち云々と書いたことを、諸君は覺えてゐるであらう、それは私がそれから東京に歸つた半月後に、信州からやつて來た藝者小瀧のことなのである。

尚、書き洩らしたが、四度目に私が花屋に行つた時、私がそこに始めて行つた時會つたところの、二人の隠し子を持つて、二十一二歳にしか見えない實は二十八歳になるところの、越後生れのおむなが又醫者の家を止めて來てゐたのである。そしてその同じおむなが小瀧に頼んで、私の家に女中に來たものである。が、彼女は東京に來た三日目に、おたんの所謂お尻の落着かないといふ特長を遺憾なく發揮して、私もう下諏訪は厭ですけで、岡谷に行きます、と言つて東京を去つてしまつた。

そして、案じた通り、浦島太郎は一百年と言ふが、私のは一年も經たないことだのに、私の前にふーツと烟が上つたかと思ふと、三十五歳以上に見へる三十歳の小瀧と、もう來年あたり頭がちやびんになりさうな三十歳の私とが、淺間しや、先月だつたかも、雜誌○○に「新婚の半子半四郎氏の家庭」などと言つて、並んだ寫眞が口絵に出されたものである。

（九・八月、）

大正九年十二月十日印刷
大正九年十二月十五日發行

「美女」
定價貳圓

著者　宇野浩二

發行者　東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社アルス代表者　北原鐵雄

發行者　東京市神田區中猿樂町十五番地
鈴木泉藏

印刷者　東京市小石川區久堅町四五番地
山本源太郎

發行所　東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社　アルス
電話九段二一一六九番
振替東京二四八八八番

版權所有

槐多の歌へる

山本鼎氏序
小杉未醒氏跋
山崎省三氏編
村山槐多氏著

有島武郎氏が近時日本に現はれた稀有の文獻と激賞せられた一青年畫家の驚嘆すべき遺書

豐麗な天分を抱きながら惜くも二十四歳で悲壯な最後を遂げた美術院々友村山槐多氏の詩歌感想等を收めたのが本書である。彼は最も勇敢に藝術に向つて突進した。彼は火の樣な戀をした。彼は絶えず異常な性慾に苦しめられた。彼はよく飲みよく描き、よく歌つた。さうして世にも不思議な數多の勝れた作品を殘しながら忽然としてその天才的短生涯の幕を閉ぢてしまつた。本書を讀む人は誰れでも彼の卒直さと力强さと魔法の樣な怪しい美しい情想に魅了されて驚嘆の聲を惜まないであらう。

——四六判總布製箱入——

定價二圓五十錢　送料十四錢

クロポトキン原著

露西亞文學講話

馬場孤蝶氏
森下岩太郎氏 共譯
佐藤綠葉氏

露西亞文學を論評紹介して精到剴切、唯一無比の世界的名著を見よ。人間苦の暗黑裡に無數の寶玉を藏せる近代露西亞文學はこの大思想家の深刻なる人生觀と犀利なる藝術觀を透して玆に廣汎精密なる一大烏瞰圖を現出す。露西亞文學の過去現在及未來を暗示せる一大名著は即ち是也。

廣川松五郎 裝幀——四六判總布製箱入美本

定價二圓六十錢 送料十二錢

白秋詩集 第一卷

全二卷
第一卷 定價一圓八十錢
第二卷 定價二十錢
送料二十錢

白秋氏の全詩を盛れる六百有餘の燦然たる美本

明治大正の詩歌を代表する巨匠白秋氏の全詩集成る。本書第一卷は青燈集、赤い鳥小鳥、大悲集、畑の祭、雪と花火の五集三十二章總詩數實に參百有餘篇を收むるものにして、未發表の近作全部を包含するもの也。純情涙を流すべき小唄あり輕快歌ふべき俗謠あり、天眞自ら成せる童謠あり、法悅光明の歡樂境地を歌へる短唱小曲あり、幽玄深遠なる象徵詩あり印象の筆觸鮮らしき景物詩あり、自由奔放なる散文詩體あり各種の詩風交錯して燦然絢爛曾て見ざるの壯觀を呈し渾然美妙の一大交響樂を形成す。本書は實に新鑄ポイント活字を以てせる六百餘頁の彬然たる大詩集にして、恩地孝四郎氏の裝幀及扉畫眞に淸麗高雅藝術の士の愛誦すべきもの、書架に傳ふべきもの、本書を措いて何を他に求めんや。

中判箱入美本——恩地孝四郎氏裝幀

定價貳圓八拾錢 送料拾貳錢

抒情小曲

生と戀

三木露風氏著

露風氏の小詩は、純麗のうちに無限の悲哀をひそめ、幽婉のなかに一脈憂愁の陰影を漂はす。其韻律のなつかしさは春晝戀人のさゝやきの如く、あるはまた黄昏草原に響く角笛の音にも似たり。本書は氏が生と戀の惱を歌へる小詩百數十篇を收むるものにして、深碧の海底に輝く眞珠の光さながらに、ほのかなること限りなし。人の世の悲みを知る人々よ、この美しき一卷に限りなき悅を求め給へ。

小形箱入黑羅子表紙——黄川松五郎氏裝幀

定價壹圓八拾錢　送料六錢

SOI
8